
神葬具 † AVENGE WEAPON †

井戸 命火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神葬具 +AVENGE WEAPON+

【Zコード】

Z0111S

【作者名】

井戸 命火

【あらすじ】

【主人公最強物、ハーレム物です。生々しい描写も含むので、お気をつけ下さい】

神葬具。それは、人間が神を葬る為に使う道具である。
人間への裁きを宣言した神。それに遣わされた翼持ち、天人。
軍事兵器も利かず、破滅の一方を辿るかに思われた人間達は、とある武器を発見した。
天人の死体から武器を奪取する刷り込み。

そして、それにより得られた天人に對して絶対的な力を發揮する武器、神葬具。

神葬具使い最強の主人公は『対天人育成用教育学科』初の女子学園への編入を決められ、いきなり女子だけの場所へ放り込まれることになる。

人との関わりを好まない彼だが、他の神葬具使い達と接することで守る意味を知る。

大切な者を奪われた少女達と記憶喪失の少年は、神との激闘に巻き込まれていく。

絵師のあおクマさんに挿し絵を描いて頂いています。
挿し絵がある話には【挿し絵】と表記しています。

00『見限られた世界』【挿し論】

満月が似合う夜のセンター街。俺の目線の先には、道路で毅然と佇む少女がいる。

綺麗な子だ。長く、風に靡く飾りのない金髪。所々破けた服から覗く白く滑らかそうな肌と、スカートからスラリと伸びた脚。目の前の敵を見据える鋭い瞳。きっと彼女を見れば、通りががつた男は絶対に振り向くだろう。

『× & amp; · % “ \$ % & amp; · ¶ \$
ツツツツ！』

体が痺れる程の怒声。地響きで揺れるコンクリートの地面。

少女が対峙している超巨体の巨人は歩道に置き捨てられた車を手で掴み、紙のように握り潰す。石で造られたであろうその体の重量は凄まじく、歩を進めた後のコンクリートがそれを物語る様に無残に割れる。

車を握っている手とは逆の豪腕が、少女に振り上げられたのを見て、俺は更に走る速度を上げた。

「つけ、間に合つか！？」

距離は遠い。気付いたのが遅かつた。もう少し早ければ、割つては入れたかも知れないのに。

彼女は自殺願望もあるのか、その場から一步たりとも動かない。逆にその肝つ玉を尊敬したいくらいだ。仮に自殺するにしても、普通ならあの巨体を目の前にすれば脚が竦むし、逃げようとする拳動くらい見せるだろう。

少女にはそれがない。まるで、振り下ろされる石の豪腕が天から

の贈り物かのように、佇むだけ。

まさか立つたまま意識を失っているのか、こちらからの呼び掛けにも反応しない。奥歯を噛み締める。また守れなかつた。また、目の前で人が死ぬ。今度は、若い女の子が。

無意識に手を伸ばした。届かない距離にいる彼女に向かつて。石の豪腕が少女に向かつて無慈悲に振り下ろされる。奇跡的に拳が狙いを外す、何て事はなく、目に飛び込むのは、少女に突き迫る巨人の拳。

「来なさい、神葬。分け隔てなく包み込む風をここに」

> 30079 — 213 <

「我が名は天使ラツィエル。神の決定により、人間はこの世界に必要な物と選定されました。よってここに、武力による人間の駆逐を通知します」

30年前、あの出来事が起こるまで天使は慈しまれる存在だった。紅い翼を生やした純白の西洋甲冑を大量に引き連れて、天使は人間に宣告したのだ。神の意思による人間の清掃作業を。

人間は鎧を纏つた翼持ちを、嘲笑いながら皮肉交じりに『天人』と呼んだ。それもそうだ。天人達は槍や剣と、今では武器になり得ない代物を掲げ、人間界に攻め込んで来たのだから。

一見、その装備から人間の一方的な戦いになるかと予想された戦争。だが、想定は覆された。

天人の鎧は強固で、戦車の大砲でも吹き飛ばない。傷は付くが、そんな一体に対して戦車一台なんて到底無理な話だ。なんせ同じ者が何も無い空間からわらわらと群れを成して襲つてくるのだから。無力な物と思われた武器も、一薙ぎすれば何十の首が飛び、天人

を10体倒したと思いきやこちちは軍隊の一個中隊が壊滅。力の差は歴然だつた。

天人の脅威はそれだけでは無い。

天人が破壊活動を行つた場所は例外無く、凍りついたかのように雪色で染まる。研究者がその白を調べようと土地に足を踏み入れた瞬間、体が凍り付き、遂には彫像の如く固まつてしまつた。

雪色に対する解決策が無い現状では、制圧された場所は元に戻らない。通称『凍つた土地』の出来上がりである。

日本は被害を受け、北海道が既に白く染まつてゐる。それでも、随分マシな方で、アメリカと中国はこの白で本土の大半を奪われ、為す術無く後退。

人は天人に恐怖を植え付けられ、世界はこのまま終わるかに思われた。

そこで全ての国が打ち出した計画。

対天人育成用教育学科を全ての学校に取り入れさせること。確かに、ただの人は太刀打ち出来ないが、対抗出来る手段が見つかり、その素質を持つ者を集め、訓練しようというのがこの計画の目的。その手段が今、固唾を呑んで見守る人々の面前で行われている。

厳しい戦闘中に死んだ、傷だらけの天人の死体。装着した鎧は所々が粉碎され、憎々しく思つてゐる人でさえ、哀れに感じる外傷。もう、どんな物でさえ生きているなら息を吹き返しはしないだろう。実験室のような薄暗い空間の中心に寝かせられた天人の亡骸に、まだ幼い子供達が順々に手を当てて行く。その光景は、『冗談の利かない踏み絵のよう。

代わる代わるに子供達が手を当て、何も起きてることに安堵する

者もいれば悔いる子供もいた。

順番が回つて来た少女が前に歩み出て、恐る恐る手を伸ばす。当たり前だ。人で無いとしても、それは列記とした死体。怯えない方がどうかしている。

「ひつ……！？」

少女の手が天人の亡骸に触ると、死んでいる天人の体が光りを発した。少女が驚き、手を離そうとすると動かないの箸の天人がその手を掴む。

周囲がざわつき、その少女が泣き顔を浮かべた時、天人が兜で隠れていらない口元に微笑みを浮かべた。

突如、天人の体から現れた溢れんばかりの光が少女の腕を覆つっていく。まるで色が付いた風が腕に巻き付いているかのような光景に誰もが息を飲む。

光が弾け、皆が少女を見るとその体躯に不釣り合いな古めかしい大剣が握られていた。代わりにそこまで横たわっていた天人の姿はどこにもない。

『刷り込み（インプリンティング）』

人間が一生に渡り一度しか行えない、言わば天人ととの契約行為。

天人の亡骸から情報を奪い、その天人が扱っていた武器を体に刷り込む。それにより、刷り込まれた天人が扱っていた武器を呼び出すことが可能となる。

刷り込みが完了した後の亡骸がどこに行つたか、見当もつかなければ、刷り込んだ武器がどこから出現するかもわからない。謎だらけの行為である。

共食いという表現が正しいか、刷り込みにより生み出された剣や槍は天人の体を安易に断つ。

呼び出された武器は使用者の体力、精神力を食い、それが限界に

なるか所有者が意思で返すまで現界し続ける。

何故、天人は刷り込みを許すのか。そして天人が使っていた武器を刷り込みで呼び出せるようになるのか。國のお偉い方も分かりかねている様子。

言えることとすれば、天使の体から作り出された武器は、皮肉にも悪魔の兵器だった。

そして刷り込みで天人から受け継がれた武器を『神葬具』^{アベンジュエポン}という。元々、生前の天人が使用していた物で、稀な例で一人の天人から剣と槍とか斧と弓なんてこともあるが、限り無く0に近い。全世界で両手の本数満たない例である。

その説明通りに通常、1人につき神葬具は1つとされている。

今まで現れた神葬具は大きく分けて『剣』『槍・鎌』『弓』『盾』の四つ。近代兵器とは違い、趣向品として扱われそうな、西洋武器のみである。

剣にも大剣や細剣があるのだが、それを言つていたら切りがないので省略。

これらの武器は例外無く天人に絶大な効果を發揮する。弓は弓で空で引き絞ると光の矢が出現して相手を射抜くなどその武器その武器によつて現れる効果が違う。属性なんてものも出て来たから更に驚きなのだが、結局は殺しの道具だ。

そして神葬具を手に入れた者は男女関係なく対天人育成教育学科に送られる。

そこで学びながら近くで天人が出現したら急行、直ちに撃退。そんな命の紙一枚分くらい横を鎌が振り子でゆらゆら揺れ続けている、そんな状況に晒されるのである。

確かに今現在、普通に働くよりも良い暮らしは出来るが、それでもハイリスクローリターンといわれている。

それは何故か。

戦場に出て10人中3人が死ぬ。そんなことが週一程度の期間で起こる。

つまり死が目と鼻の先に仁王立ちでそびえているのだ。

00『見限られた世界』【挿し絵】（後書き）

> i 2 8 9 6 8 — 2 1 3 <
練りに練つた学園ファンタジーです。
楽しんで頂けたら幸いです。

01『衝突、土塊の天使』

「来なさい、神葬。分け隔てなく包み込む風をここに」

呼び声に応えるかのように、産声を上げながら風が突き出された巨人の拳を包み込む。

巨人の拳が爆風で塞き止められ、尚吹き荒れる暴風に遂には石造りの巨体が宙へ浮く。周囲にある建物が、電灯が音を立てて悲鳴を上げ、大型台風が上陸したかのような突風に、堪らず膝をついた。それから緑色の風が少女を覆い尽くすように集まり、衝撃波を伴つた目を見張る程の爆発。限界を迎えたガラスは割れ、石や土が入らないよう腕を十字にして顔を隠す。

吹き荒れた風が和らぎ、やっと視界が開けると、先程まで巨人の目の前に立っていた少女の姿が忽然と消失。巨人は破壊対象を見失ったからか、戸惑いを隠せない素振りで一つ目の顔を忙しく動かしている。

少女の姿を探す為、視界を巡らせている最中、鈍く輝く一点の光が目に止まる。

巨人の後ろの崩れ掛けた歩道橋、そここの手摺りに立つている人影。人間には到底不可能な、瞬間移動と呼ぶに相応しい速度で移動したのだろう。闇夜で一層際立つ金色の髪を確認して、安堵の息を漏らす。

歩道橋の上で動きを見せず、巨人の出方を窺っているのかと思いきや、それも束の間、人影が脅威的な脚力で跳躍。そして、宙を艶やかに舞う少女の足が輝く。白く、そして眩しいほどに輝いて風を纏う。

ツツツツ！』

先程までは怒声に聞こえていた巨人の咆哮が、言葉にならない悲鳴に変わったように思えた。彼女が飛び上がり、振り被つた見事な踵落としは巨人の脳天を見事に捉えている。

石造りの頭が欠けた巨人がぐらついた瞬間を狙い、地面に着地した彼女は一回転しつつ巨体の軸足に回し蹴りを見舞う。

痛恨の一撃で横倒しになるかと思いきや巨人が踏ん張り、コンクリートに足を減り込ませた。ゴーレムと言つても下級なのか知識が浅はかで、自分で自分を縛り、身動きが取れなくなってしまう。

絶好の好機を逃がさず、彼女はまたも驚異的な脚力で跳躍。

空中で振り被つた回し蹴りを巨人の顔にぶち当て、衝撃で遂には巨体を押し倒した。

「
……解放」
アテンンド

彼女の足に装着している脚鎧レギンスの磨き抜かれた輝きが、薄緑色に染まる。色の付いた緑色の風が、金色の髪を靡かせる彼女の右足を軸に突風を吹き荒らす。

空中で一回転二回転とし、風を纏つた右足で倒れた巨体に踵落としの追撃。

踵が着弾した巨人の胴体に亀裂が入り、そこを中心にもぐらが波紋のように広がっていく。まるで卵の殻が破られ、雛鳥が生まれるかのように。

「やつぱり、人形の中に隠れてたんだ」

巨人の腹部に立ち、こちらから見えない割れ目の中を見ながら彼女がそう言つと、割れた胴体の中から人一人分程の光の球体が飛び出す。逃げ去るような動作だが、直ぐに空中で留まり、光の膜を剥

いで姿を曝した。

顔を覆い尽くす西洋風の甲冑。背中に生えた血色の見事な翼は、羽ばたく度に赤い羽根を散らす。手には、見るからに重々しい斧槍ハルバードが握られている。

地面まで迫り着いた羽根は粒子になつて霧散し、天人は優雅に羽根が落ちた地面へ降り立つ。

正直、先程でのゴーレムよりも性質が何万倍も悪化した。ゴーレムは巨体だから小回りが利かないが、制御していた天人は違う。あの巨大な斧槍を軽々と振り回し、一向に疲れを見せない。人類の宿敵、天人。

これはそろそろ助つ人に割つて入らないといけないかも知れないな。

目の前で人……それも自分と同い年くらいの子が死ぬのは寝覚めも胸糞も悪い。

「本番はここからつてわけ？ 随分余裕そうね、人殺しの機械」

背丈を優に超える斧槍を軽々と振り回して構えた天人に向かい、彼女は喧嘩を売るように両手を腰に当てる。

感嘆した。ここまで届く無言の殺氣を当てられて真正面から言葉を発するとは、随分と肝つ玉が据わっている。もう彼女の度胸はあぐらを搔いていることだろう。

「ゴーレムに入つたままやられといってくれれば楽だったんだけど、これはこれで感謝するわ」

金髪の少女は脚鎧を装着している脚を、見せ付けるように持ち上げて言う。

「これで真正面から殺し合えるもの」

憎い。憎い憎い憎い。

八重歯のある歯を噛み締める。もつ田の前の敵しか見えない、仇しか見えない。

殺す。逃がさない。この手で、必ず殺す。

紅く広げられている翼が、暗闇で覆うように月光を隠す。こんな暗黒の中でも、天人の持っている斧槍は不気味に鈍く光を発している。

斧槍。ハルバードと呼ばれるそれは漢字で表される通りに突いても薙いでもどちらにも使えるお互いの短所を補っている武器だ。接近出来れば直ぐに片付くのだが、距離を離せば槍が、近付けば斧が互いに襲い掛かる。こちらが頼れる物は脚だけに纏っている鎧のみ。(……上等。やつてやろ'ひじやない)

相手がどんなに強くとも、力量差がある'ひとつも、押し通してねじ伏せるだけだ。

静かに呼吸を整えると視野を狭める。敵の一拳手一投足を見逃さない。今ならば相手の吐いた空調の乱れも見通して見せる。

(やっぱり呼吸なんとしてる筈ないか。これじゃ、相手の息切れなんてわからないわね)

殺すのには変わりはない。だが下手をすれば胴体が半分になつていることも十分あり得る。何より、こちらの場合、脚の装甲以外にあの斧槍が当たれば即死。掠つただけでも出血は免れないだろう。殺す為に冷静になれ。焦るな。

「……ッ！」

先ずこちら側から打つて出る。持ち前の速度を活かし、右脚を振り上げ渾身の力で振り抜くが、相手はもう既に移動済み。

視界が追い切れていない。そんなのわかつている。だからこそ、全身で感じる殺氣を引き寄せ、相手の場所を探るしかない。

バク転で後退すると、先程まであたしがいた場所を抉る斧槍。コンクリートが粉碎され、その下の地面までも貫いている。飛び散るコンクリートの破片が掠れ、巨人との戦闘で破けた制服にまたもや傷が入る。

「やつてくれるじゃない」

手汗が滲み、冷や汗が頬を伝う。

普段車が横行する道路は、ゴーレムが暴れ回った痕と天人が付けた斧槍の傷で、もはや原型を留めていない。間違いなくゴーレムに入っていた時よりも破壊力が増加している。

天人は地面に深々と刺さっている斧槍を軽々と引き抜くと、馬鹿正直にあたしに向かつて直進。

ガキンッと鋭い音と共に、真正面から脚鎧と斧槍が衝突する。衝撃波が周りの物を吹き飛ばし、あたしは大量の冷や汗の量を流す。

(……凄く強い……今まで訓練で戦つた天人が人形で、こいつは殺人鬼って訳……?)

相性はきっと、こっちの方が勝つていい。相手の武器は重量がある斧槍、振り被る動作、突く動作には必ず行つ為の隙が出来る筈。そう、筈なのだ。

衝撃で吹き飛ばされながらも受け身を取り着地。奇跡的に損傷は

無いが、それ以上に恐怖が湧き上がった。

(勝てない。隙が、身軽なあたしが入り込める、そんな隙もない)

力量の差を思い知つた瞬間、相手の全身が城壁のように思えて、恐怖で足が竦み、体を鎖で縛りつけられるのを感じた。

目の前で慄然と立つていた天人が斧槍を退屈そうに一振りすると、衝撃波が飛ぶ。

必死で横へ転がり、間一髪で無傷に終わる。だが、その攻撃であたしの背後に建つていたビルに縦の傷が深く刻まれた。

へたり込んでしまう。そうか、一任務の中で十人中三人は必ず死ぬ……その3人がこんな気持ちだつたんだ。圧倒的な力量差の前の戦意喪失。これ以上の理由はない。

どんなに噛み付いても相手にとつては野良犬以下なんだろ。

(……ごめんね。パパ、ママ……泣き言言いたくないけど、もう貴方達のところに行っちゃうかも知れない)

立ち上がろうと力を振り絞るが、恐怖の余りどうやら腰が抜けたらしい。

俯くと自分の金髪が地面に着いていた。ここまで伸びたのは、實際伸ばそうとしたからじゃない。こいつ等が……本当にこいつ等が憎くて、時間を忘れて特訓して、身の回りを正す暇なんて無かつた。化粧の一つもやつたことが無ければ、無言で過ごす日々の連続で友達もいない。

もうちょっと、自由にしていれば良かったと少し思つてしまつ。顔を上げると天人が先程と同じ位置で斧槍を振り被つていた。間違ひなく、あの衝撃波が来る。

わかつていて避けようにも、足が動かない。ダメだ、本当にここで終わりなんだ悟つてしまつた。残念ながら走馬灯なんて大層な

物は体験出来そうにない。

「……今までの人生に後悔はないわ。ただ、腹が立つだけ」

あんなに特訓して、ようやく、ようやくこいつ等と戦うだけの力を手に入れた。そう思っていたのに 現実はこうだ。蟻が象に叶う訳がない。束になればなんて言うが、自分は所詮働き蟻一匹。

「アンタ達みたいなのに……太刀打ちも出来ないあたしが、惨めで、馬鹿で……どうしようもなく悔しいだけ……！」

田蓋を強く瞑り、歯を噛み締める。涙は絶対に流さない。きっと他の生徒はわたしを教訓に訓練が無意味だと知ってくれるだろう。そんな人柱になるのは絶対に嫌だが、この際そんな生け贋のようなことしか出来ない。

「誰か、仕返しでも打つてくれるなら嬉しいんだけどなあ……」

でもきっと、これで死ぬ人が少しばかり減ってくれる。無意味に戦場へ出される生徒は減るだろう。ここまで的力量差、あたしはそれでも実技試験の成績は最上位だったのだ。

「テストとお勉強は、違うか」

体を引き裂こうと風が迫る。突き迫る風の刃、それが黄泉の世界への迎えだとと思うと、吐き気がした。

「なに情けなく諦めてんだよ。コーレム倒した時の威勢はどう行つた」

01『衝突、土塊の天使』（後書き）

バトルパートはもう少し続きます。
どうぞお楽しみ下さい。

02『穿つ銃口と少女の逆ギレ』

黒い小型の銃身を月光で瞬かせ、ベレッタM92FS拳銃の銃口が弾丸を撃ち出す。的から逸れぬよう、狙いを付けた弾丸が少女へ放たれた狂氣の風鎌を相殺。生まれた衝撃波の中を躊躇無く走り抜け、助走を付けつつ斧槍を持っている西洋甲冑に飛び蹴りを浴びせる。

天人は渾身の蹴りを腕甲で覆われた片手で受けようとしたが、遅い。紙一重で蹴りが顔面を捕らえていた。

展開は気付く物じやない、読む物だ。登場して片手で投げられるとか穴に籠るくらいの出来事だぞ。

天人との距離を引き離した事を確認し、未だに死を覚悟し続ける少女へ声を掛ける。

「なに情けなく諦めてんだよ。ゴーレム倒した時の威勢はどこ行った」

我が身の無事に驚愕したのか、目を見開いてこちらを凝視する彼女に微笑む。子供をあやす父親の心境とは、こんな感じなのだろうか。

長時間飛行機に縛り付けられていたお陰で体の反応が若干鈍いが仕方ない。目の前の障害を突き崩すには十分。どう足搔こうとも相手は天人一人。

……天人って一人の単位で良いのだろうか。

蹴り飛ばした相手に再度視線を向けると、既に起き上がりつて体勢を立て直し済み。やはり巨人に乗っていた時よりも万倍今の方が戦い難そうだ。

「なら最初からゴーレムじやなくて生身で来いよ……」

先程まで金髪の少女に向かっていた殺氣が、全身に嫌と言ひ程度浴びせられる。

笑いながら答え、空の右手に力を込める。創造のは、拳銃と同時に発砲可能な小型の短機関銃^{サブマシンガン}。威力は低くとも構わない。極力反動が小さい物を選び取れ。

想像に応えるかのように、何時の間にか空だった右手には重みを感じさせるF N P 90の短機関銃が握られていた。

自分で言うのも何だが、片手で撃つには最適な選択だ。拳銃と両立可能で、尚且脇下で挟み固定する事が出来る。他の短機関銃より随分小型なそれは、重量も比較的軽量。

「さあ、準備万端だ。始めようぜ」

「こちらは確実に腰を抜かしているだろう少女が足枷になっている。彼女を狙われては、防戦一方になるのも必至。そうなれば戦闘の辛さは五割増になると述べても過言じやない。

天人の攻撃対象を俺に絞らせ、且つ迅速に勝敗を決しなくては。

拳銃と短機関銃、両方の銃口を向け威嚇行動を取ると、天人が斧槍を地面と平行の構えにして突貫してくる。突く為の突撃だけなく、意外性もあり相手の隙も突く事が出来そうだ。

しかし銃器構えた敵に真っ向勝負仕掛けるとは、正に凶戦士。意思が欠如しているから当然とも言えるが。

「なら、こちらも加減無しだ」

闘牛顔負けの突進に対し、脇下で挟み込んだ短機関銃を弾切れ上等の覚悟で撃ちまくり、威嚇を交えて拳銃も投下。引き金を弾く度に地面へ放り出され、散らばる空の薬莢の音が心地良い。威嚇射撃最高。安全第一の中距離万歳。

何十発もの短機関銃の弾を受け、通常の銃とは違うと悟ったのか、天人は空へ飛んで攻撃を躱す。銃弾は際限無く牙を剥き、逃げ惑う天人を狙い続ける。

悪役真っ青な戦い方をしていると、天人は痺れを切らしたのか銃弾に構わず攻撃を再開。

先ず空中から槍の突き刺し。それをバックステップで難無く躱すと、地上へ舞い戻つた天人は刺さつた斧槍を抜く動作はどこへやつたのか素早く難ぎを繰り出して来る。

「はい残念賞。鉛玉をプレゼントだ」

払いを跳んで避けると、背骨を痛めそうな体勢で短機関銃の銃弾をばら撒く。命中した弾は天人の鎧に銃痕を残し、所々が抉れていく。

普通の銃では豆鉄砲と同等の威力に落ちぶれるだろうが、俺の手に握られている二丁は違つ。形こそ近代兵器だが、神葬具に変わりは無い。

（流石にこれくらいの豆鉄砲じゃ、鎧をひしゃげられても決定打にはならないか）

それならば、と拳銃と短機関銃を投げ捨てる。投げ捨てて二丁が地面に着いた瞬間、銃達は後片も無く消滅。一見隙だらけだが、新しい武器を練り出す為ならばそれも厭わない。

重量のあるロングコートを引っ剥がしながら、更に威力の高い銃器を想像。

（ショットガン……違う。グレネードランチャー……無理があるな。
無難にあれだな）

考えを固め、創造し慣れた武器の構成を映し出す。

作り出すのはAK-47のアサルトライフル。短機関銃の低威力とは違い、アサルトライフルの威力ならば鎧くらい吹き飛ばすことが出来るだろう。

脱ぎ捨てたコートが宙を舞い、俺から離れた時、既に右手には創造したアサルトライフルが握られていた。今度は反動が強く、撃つ為に両手で構える必要があるが、威力を考慮して妥協点だ。

「その鎧、剥ぎ取らせて貰うぞ」

早速銃口を天人に向ける。この距離ならばスコープを覗かなくても百発百中の自信がある。

天人からの斧の振り下ろしを難無く避けると、上半身に狙いを定めて、撃ち抜く。銃口から放たれた銃弾が重々しく天人の鎧に突き刺さった。頑丈な鎧に穴が空き、天人の体をも貫通。

流石だAK-47。反動は大きいが見返りも大きい。

痛みを表現するように斧槍で乱雑に繰り出される乱舞。視線で追い、避ける。避けて避けて、隙が出来たところに着実に銃痕を重ねていく。

「退けよッ！」

大振りで繰り出された斧槍の足元への薙ぎ払いを後ろに跳んで避けた後、間髪入れず接近し顔面へ向けて鋭い蹴りを放つ。耳を突く金属音を響かせ、怯んだ天人が後退。その隙を逃さずにアサルトライフルの追撃。着実に追い込みを掛けて行く。

ベルトの背中にぶら下がつた重々しい果実を乱暴にもぎ取り、ピン型の安全装置を口で引き抜く。

「おい、目を瞑つてろよ！」

顔面への攻撃が後を引いているのか、ふらついている天人に球状のそれを投げ付け、眺めている彼女に向って叫び、自分も目を瞑る。フラッシュユバンの閃光が辺りを真っ白になるまで照らし尽くし、目を開いている者の視界を奪う。

天人にも視覚はある。加えて、天人達は光りが満ち溢れてた世界にいたのだろう、視力が悪い。耳鳴りがする音刺激で聴覚も無効になれば完璧に標的を見失う。人間よりも立ち直りは素早いが、奪えないと奪えるでは万倍違う。

俺は天人が声を出さずに頭を振っている間に、アサルトライフルを捨てて左腕を右手で握り力を込める。

「アテンド
解放」

左手が白く輝く。まるで冷気を蓄えているかのように、神秘的な淡い光。

天人が斧槍を構え直そうとする動作を見た俺は、左手を引き摺るように地を駆ける。ここを逃したら機会を作るのは難しい。必ず、仕留める。

手を引き摺った場所は傷跡のように抉れ、しかし脚の速度は増す。広げられている手。天人の目の前でそれを強く握り締め、拳は敵を射抜くかの如く雷鳴を響かせる。さながらエンジンを最大限まで掛け続けたバイクのモーターのようだ。

拳は引き込まれるように天人の心臓へ ぶち当る。

「……I o l o l a s c i o」

殴った天人の鎧が碎け、心臓を拳から出た波動が穿つ。

威力は天人の体を抜けてその後ろのビルに巨大なクレーターを作った。

パリンッ と不自然な、ガラスが割れたような効果音がすると
天人の体が光り その光りが消失した。これは天人達の絶命の合
図。この音が聞こえると、ようやく息を整えられる時間が訪れる。
1体では少し物足りない感じもするが、贅沢は言わない。

一息吐き、事切れた天人の死体を放り捨てる、俺は未だに座り
込んでいる彼女へ歩み寄る。

戦っている時も安全を配慮して本気を出せなかつたのだが、天人
が彼女の方に意識を向けないでくれて心の底から安堵している。こ
の子を守りながら戦う、これが加わつただけで戦闘の難易度が爆発
的に上昇するのは言うまでもない。

「大丈夫か？」

腰が抜けているのか、全く立つ動作を見せない彼女へ手を差し出
すと、応じるように握られる。

掛け声を掛け、彼女を立たせようとするが足元があほつか無いよ
うで、こちらに倒れ込んで来た。彼女が付けていた香水の香りかは
知らないが、ブドウ独特の甘酸っぱい匂いが、少女と俺の間に漂う。

「……あ、ありがと……」

天人から助けた事か、転ぶのを防ぐ為に抱き締めた事か、どれに
感謝を述べたのかは分からないが、取り合えず受け取つて置こう。
美人からの御礼程嬉しい物はない。

確実に腰が抜けているであろう金髪の少女。

抱き締める格好になつてしまつたのは悪いが、彼女には少しこの
までいて貰おう。

本当なら安全な場所まで運んでやりたいが、この後は用事がありし、出来れば少女には、早めに立てるまで回復して貰いたい物だ。

「……ん?なんか腰の辺りが生暖か……ツ！」

驚いた、心底。天人の攻撃なんて目じゃ無いくらいに。

暖かくなっている衝撃的な理由は、少女の為に比喩的に表すと、濡れていたのだ。彼女が今まで座つていた場所が生温かい液体で。ついでに伝染するかのように、液体は俺の腰辺りに染み込んで行く。俺には特殊な趣味はないのでクリーニングだな、これ。

しょん……うん、そうか。天人と戦つて驚いたらこうなるわなど思いつつ下を見ていた俺は次の瞬間

「い、いやああああああああああああああああああああツ！！」

バシンッと夜空に気持ち良いぐらい鋭い音が木靈した。なんだよ、全然動けるんじやねえか。

02『森の銃口ヒラメの恋ナレ』（後編）

戦闘パートはここが終わりです。

ここからヒロイン達との日常となつてこなすので、お楽しみに。

03『対天人育成用教育学科女子学園』【挿し絵】

助けた女に張り倒された、あの事件から半日後。後始末に来た人達に事情を説明して、ここまで辿り着いた時には太陽がもう昇つてしまっていた。

「それでそんなに頬が赤くなつてたのッ！」

「うつせえ笑うな！こつちは助けてやつたのにまさかビンタで恩返しされるとは思わねえよ…」

「目の前で笑い転げる人格腐つたような女に悪態を吐く。

学生と同じ制服を着込み小学生の高学年と思われるような身長、そして半田のやる気のなさそうな顔付き。こここの学校の生徒ですと言つても苦しそうな、そんな外見の少女は黒ストッキングに包まれた脚を組んでこつちにニヤニヤと視線を送つてくる。

超不愉快。

> i 2 5 8 9 3 — 2 1 3 <

「まあ、わたしの学校の生徒が粗相なことをしたことは、わたしが詫びる。済まなかつたね」

「うつせえ。そんな外見で学校長とか言われても納得出来ないつづうの」

そう、目の前の小学生と見間違いつになるこのチビッ子。名を「黒羽」レッチと言つこのチビは何を隠そう日本初の対天人育成用教育学科女子学園『明星学園』の学園長なのだ。

建てられた理由としては、共学が大多数で男子学園もあるのに、なんで女子学園はないの…？……から来ているのだから国の予算

の行く末が気になる。

それはともかく、納得出来ないけど証拠は出揃つてあるから問題。ここにある俺への推薦証と俺からの彼女への信頼だ。

「黒羽、アンタ、何歳だっけ？」

「いらっしゃ、女子に年を聞くもんじゃない。まあ、永遠の12歳とでも答えとこうかな」

「その年は洒落にならないから止めとけ。マジに信じる奴が出来そうだ」

持ち前のモミアゲ長し肩までの銀髪を得意気にすくい上げている所作を見ると、如何にも子供料金発生しそうな発育劣化。お可哀そなことで。

伊達に永遠の12歳ではない。ランセル背負つても違和感無さそうなのが泣ける。

「それよりも良いのか？俺、男なんだけど。だいたい、この学園入つてこの部屋に来るまで何度チラ見されたことか」

「あら、考查過程の特別推薦。それも男一人。ハーレムじゃない」

まあ黄色い視線は嫌いじゃないけどな。何あの男の人カツコ良いって言われた時は柄にも無く喜んでしまつて言つた女の子に手を振つてしまつた。女子学園様々。

その代わり気まずさもある訳だが、補つて余りあるな。軍隊の男臭さに比べれば万倍マシだ。

「そこは素直にありがとうと言おう。でも良く通つたな。国は堅物だし『勝手に守れ、けど指示は出す』みたいな亭主関白のアホで固められてんのに」

「いらっしゃ政治家を悪く言わないの。国からたづぶりお金入れて貰

つてこいつも運営出来るんだから

紅茶を飲みながらこれまでの雰囲気を払拭するように落ち着きを取り戻す学園長。

なんか子供を見るような、母性に満ちた目で見て来るので思わず顔を反らす。久々に受けるとむず痒い視線だ。黒羽以外、俺にこんな視線を向ける奴なんていないし。

「貴方を呼べたのは貴方の肩書を国に言つたから。その子を呼べますよつて電話したら即OK貰つた。やつたね」

「また悪びれもせずに…よくやるね、アンタも」

「褒め言葉として受け取つておく。最強の神葬具使いさん。それとも白の防人の方が良かつた?」

「その呼び方やめる。向こうの兵士にからかわれて殴つちまつたから

「あり、喧嘩したの?」

「いや、一発で昏倒させた。やわ軟だよな。黒人だから殴り合いに発展すると思つたんだけど」

その言葉に呆れたのか学園長は溜め息を吐きながら推薦証を摘まんで振り子のように振る。これら重要書類で遊ぶんじゃない。

第一、それって俺が女子学園について良いっていう許可証も同義じやねえか。無くされたら警察に捕まつても可笑しくない。証拠つていうのは大事なんだ。

「ほんとさ、アメリカからの緊急要請で君を送つたのは良いんだけどさ。戦場で暴れ回るし処構わずフリッショ炸裂させるし作戦は無視するし…君の名前、覚えてる?」

推薦書類の名前欄を指差しながら呆れた目で見て来る。視線が痛い。

確かに全てやつたことだが全部理由があるのだ。

Q1・暴れ回ったのは？ A・困まれて面倒だから口ケットラン
チャ一呼び出してボコンボコン

Q2・フラッシュ引爆させたのは？ A・ほら、必殺技には隙が
出来るから補おうとしたんだよ

Q3・作戦を無視したのは？ A・仲間とろいんだもん

結果的に全部成功させたんだから良くな？と思つてゐる。
というよりも名付けた目の前の人失礼なんだが名前は恥ずかし
いのだ。なんか女っぽい気がして。

「……白=レッヂ……だけど」

「はい良く出来ました。君が向こうに行つてからの2年、わたしは
記憶喪失の君を拾つた時以上に胃をキリキリさせたよ。わかる？一
田^{いだ}）とに苦情が舞い込んでくるあの状況」

そこまで問題起こしてないんですけど。

まあ白=レッヂという名前で大体が勘違ひするんだが、事あるご
とに処女を自慢するこの黒羽という女性は俺の実母では無い。

5年前、血だらけの天人の前で何んでいる俺を見つけ保護したの
が黒羽。名前から記憶、全てを無くしていた俺に白=レッヂという
名前をくれたのも彼女だ。

育ててくれた恩義は感じているし義母として愛情も注いでくれた。
だから俺は性根を曲らせず、ここまで着実に育つて來たのである。
いや、ちょっとくらい捻り曲つても許容範囲つことで良いじ
やないか。

「まあでもね、元気にやつてるってわかつて嬉しかったけどね」

「そ、その田止める……なんか恥ずかしくなる

「バカね。2年しか会わなかつたのに生憎うんじやなこ。今でも白はわたしの可愛い子供なんだから、母からの愛だと思つて受け取つておきなせー」

ダメだ。やつぱり黒羽といふと変にむず痒くなる。あのこつでも本気にならなそつな半田が、優しい瞳でこいつを見つめるのが良い意味で苦手だ。

「寮[室]はこいつちで振り当てるあるし、制服はその部屋にあるからね。それと着替えとかは今度都市に出て買って来なせー。お金とかならちやんと出してあげるから」

学生証と思われる手帳を渡され、それを受け取ると席を立つ。ダメだ、黒羽といふとどうしても不器用に接してしまつ。

寂しいような、そんな切なそうな黒羽を背に、学園長室を出て行つとして、少し踏ん張つてみた。

「……色々ありがと、母さん。今度、飯作つてやるからな」

改めてこの明星学園の「ふさ」を思い知つた。

中世ヨーロッパから来ましたと言うかのよつな校舎の風貌に教室は広い雰囲気。大学のような作りに少し目を丸くしてしまつた。一回で多く終わらせたいというのはわかるが、それはどうなのだろうか。教卓にマイクあつたし。

そんな校舎はレンガ造りで計5階まであり、どんな」と使つているんだとツッコミを入れたくなる場所が幾つも転々としていた。国が文句言わないのは守つて貰えてるからだな、うん。

他にも闘技場があつたりその奥が地下迷宮に繋がつていたりと…

ついでに訓練授業でそこに学園長の神葬召喚具から出現したかなり弱体化された天人を使い、迷宮バトルロワイヤルをするんだそうな。ちょっと楽しみではある。俺はもしかしたらバスに配置されるかも知れないけど。

黒羽の神葬具の話は今度ゆっくりしようと思う。軽い説明ではちと無理だ。

バカ広い中央庭園に噴水、学生が食事を取るカフェテリア等々。確かに全寮制で外出は提出制でも学生から文句は出ないだろうなどいうほど施設は充実していた。石畳の通学路を歩くと言つのは新鮮な物だ。

しかも出会いのは女子ばかり。天国か、ここは。

「ちょっと、ちょっと……ねえ、アンタよアンタ！」

後ろから声を掛けられ、ついでにロングコートの裾を引っ張られる。いや、なんで引っ張るんだよ、肩でも叩けばいいだろ。誠に遺憾であると言いたくなる行為に不満そうな視線を向けると、

「アンタって……昨日の夜の……？」

ビンタしつき……えほん、昨日助けた女が不安そうに俺のコートの裾を握っていた。

03『対天人育成用教育学科女子学園』【挿し絵】（後書き）

学生編の始まりです。

主人公達の名前やヒロインの名前もここから出し始めます。
プロローグ2だと思っていただければ一度良いかと思われます。

04『木枝に搖れるマカ』

「い、言つて無いわよね。その……あの」と…」

俺の目の前でうううとか唸つていた金髪は顔を真っ赤にして怒鳴る。そんな大声出さなくて済むといえるつつのに。指で耳を塞ぎながら少しだけ衝撃を和らげた。

分からない人もいるだろうから説明すると、目の前にいる腰までの長い金髪。昨日助けに入つた俺を引っ叩いた張本人だ。

俺は心が広くないからあえて言おう。結構痛かつた。予期しない攻撃は痛みが3倍、覚えておくといい。

感謝されるなら良いが、しつき……あの現場を見たくらいで叩くのは幾らなんでも腹が立たない方がどうかしている。美少女だから何しても許される訳ではない。

学園の敷地内にあるカフェテリア。

そこの大オーブンテラスで黒いロングコートを着ている男と日本では珍しい金髪、それも美少女が見方によつては痴話喧嘩を繰り広げているのである。登校中の女子達の視線を一手に引き受けている。話題の独占だ。ここ女子学園だ。男がいるだけでも視線が集まると言つたのに。

「お前、授業は良いのかよ……」

「そ、それより何より話されていないか心配なのよーそれを脅しのネタにされたり……そ、それで色々……色々されて……」

男が女子学園にいることに疑問を持つ前に「」の問題か。図太いなこいつ。

うんざりしながら自分で買ったホットのエスプレッソを煽る。ちまちま飲むのは性に合わないな。これで徹夜の眠気が飛んでくれた

ら尚良いのだが。

そういうや事后処理が大変だったから忘れてたが、俺のスボンつて
こいつのあれが染み込んでるんだよな。忘れてたし、目の前の金髪
もまだその品を履いているとは思つまー。暴露したら脚鎧で襲い掛
かれそつだから止めて置くが。

「さつとあたしが抵抗しても止めてくれないのよ……それどころか
もつと興奮して……い、いやあ黙！」

勝手に妄想して勝手に赤面して俺を強姦魔扱いか。しばぐれこの
女。

「バナナを咥えてる写真を撮らせるとか、縄で縛られたりするんだ
わ……絶対に許さない！」

今ので俺を殺害リストに加えたみたいだな。来たら返り討ちにし
よつ。

とりあえず頼んだ物は飲み終えたので席を立つ。会計は…この女
が頼んだ抹茶オレの代金を出すのは癪だが払つておくか。
伝票を取るとすぐさま会計に向かう。

ぼわぼわした雰囲気の店員さんが出て来て伝票の代金をレジに打
ち込んだ。

「はい、エスプレッソと抹茶オレで400円ですね」

「安いな……ほい、丁度。美味かつたよ、綺麗なお姉さん。また来
る」

「あらら口が上手いですね。彼女さんがsophieしちゃいますよ?」

なぜに嫉妬を英単語に置き換えたのかはわからんが来るのは少し
遠慮しようと考え直した。

「それから監禁されたりとかMとかされて……ああ、あたしは違うのー。SとかMとか……そういうのに興味はないんだからーか、勘違ひしないでよねー。アンタがやりたがつたから付き合つてやってあげて
あれ？」

さつとあいつのことを見つけていた奴は下ネタを空に向ける連発しているあいつに驚くのだろう。くわばらくわばら。

（んー、視線が気になる。男が物珍しいのか不審者と思つてゐるかどつちかだな）

嫌だな、編入のこと通達されてなくて不審者に見られてるつてのは。珍しい方にしておいつ。

それはともかく、現在は登校の時間だ。やつぱりとこいつが当たり前と言つべきか、通りを歩く俺の視界には女子しか映らない。

違うんだよ、断じて視線が追つてる訳じやないんだよ。石畳の通学路を歩いて登校しているのが女子だけなんだ。

俺はまだ編入していなかったから授業も出ないし、通学路を逆走しているのも田立つ原因なんだ。

（嬉しくもありむず痒さもあり。声掛けて来てくれるならすつと楽なんだけどな）

どうやら女子だけの空間でフレンドリーを求めるのは難しいようだ。

視線が合つと逸られ、いつかが逸らすとまた観察される。研究動物にでもなつた気分。

じつなつたら観光者にでもなつた氣分で色々見ていく。景色が綺麗のは確かだしな。アメリカじゃ、廃墟になつたビル街やコンクリートジャングルとかしか視界に映らなかつたし。

「お、下ろせ下ろせお～る～せ～ッ！」

なんだろうな。昨日くらいから俺は面白い者ばかり会つようになつてしまつたみたいだ。

前方に変なのが見える。道の端つこ、洞窟コウモリよろしく足の裏が高い木の枝にピツタリとくつ付いた女子生徒。腕をバタバタと動かして…あれかな、落ちたいのかな？頭から。

いやしかし、あれだね。捲くれて見えている健康的なへそ。ライムグリーンの下着…眼福だ。ちょっと揺んで置こう。手拍子三回。

「ちくしょうバカ神葬具！ひ～ん！うわっ！高いし…めちゃくちゃ高いし！下ろすな！わたしが下ろせつて言つたら下ろせ！今落としたら主人の頭蓋骨が夏のスイカみたくなるぞ…」

そう言つといきなりジタバタを止め、腕を組んで唸り始める。かと思つたら突然死人のような顔になつて、

「……あ～、血が上つて來た……。死ぬ……こんなパンツ丸出し状態で頭に血が上つて死ぬとか……まだ飛び降りとかの方が綺麗だよな。うつ、解決法を考えようと思つたけど……あ、ダメだ……頭が真っ白になつて來た。神様、今会いに行つてやう……わたしが叩き潰してやるからな……こんな運命にしたテメエを呪うがいい……」

本当にぐつたりしてしまつた。

顔見るとかなり可愛いな。ショートヘアに飾り気のないカチュー

シヤ。幼児体型ではあるが黒羽ほどでもないし。いや、絶対Aだと

思つけど。身長も中学生くらいだらうけども。

はい、手を重力に従い逆さ万歳にしている彼女の右手に『ご注目。大剣の刃、その背と腹に嵌め込まれた2振りの双剣。重複神葬持ちだ。

「……おお、なんだ、その金色の水を飲めば良いのか……？」

世界で10人いな重複神葬持ちがこんな奴で世界は大丈夫なのだろうか。今本氣で世界を心配してしまつた。

説明すると、神葬具つて言つのは本来一つしか持てない訳じゃない。生きている内のたつた一回。現在、神葬具持ちのほぼ全ての刷り込みで使用される天人は下位。つまり歩兵みたいな物なのだが、稀に中位の天人と刷り込みを成功させる者がいる。下位の天人を殺すことすら危険なのに、それの倍増しの強さを誇る中位の天人。つまり殺すことも難しく刷り込みにも全く反応しない。

だが例外は存在する。中位に認められて刷り込みの成功。武器が二つや三つ付いて来るなんて話も聞いたが。それが10人にも満たない重複神葬持ちである。

俺だつて話には聞いていたが、実物を見るのは初めてだ。

「や～め～る～！うえ……血が頭に回つてるのに人を振り子みたいに揺らすな～！」

おお、顔面真っ青から息を吹き返したか。体の作りなんかも若干変わつたりするかも知れないな。

疑問に感じたのもつと揺らすことにしてた。

「人が止めるつていつてんのになんでもつと揺らすんだよつ……」

うふ！？…………神は信じていないにしても仏もいねえ…………。まさか助けを求めて、近付いて来た奴に振り子にされるなんて…………世界を呪つてゲロつてやる…………」

まさかの嘔吐宣言に慌てながら少女振り子を止める。本当にゲロられたら描写として形容し難くなること請け合いで。モザイクとか掛けなきゃいけないなんて嫌だぞ。

酔つたせいか青白い顔している彼女の右手に握られていた大剣が滑り落ちて、地面に突き刺さる。

「あわわわわわわわわわ！」

落下した大剣に逆さの秘密があつたのか、焦つた声の後に大剣へ続くかの如く落ちる彼女。

それを優しくお姫様抱っこで受け止める俺。完璧だ、これで俺はきっと少女の中で通りすがりの紳士にレベルアップすることだろう。

「大丈夫かお嬢さん？」

「お前のせいだよー！喰らえ怒りの右ストレート！」

助けた女の子からまたもや暴力を喰らってしまった。

しかも今度は拳と来た。人を助けて認められないとは、世知辛い世の中である。

というか酔いから覚めるの早いな、おい。これも重複神葬持ちだからなのだろうか。

遠くで大きな鐘の音が響く。俺の頬に拳の痕が無ければちょっとした結婚式の新郎新婦のようだ。もう鐘が祝福してくれているように感じる。

「幸せにするよ」

「何言つてんの！？ 何言つてんの！？ つていうか今の始業の鐘
だよ思いつきり遅刻だよ！ 言い訳が思いつかねえよ！ なんだよ朝に
神葬具の練習をしてたら木にぶら下がって男にお姫様抱っこされて
遅刻しましたとか！ わたしが教師ならその生徒を石で殴るぞ！？」

04『木枝に描れるマカ』（後書き）

はい、サブタイトルのまんまな内容です。
今回から本格的な新キャラ登場です。金髪もじょこじょこ出てきます。

ヒトイン出番少ないってなんだ、ワロス。

出来る限り一日に一回ペースで投稿したいと考えています。

05『たこ焼きの香り』【押し論】

「へえ～、男のお前でも女子寮に入れるんだな」

「それは俺も思った。国が許しても寮生が許さなそつな気がする」

俺は隣で歩いている女子の意見に同意する。黒羽が無理矢理意見を捻じ込んだとは言え、許容範囲つてものがある。人間それが爆発する頻度は比較的多いのだ。

「ま、いいんじゃねえの？わたしは問題起こさない限り良いと思つけどな」

言葉使いの割りに人差し指を頬につけて考え込んだりと仕草が可愛いのははどうなんだろう。

とりあえず寮部屋の番号を生徒手帳で確認する。一番後ろのページに『C-201 白=レッヂ』と記されていた。2人1部屋なのに俺1人なのはやはり男だからという配慮なのだろう。

アメリカにいた頃は軍隊の奴と盛り上がり神葬具使い同士で戦い合つたりと結構騒がしかつたので、少し寂しい気がする。

「そういうや、お前は授業じゃないのか？木からそのまま来てるけど」「どうせわたしさばれる口実が出来れば良かつたしな。これで怒られずに済む」

どうやら優等生とは程遠いらしい。重複神葬持ちだからって特別待遇はないとと思うんだが。

さつきから俺の隣を欠伸しながら歩いているやつは、”匂坂舞佳”という明星学園2年生。つまり1年に編入する俺の先輩に当たるのだが、

「いいよ、敬語とか面倒だし」

「じゃあバカって呼ぶな。名前の方が使い易くていいな」

「舞佳つつてるだろバカって言うな！っていうかお前ホントに遠慮つて物知らないな！背か！わたしの背が低いからかこの野郎！」

なんか容姿とかを差つ引いても敬語要らない関係でやつていける気がする。

だがこれ以上からかい続けると涙目の中女が大剣を出して来そうで止めて置く。言つだら、侵攻時より引き際が大事だつて。

「はあ……はあ……からかうのは良いがそれをした時がお前の最後だと思えよ……ッ」

釘を刺されてしまった。

これからはわからない程度にからかう事にして置こう。

「舞佳の身長は何センチでちゅか？」

「あ？ 146……ふつころすぞお前！ やつぱりあれだー！ ここで真つ一つにして桜の木の下にでも埋める！ テメエを埋めたら桜が枯れそうな気がするがそれでも埋める！」

ぶちギレた。

「一トの中の飴ちゃんをあげて氣を沈めて貰つた俺は、先程まで火を吹かんばかりに荒ぶつっていた舞佳を隣に寮のCを探していた。ちなみに寮はA～Iまであり、A～Cまでが1年、D～Fまでが2年、G～Iまでが3年の寮になっている。A寮の隣にB寮、では

なく。なんかランダムに建てられているので探すのが大変なのだ。

「おじおじ……なんでAの近くにDがあるんだよ」

「なんか学年同士での馴れ合いを多くする為らしいぜ。気に入った奴なら天人出た時のグループ分けも学年別で好きに出来るし。ほら、神葬具が弓の奴とかどうしても前衛欲しいじゃん。無理に誘うより部活の先輩つてな」

なるほど。寮生活で親近感を持たせようつてことか。

「白はビリの寮等なんだ?」

蜂蜜レモンを舐めながら訊いて来た舞佳に生徒手帳を開いて確認される。

「へえ……お前白=レッヂって言つのか。どつかで聞いたような苗字……つてこ寮……わたしのEの隣じゃんか」

日に見えて脱力するの止めてくれませんかね。
そりやちょびつとからかい過ぎた氣もするがお茶目なんだよ茶目
つ気。

「隣の寮同士つてちょこちょこレクリエーションしたりすんだよ。神葬具使い同士で対決したりバーベキューしたり。嫌だぞお前と一緒にピーマン焼くとか!」

なんでピーマン限定なんだよ。肉にしる肉に。串が縁一色とか罰ゲームだろ。

「えっと、A寮がある……つてことはこいつちか。付いて来い、こいつ

ちだ

流石に通い慣れた道。今度は舞佳が俺を先導してずんずん進む。
いや、じうして後姿みるとやつぱり小さいな。マスコット的な趣きがある。アメリカとかだと長身な美人しかいなかつたから、こういう小さな美少女は見ていて飽きない。

146の高校生……なんだか嘘じゃないかと疑つてしまつた。実はもつと低いんじゃなかろうか。

今度は周りを見渡す。石畳の道に屋台なんか出でている。

「お、たこ焼きだ」

「はいはい道草してんな寮についてから買いに来い」

耳を引っ張るまではなくてよくないか。久し振りに見た日本の風景が懐かしいんだよこつちは。

あ～マヨネーズにソースの匂い。思い出したんだけど朝飯食つてないんだよな。

「舞佳。たこ焼き奢つて

「何でわたしがお前に奢らなきゃいけないんだー！むしろお前が奢れー！こじまでの迷惑料でー！」

「おじちゃんたこ焼きーつ」

「いつの間にか買い物に行つてるしーどつやつて抜け出したお前！ああー……わ、わたしも食べるー！おじちゃん、もう一個ー！」

> 25695 | 213 <

「はむ……んでだな。緊急招集時は寮内にバカデカいアーフートが鳴るから……むぐ……寝ても飛び起きるぞ」

緊急招集。

つまり天人の出現をレーダーが感知すると、学生は追撃体制に移る。一刻も早い行動が必要で、風紀委員は常日頃、交代制で警備役を買っているらしい。全て黒羽からの受け売りだ。

アメリカにいた時は目視で天人の群を発見すると雄叫びをあげる奴がいて。それを合図に皆が騒ぎながら武装整えて戦い始める……そんなアバウトな戦い方だった。それでも持っているんだから流石アメリカ。軍隊も常時最大火力である。

「勝手は違うだらうけど、出張るのは殆ど3年とか教員だからな。わたし達が出るのは天人の出現ポイントが前以つて分かつた時とか、戦争並みの全面対決みたいな、規模のデカい時だけだ。やっぱり、半人前は出したくないってことなんだろうな」

じゃあなんであの金髪は天人が出た時首都の中心街にいたのだろうか。

今度会つたら抹茶オレの料金徴収ついでに聞いておこう。勘違いするな、料金徴収が最重要だ。

「ほい、ついたぜ白」

カメラ目線で決めながら最後のたこ焼きを頬張つていると舞佳の声が現実に引き戻す。

目の前にヨーロッパ建築だらうとツツ「ミミを入れたくなる建造物がそびえている。何階建てなんだらうなあ。

「ここがE寮だぜ。それと、向こうに見えるのがわたしの住んでるE寮だ」

舞佳が指差している方を見ると、通りの向こうに同じような建物

発見。わからねえよ、どっちがいでEなんだよ。

「案内だけで終わる授業って楽だよな。はむつ」

働いた後の飯は美味しいとも言いたいのか。お前働いて無いぞ。
最後のたこ焼きを頬張つて俺の持っているビニール袋にゴミを入れると、学園までの道へ走り出す。

「そんじゃ、わたしは午後の授業に出たいからここ辺でな。結構
楽しかつたぜ、田」

「おう、またな。それとあんまり走るとライムグリーンが見える
ぞー！」

聞いてから気付いたのか、焦りながらスカートを整えようとする
舞佳は目の前の壁に気付かずに 「あべん！」 衝突した。良い
子は前を見て歩きましょ。

「…………あ？」

突然視線を感じて、寮の屋上へと田線を向ける。

そんな少年と少女を、監視するように見つめる人影。

長く、柔らかな白髪が風に揺れ、その手に握られた黒い鎌が鈍く
光る。

寮の屋上とはいえ、かなりの高さなのだが、少女はそんなことこ
表情を一切変えず、鎌を抱き締めながら縁へ屈む。

(あれが……普通の人にはしか……見えないけど)

少女と別れた少年へ視線を送っていると、突然少年の田線がこち

らを向く。田が、合ひた。確実に、こちらに気が付いている殺氣のような雰囲気に、少女は瞬きをする。

(気付いた……？一呼吸……？気配は消してゐる……
警)

困惑しながら身を翻す。

その瞬間少女の姿は消え、後には黒い羽根が幾枚かふわふわと漂っていた。

05『たこ焼きの香づ』【押し詠】（後書き）

舞佳の登場です。

武器は大剣＆双剣。彼女の出番が現段階で一番多いでしょうかね。

06『金髪、再来。それと鮭の皮』

「んー…… そうか。飯は一旦外に出て食堂に行かなくちゃダメなんだな」

生徒手帳に書かれた案内図を参考にしながら通りを歩く。
現在夕方の6時。10分前くらいに集合して6時30分から食べ始めるらしいので早く出て探そうと意気込んでいる所存である。
もう夕日は沈んでしまって、街灯で照らしている通りが神秘的な風景に見えてくる。

こう見るとヨーロッパみたいな外見も良いものだ。見た目を重視する黒羽らしい。ここにいたら褒めたいくらいだ。

俺と同じように通りを歩いている私服の女子生徒達。
あんまり人数が多くないのはギリギリで間に合つように調整している生徒が殆どだからだろう。

(まあ、好奇の視線は絶えないんだけどな)

そこまで男が珍しいんだろうか。共学からここに入つた生徒もいるに違いないんだが。

「おーいーー白ーー！」

知り合いがいるだけで心強いつていうのを実感した。

後ろから走つて向かつてくるちびっ子に手を振る。遠田で見ると更に小さいな、本人気にしているみたいだから茶化す程度に済ませているけど。その代わり元気だからマスコットキャラ的な存在だな。他の女子生徒の視線が集中しているが無視しよう。

「ふう…白も随分早いんだな。まだ20分前だぜ？」

「いや、道に迷つたら不味いなつて。でも他の生徒について行けば良いつて今更気付いた」

息を整えた舞佳が、俺の隣に並んで歩き出す。黒羽で慣れたこの身長差が、傍目から見たら痛々しい。きっと買い物をしていたら兄妹と間違われること必至。

昼間の制服とは違い、健康的な脚を露出したショートパンツに、赤いスニーカー。活潑的な印象を与える舞佳らしい服装で、素直に似合つてるなと思ってしまひ。やはり言葉遣いとかに難があつても可愛いからな。頑張れ元気つ子。きっと高校生からだと身長は左程伸びないぜ。

「引越しは終わつたのか？」

「荷物は元々少ないし、おやつ前に終わつた」

「お前の部屋つて殺風景そつだよな。」「……ベッドだけ置いてそ

う」「俺の部屋は牢獄かッ。机も本棚もちゃんと置いてあるー。」

失礼な舞佳の歩調に合わせながら食堂に向かつ。なんかこいつの歩調に合わせると早歩きみたいだな。脚は長いんだらうけど身長に致命的な難点を抱えている。

「そつこやで、学校で放課後にお前の話をされたよ」

なるほど。好奇の視線が増してひみつに感じていたのはそれが理由か。

どこのまでの説明かは知らないが、ここに編入されるだけの理由。神葬具の世界最強くらいまでは伝わってるんだろう。じゃなければ、いきなりの男子の編入を女子学生が納得する筈ない。それ聞かされ

ても男の編入反対派はいるんだろうナビ。

「世界最強で、アメリカで大暴れした神葬具使いつて言つのは聞いた。ついでに学園長の養子つて言つのもな。騒ぎになつてゐるぜ、尾ひれが付いて。説明にしてももつちよに言い方つてもんがあるだろーと思つたけどよ」

隣のちびっ子は眞間の態度と変わらず、鼻歌混じりに隣を歩いてゐる。

「……なんで俺のことを聞いて近付いて来るんだ？」

正直、世界最強とかそういう説明は無くして欲しかつた。仕方ないんだらうけど、きつと近付いてくる奴が少なくなるから。アメリカでだつてそうだつた。近付いてきたのがムードメーカーの男で早めに馴染めたが、神経質な奴が多い日本で、こんな肩書きの奴を早々と受け入れる奴なんてそうそう居ないだろ？
訊くと舞佳は不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「別にお前はお前だろ？ 眞間のことが無くとも、わたしはお前に話しあげたと思うぜ」

ああ、アメリカのあいつと同じ」と言つんだな。このあいつのが日本でのムードメーカーになつてくれるんだろうか。

「……はは、お前つて物好きだな。頭撫でてやひ！」
「子ども扱いすんなつつてんだろー！ 年上だー！ うちの方が年上なんだぞ！ わかつてゐのかー！」

食堂は広く、2寮毎に入れ替えて食事をするシステムになっていた。俺達のC寮はE寮と同じ枠組みで最初の班。30分で食べ終わらなきやいけないというタイムリミット付き。

食堂のおばちゃんに飯を注文し、出て来た焼き魚定食　曜日別に魚が違つらしく今日は鮭だった　を受け取るとテーブルを一つ確保している舞佳の元に向かう。舞佳が麻婆豆腐定食を既に食べ始めていたので、俺も席に着こうとした時、

「や、やつと見付けたわよ！」

もう一人物好き発見。今度は紅いミニスカートに薄い星型の刺繡が入った黒ニーソを履いている金髪だ。外見だけなら人魚も真つ青だが、喋ればメドウーサが真つ青になりそうな性格してる。

というよりまだ敵対心を持つてたのか。執念深いな、お前。怒りたいのはズボンをクリーニングに出さざるを得ない状態にされた俺の方なんだが。

「ほい、200円」

小便ズボンの文句を言つのも面倒だし、丁度良かつたので予告通りに徴収を開始する。

手を出すと田の前の金髪は首を傾げて、

「
は？」

と間抜けな声を出した。突然何を言つてゐんだこいつみたいな顔。美少女がそんな顔しちゃダメだ。

「いや、カフェの抹茶オレの代金。立て替えといったんだから払ってくれ」

「うわあちっちゃいこいつ。200円くらい奢つてやれよ……」

麻婆豆腐をご飯に掛けて牛丼さながらにかき込んでいた舞佳が、女子目線からの抗議を上げるがこの際無視しておこう。ってかそんな食い方する奴に女子目線は似合わん。今時小学生でも行儀良く食べるぞ。

「あー、確かにそれ気になつてたのよ。ほら、200円ピッタリ」
ちゃんと律儀に財布から200円を出して來たので、冗談半分だった俺は固まってしまった。

こいつには理由をつけて払わないかもと疑っていた俺を殴つて土下座させなればなるまい。金を握った金髪の手を押し返す。

「……冗談だ。取つておけ。それは受け取らない」

むしろこっち側から謝罪料で1000円払つてあげたいくらいである。

「まあそつちがそう言つなら。今度あのカフェで200円分奢つてあげる」

今時珍しいくらい律儀な奴だな。ここまで素直だと何かの詐欺に騙されて行くところまで行かされてしまうかも知れない。神葬具持ちなんだから状況は打破するだろうけども。

財布に金を戻すと、金髪は再び挑戦的な視線を向けて来る。

「アンタ、あたしをカフェに放置したわね！」

「なんか妄想に浸つてたみたいだから邪魔しない方がいいかなあと。決して面倒だなとスルーした訳じゃないからな」

舞佳が後ろで「絶対後者だな…」とか呟いている。
分かつていても口にするんじゃない。面倒事を回避するには、否定し続けるのが一番なんだよ。

「アンタが声かけてくれないから……あたしは遅刻して教師に教科書で殴られて！しかも角よ！？あの鋭利な凶器って言つても過言じゃない分厚い教科書の角！ムカついて殴りうつにもアンタはどう行つたかわからないし！」

「転校生だしあまり未紹介だから当然だよな。

というかここにいるんだから、この金髪は俺と同じC寮か舞佳のE寮なのか。寮にいる時に出会わなくて良かつた。もしかしたらこいつが逆上して神葬具出すかも知れないしな。割りと本気で。

半ば呆れたような目で見ていると名前も知らない彼女は人差し指で俺を指す。こりこり、マナー違反だぞ。

「昨日のお礼……言いたかったのに……」

小声過ぎて聞こえなかつたが文句の類だらうか。

昨日のことを感謝されても、キレられる言われはない。まさかこれが日本特有の逆ギレという奴か。怖い国だな日本。アメリカでは拳で黙らせればそこで文句が終わるつて言つのに。

「いや、殴られたのとか俺のせいじゃないし

なんか金髪の方　主に頭部辺りで　何かがぶちりッと切れる音がした。

「いいに宣言するわ！明日の放課後、あたしとバトルしなさい！」

「うわ、この鮭美味しいな。」飯と合つましありがいと塩が効いてるところが更に高ポイント

「一切れよ」(セツ)

俺の鮭を褒める言葉がナレーター真っ青だつたのか、飢えたハイエナのように舞佳が俺の鮭を奪う。取り返す間も無く奴の小さな口に鮭が吸い込まれた。

「テメエ俺が取つておいた通な部分の皮を！」そりと…許さねえ！
お前のファーストキスと等価なのに！」

「わたしのファーストキス安いな!? なんだお前の中のわたしは尻

「人の話を聞きなさいよ！」

無視されていた金髪がキレてテーブルを叩く。その反動で定食に付いて来た味噌汁が少しトレーに零れる。

だが俺の心の傷は金髪の怒鳴り声くらいじゃ微動だしない。鮭の皮を求めて禁断症状が出始める。

「だってお前……俺の皮をこいつが……ッ。舞佳、等価交換だ。唇を差し出せ

「あれマジだつたのか!? 誰がやるか鮭の皮一枚に! 重過ぎるだろ鮭の皮!」

テーブル越しに『鮭の皮の重要度』議論が勃発し掛けた時、更に金髪がキレて風が吹き荒れる。

「鮭よりあたしの話を、」

「さあ舞佳！簣巻きにされて今朝の木に吊るされるか俺とキスするか選べ！」

「なんで選択肢が両方重いんだよ！選択の余地が無いぞ！？ 誰から貰つて来るとかそういうヤツはないのか！？」

「聞けつつってんでしょバカ！鮭の皮は良いから決闘よバトルよ闘技場よ！」

その後も決闘が明日の放課後と決定したり舞佳へのキス未遂事件が勃発したり事態を見かねた2年生が俺に鮭を一匹くれたりと…ん？重要なことがついでみたいに記されてる？

関係無い。今の俺には頂いた鮭の方が大事だ。

「良い！？ 覚えときなさい！世界最強だろうとなんだろうと、あたしが倒してやるわよ！それで……勝つてから昨日のお礼を言って……素直に、カツ「良かつた……」って言つて……」

「あ？まだいたの？」

「殺すわ……アンタのその豆粒みたいな脳味噌を更に縮めてあげる……ッ！」

なんかまだ名前も知らないのに怨まれ度が急成長してる。

「あたしの名前は小波ひなみ 楓かえで！一年！覚えておきなさい、白＝レッヂ！」

……あ、こ寮なのな。こいつ。

06『金髪、再来。それと鮭の皮』（後書き）

はい、次回からは転入編になります。新キャラ多いです。

07『編入先は女子だけ』

教室、といつても雑壇式なのでそういう言いついのかわからないが。朝のホームルームで転校生紹介。ビニもかしこも、通過礼儀は同じらしい。

着慣れない白と青が基調の制服 即興で作られた物らしく本当に女子制服と「デザイン」が似ている を嫌々着た俺にもその通過礼儀の洗礼が待っていた。

転校は慣れないな。今回は見渡す限り女子しかいないからもっと落ち着かないんだけども。背後の黒板に思いつ切り頭突きしてこの場を凌ぎたい気持ちに駆られる。

「えー、今回『男子神葬具使い特別推薦枠』ということで転入してきた白=レッヂくんだ。皆、仲良くするように」

うわ、やべえ場が無音だ。胃がキリキリする。

さつさと挨拶をしよう。無難なヤツにギャグを織り交ぜながら挨拶をしよう。それならこの場をやり過ごせる筈だ。

「白=レッヂです。男子は俺一人みたいだけど、畏まらなくともいいし、好きな呼び方で良いんで。とりあえずこの学園にいる間よろしく

おい、どういひつた。ギャグも何も無い上に場が静まり返つてるぞ。

先生一、保健室に居座ろうと思うんだが推薦で入ったら登校免除とかあるんだろうか。本気でそんなことを聞こうとした時、一人の声が聞こえた。

「思つてた感じと違うね」「もつと筋骨隆々かと思つてたんだけど」「わたしは結構タイプかな）。彼女とかいないなら早い者順だよね」「かなりカッコイイんじゃない！？春が来たわよ女子学園に！」「席が後ろの方にも情報か写真ぶりーず！」

わらわらと姦しい騒ぎ声が広い教室を満たす。

担任だと思われるスーツ姿+メガネの先生に（これは良いんでしょか）と田で訴えると首を横に振つて諦めるように溜め息を吐いた。

質問タイムの到来である。根掘り葉掘りとはこのことだ。

Q「彼女はいるのー！？ いなかつたら好みのタイプはー！？」 A「別に性格が清楚なら良いんじやないか？」

Q「世界最強つてほんと！？」 A「なんか喧嘩つ早い奴がいてそれをフルボッコにしたらいつの間にか」

Q「学園長がお母さんなの！？」 A「いや、義母だけ……」

計50問くらいこんな質問がずっと続きました。

25問辺りからテキトウに答えてたよ。今日の夕飯何にしようとか考えながらな。

自由に座つていいと言われたので、何故だか5人掛けの席に1人で座つている女子生徒の隣を選んだ。

好奇の視線が一瞬でハイエナの目へ様変わりしたので出来る限り静かな場所にしたかった。他意はない。

「え……ここで良いの？」

何で1人で座つているのかと聞きたくなるくらい可愛い子だった。

ポニー テールにまとめている髪に気遣い上手そうな大和撫子の雰囲気。吊り上がりではないが意思の強そうな瞳。制服の下から自己主張している適度な胸。うん、金髪にこの子を見本にしろと等身大ポスター送りたいほどだ。

「いや、ダメなら移るが……ちと視線が怖くてな」

「ち、違うよ！？ ダメな訳じゃなくて……その、もう一人の子が問題なんだけど。後悔しないなら……どうぞ？」

なるほど。1人じゃなくて普段は2人で座つてるとか。

それで他の奴が座らないのはもう1人のせいと見た。なんだろう、不思議ちゃんなのかな。それとも問題児なのかな。

不良系でも仲良くする自信があるぜ。アメリカで培つた喧嘩腰を披露しよう。先ずは拳での語り合いからなんだが、これは相手によつて省略もありだ。

「では、1限目の天人学はこのまま開始する。レッヂくん、野々宮に教科書を見せて貰うといい」

日本には天人学なんて物が導入されてたのか。初めて知った。律儀な日本が作りそうな教科だな。アメリカじや軍隊仕込みの大雑把な知識しかないから有難い。

それより野々宮つて…隣の子だよな、やっぱり。

「すまんのみや、で良いのか？教科書見せてくれ」

「良いよ、頼まなくても！も、もうちょっと近くに寄るね……？」

長椅子で少し距離が離れていたが、教科書を見せる為に恥ずかしがりつつ野々宮から歩み寄ってくれる。

気遣いの出来る良い子だ。この席を選んで良かつた。こんな良い

子がいるのに、他の生徒が寄り付かなくなるほど問題児な同席者。日本刀を常備してたりサングラスを愛用している不良レベルじゃないと、この子の良さは相殺出来んぞ。

「ちなみに僕は”野々宮 灯火”だよ。宜しくね」

「おつ、白……って紹介されてるか。こちらこそ宜しく、灯火」

友達作りに全然困らなくて良かつたと安堵しながら言つと、それに灯火が反応して席を立つ。おつとり気味の性格とは裏腹に、驚くほど見事な起立。何か変なことを言つたか。今の発言の中にそれらしい言葉は無かつた気がする。

「ええツ！？」

「……いきなり奇声を上げるんじゃないぞ野々宮」

突然の綺麗な起立に担任も驚いたのか、少し躊躇いながら注意する。

その注意をされた灯火本人はと言つと顔を赤くして「は、はい……」と返事をすると力無く席へ舞い戻つた。起立と着席の落差が激しいな。

しかし何に反応したのか全然わからないんだが。
不自然な行動をする灯火に、

「どうかしたのか？」

耳打ちすると「ひやう……ツ」と言いながら距離を広げられる。
最近の日本の女子は恥ずかしがりなのだろうか。俺の鋼の心がちょっぴり傷ついた。

少し遠ざかつた距離のまま無理矢理作りましたと言つていいような笑顔。

「な、何でもないよ……？よ、よろしくレッヂくん」

レッヂくん……って俺のことか。呼ばれ慣れないから全然気付かなかつた。

「白ひで呼んでくれ。ファミリーームは慣れないんだ」と諭すと、「な、名前で呼び合ひのー？」

また注意された……結構堅実でいたつもりなのに……。

担任の注意を受けて項垂れながら着席する。散々だ。1限の授業中で一度も注意されるなんて明星学園へ入学する前も後も無かつたのになあ。

隣に座っている男子生徒へ視線を向けた。まさか初対面で灯火と名前を呼ばれるなんて予想外。こちらとしてはレッヂくんと呼ぶ気満々だったのに。

(アメリカとかは……やっぱり男女の仲がオープンなのかな。いきなり名前で呼び合うなんて……し、白くん？それとも白ちゃん……？白さん……？お、男の人と話したことなんてお父さん以外全然なかつたのにッ)

朝から奇妙なことばっかり起こる。

灯火こと僕が、朝6時に起床すると隣で爆睡している筈の相部屋生徒が備え付けのシャワールームで仰向けに倒れて爆睡していた。これは日常的に起ることなのでそこまで驚かない。彼女は寝相が

悪魔に乗つ取られたのかと問いたくなるほど悪いのである。

良い天気だなーと窓辺を見ると、カラスが一羽留まつてこっちを凝視していた。

パジャマを半分脱いでいたので、慌てて動物相手に体を隠す。カラスが怒声を上げる。ルームメイト起きてキレる。窓を開けてカラスの首根っこを掴むと地面へ投げ捨てた。ここ三階なんだけど……。痛々しい効果音の代わりに悲鳴が聞こえて、投げた本人はそのままの格好でまた爆睡していった。

朝食は個人制なので、制服に着替えて階別に設置されているキッチン部屋へ。

多くの生徒が自分達の朝食や弁当を作っている中、明らかに異質な物体を形成している生徒がいた。化学実験部だつたらしく、無断でキッチンを使用し、惚れ薬を作っていたそうな。

完成した暁には強烈な匂いだけで惚れ薬効果が発生。田にした生徒を追い回す。

僕はその光景に戦慄し、キッチンから出て行こうとして背中が壁にぶつかる。視線が集まつた時にはもう遅く……被害は下着一式でした……。

ボロボロになりながら部屋へ戻るとルームメイトが運動着に着替えてストレッチをしていた。いつもはそのままのロングの金髪をポニーテールで縛つてる。

「自分で起きたのッ！？」

田頃の彼女からは考えられないような行動に田を丸くしていると、

「今日ねーちょっと命を賭けた戦いして来るからー！準備運動とッ授

業サボつてトレーニングしていく！教師には上手く言つとこで！」

心から感動していた僕を心から冷ます絶対零度だった。

屈伸していた彼女は、戦場へ向かうと思えない笑顔を浮かべて部屋を出て行く。啞然としていた僕はちょっと待つての言葉の「ちょツ！」しか言えなかつた。

伸ばした手は宙を浮き……止めようとした相手は既に居なく僕は彼女のことを報告した教師に怒られた。理不尽過ぎて高校生活の中、初めて泣きかけた日でした。

07 「編入先は女子だらけ』（後書き）

転入編開始です

08『猛る野獣と怒れる金色』【挿し絵】

授業の合間合間で女子たちの質問責め。

途中から疲れて「ああ、そうだね」の一点張り。それでも質問し続ける女子達は俺よりメンタルが強いんじゃないかと心の底から感心する。見習いたくはない。

そんな訳で放課後、俺は慣れない校舎内の地形で苦労しつつ、女子陣を振り切った。

どうやら俺こと白=レッヂは遭遇頻度が限りなく低いモンスター扱いになつてゐる模様。見付けられるごとに捕まえに来るトレーナー。ポケットなモンスター達の気持がわかる。

「よ、良かつたよ……白がここを通りかかって……」

扉から部屋の外を覗いて、安堵の息を吐く灯火。潜入操作並みの慎重さで扉を音も無く閉めると、しっかりと内側から鍵を掛ける。決して厳重ではないが、それでも無いよりはマシ。

しかし、3階に灯火がいてくれて助かつた。沢山の資料を抱えていた事から察するに、教員からの頼まれ事の最中だったと思つが後で助けてくれた御礼に手伝おう。

見付からない為に電気は消し、窓から太陽の光だけが照り付ける空き教室。

これで厄介事が無ければ、隣で座つてゐる灯火と仲良く友達会話を楽しめるのに。廊下で騒いでいる女子陣が恨めしい。娯楽が無いからといってここまで男一人で騒ぐ神葬具使いつて何なんだ。緊張感無さ過ぎだろ。

「A班だ！そつちにはいない！？血眼になつても探し出せー！」

「班！現在仲間割れを引き起こしたB班と戦闘中ー！」

「神葬具出してきただと！？ 学園での展開は校則違反だろう！ えい向こうも厳重注意覚悟と言つならこちらもひよつてられない！ 神葬具を出せ貴様等！ E班を皆殺しだ！」

女子つて怖いんだな。アメリカでの天人全面防衛線を思い出せた。きつと暴れているのは殆ど一年生だな。緊張感の無さでわかる。意味の無い場面で神葬具を展開する所とか特に、神葬具を玩具と勘違いしている様にも感じる。

窓ガラスが吹き飛ぶ音とか悲鳴とか神葬具特有の威圧感とか攻撃した時の轟音とか……きっとこのドア一枚隔てた先に地獄があるに違いない。

「白は見ない方が良いと思うよ……女の子達の殺気が伝わるから」

先程、引き戸の隙間から廊下を覗いた灯火は、覗かなきや良かつたと心底後悔しているようである。そこまでこの抗争は凄いのか。女の欲は天人とタイマンするより恐ろしいな。

顔色を悪くしながら「僕がここに匿つて知られたら、僕は吊し上げられたりするのかな……？」と怯える灯火の肩を叩く。

「安心しろ。俺は食われるから」

安心させる為に親指を立てるど、灯火は体育座りのまま壁に寄り掛かった。慰め方がダメだったのか、灯火の表情が前よりも青白く見える。

人を慰める行為は俺の苦手な事の上位に入るからな。外国で男を慰めたら「バカにしてるのか！」と怒鳴られだし。灯火の精神的回復を期待する方が無茶か。

「…どっちにしろ見付かつたら2人も終わりなんだね。あはは、

今日は楓が起きてた時からおかしいな…?とはちょっと感じてたんだ。でも嫌な予感がするからで学校は休めないし、仕方ないよね…巻き込まれることには楓とルームメイトになつて慣れたもん…」

なんか灯火がちょくちょく出してる楓つて名前、どこかで聞いたことある気がするんだが、気のせいかな。この歳で忘れっぽくなつてるとか洒落にならんな。

ブルー入つた灯火が、窓から差し込む太陽光を見つめながらぶつぶつ独り言を語り出している。

「男の子と名前で呼び合つこともダメだつたのかな……。だ、だつて僕、男の子と話したことないし……。初めて会つて名前で呼べなんて……」「、恋人みたいで憧れて……え、えへへ」

灯火が独り言から恋人の惚氣を語る彼女のような表情になつた時、料理部の扉がガタガタと震えた。音から察するに、こじ開けようとしているのか。灯火が鍵を掛けさせてくれたお陰で、準備出来る余裕がある。

俺は灯火と顔を見合わせる。

「こじ開けようとしてるな」

「きつと部屋を片つ端から開けてるんだよ。鍵を掛けてるのはここだけだろ?」「不味いね」

素早く対話を済ませると頷き合つて窓に近寄る。「こじからだつたら闘技場っていう、あの円形の建物が一番近いだろ?」

素直に正面から出れば終了。脱出口は3階からの窓しかないが、やっぱり高いな。俺はこれくらいの高さなら行けるが、灯火は億劫になつてしまふだろ?仕方ないが、あれをするしかあるまい。

「僕が神葬具を呼ばうか…？」

手を窓辺に掛けて外を覗いていたポニー・テールの彼女の肩を掴んで引き寄せる。

有無を言わさぬように腰へ手を回すと、女子特有の柔らかさ。そして桃の様な優しく甘い香りが鼻をくすぐる。楓の葡萄みたいな香りも良いが、灯火のほんわかした匂いも好きだ。

手に少し当たったマシユマロは……気にしないでおこう。灯火のスタイルの良さを再認識させてくれて大変役得だが、そんな事考えている余裕もないし。

「必要ない！」

お姫様抱っこで抱いた灯火の「…………え？」という間の抜けた声。それから狼狽する彼女を黙らせるように三階の窓から一気に飛び出す。

> 225696 — 213 <

背後で爆発の効果音。B級映画も驚きの展開で、考え方通り踏み込んで来たみたいだ。

追いかれても嫌だし、このまま闘技場まで走り抜けよう。あの金髪みたいに神葬具から供給される脚強化能力系がない限り追い付かれることは無い。

純白の光で脚を守り、屈伸の要領で、地に着いた瞬間に屈み着地。筋肉への負担と衝撃を可能な限り無くす。

「お、お姫様……だつこあ」

俺は灯火の惚けた声を聞かずに行き出す。

全ては俺の貞操の為と、編入初日で仲良くしてくれた可愛いクラスマイトの為。そういうや闘技場に来いとか誰かに言われた気もするし、忘れかけてたから丁度良かつたな。

……遅い。放課後の鐘が鳴つてから1時間。
そう、きっとデーターとがだつたら待たせる方になるだろう、あたしが待つていいのだ。

私闘で無断の闘技場使用だけど、神葬具では相手を傷付けられなイフィールドだし。何より暴れ回つても闘技場にはそのフィールドのお陰で傷がつかなくなっている。見付かると厄介だが便利だ。

ただ……その、神葬具が身を傷付けない代わりに色々な意味で心を傷付けることになるのだが……うん、そこは伏せておこう。言つたらあの変態はそれを狙いそうだ。

「うーん。下駄箱にもちゃんと小波 楓つて名前書いた果たし状、入れて来たのに」

「氣付いてないのか、あの黒コート。これは肅清しなければなるまい。

神葬具を出して準備万端だつたのに、待つていたら神葬具の現界だけで疲れてしまつた。何もせずに神葬具を1時間くらい現界させられるんだなと冷静に感想を述べるほどである。

もし奴が来ても中止にしよう。万全じゃないと意味がないのよ。

そう、万全を期して倒すからこそ意味があるの！ アイツも今あたしに本気なんて出さないだろしそう。

「へ、変なところで紳士なんだから……」

「誰が紳士だつて？」

問い合わせ帰つて来たのであたしは反射的に口を開く。

「あ、ああああ、あの黒いロングコートのバカがあああああッ！？」

ダメだ、こいつ声は良いのに声量がでかいから高音が耳を塞ぎたくなるほど凄い。実際に耳を塞いでいた俺は目に不満を交えながら金髪を見る。

「お前、人を告白みたいに呼び出しどいて悲鳴あげるなよ…」

文句を漏らすと「人の背後をあっさり取るからよー」と逆ギレ。どう考へても今のは俺が被害者だろ。夢見がちだった金髪へ普通に声掛けただけだぞ。待ち合わせしていて『だあ～れだ』とか言いつつ目隠ししたら裏拳でも繰り出しそうだなこいつ。後ろ蹴りでも可。ちなみに俺はドMでも何でもないので嬉しくないんだ。

「つていうか何が告白よーぜ、絶対に違うんだからー！」

八重歯を鋭く光らせながら唸る金髪。動物的に噛まれたりするんじゃなかろうか。甘噛みでも絶対痛いぞ、その歯。どうやつたら犬の牙並みの犬歯が誕生するのか、性格にでも影響されたか。頭を掻きながら顔を真っ赤にしている金髪をなだめる。

「わかつてゐるつつの。決闘だろ決闘」

「そうよそれーここここ告白とかふざけたこと抜かすんじゃないわよー！」

噛み噛みだな。気が動転でもしてゐるのか、この女子は。

ちなみに腕に抱えている女子の方は間違ひ無く動転していて会話が成立しそうにない。だつてずっとうわ言で独り言呴いてるんだよ。しかも一喜一憂したり地獄の門番に出会つたように暗くなつたり。面白いは面白いんだけども。

「あれ？ アンタ、なんで灯火を……そのまま持ち帰る気！？」

「待て待て待て金髪。状況を見ただけで男を送り狼にするのは偏見だぞ」

傍目から見たら灯火を誘拐して来たように見えるのだろうか。何か事件が起こつたら真っ先に女性が被害者の見方だぞ、それ。

女性の勢力がどこの国でも大きくなつてゐる昨今、未だに女性の方がか弱いと言われる現状に疑問を抱かざる終えない。神葬具使いも女性の割合が徐々に増えている訳だし、そろそろか弱い男子が許されても良いんじやなかろうか。

「灯火を離しなさい！」

「え、ええ！？ い、いつの間に闘技場！？ それに楓まで！？」

「こ、これは違う！」

この金髪は人を親の仇のように好き勝手言つ。

疲れているみたいだから手を出す気は無かつたが、本格的に人権問題になりそうな物言いは抗議しても構わんだろう。

「人を誘拐犯みたいに言つるのはやめた方が良いぞ、おもらし娘」

これくらいの返しなら対等だろ？と選んだ言葉だが、次の瞬間、楓という金髪からブチリツと ゴム状の何かが綺麗に切れる音。どうやら俺の選んだ言葉は金髪の勘に触れた様だ。

田の前で無言のまま楓が屈み込む。手を脚に当てる姿勢を見る限り、きっと神葬具の召喚。

やはり男女の関係は理不尽だ。女子が犯罪者呼ばわり。方や少しの仕返し。理不尽としか表せない沸点の違い。

「殺す……あのことを漏らしたからには許さで置くべきか…」

「お漏らしと秘密を漏らすを掛けてるのかねえ……」

やばい口が滑つて本音が漏れた。考えた事をそのまま口に出すのは止めるとあれ程自分に言い聞かせたのに。

急いで闘技場の端に灯火を運んで行くと、優しく下ろして「え、ええっと…が、頑張ってね？」元の位置にそそぐと戻ると何事も無かつたように楓の前に仁王立ち。

「来なさい、神葬。分け隔てなく包み込む風を！」

爆風が楓を包み込み、俺の前で吹き荒れる。

こいつ天人とやり合つた時よりマジになつてないか。俺人間ですよ、貴女の味方ですよ。ちょこちょこ口を滑らせたりしたけど、ご愛嬌つて言葉が存在するのを思い出せ。

風が冂ぐと、田の前には一昨日見たばかりの脚鎧を身に着けた楓の姿。

逆鱗に触れたらしい。ふーふーと犬の威嚇顔負けな息遣いをしている。鋭い八重歯を見せながらだと、本気で狂犬を彷彿とさせる。

「行くわ。手加減したら許さない……というか殺す」

08『猛る野獣と怒れる金色』【挿し絵】（後書き）

書き直し修正が大き過ぎた為、上げ直しバージョン。
前よりは大人っぽい書き方になつたかな？

俺の手に持たれた拳銃が彼女の脚を塞き止める。

突風が目前で吹き荒れる様に感心していると、金髪はノーモーションでバク転し、俺から距離を取つた。

今の金髪からは目の前の敵を突き崩す、その一心しか見えない。

「はは。あの天人の時もそうしてりや、楽勝だつたろ？よ」

二丁の拳銃を交互に発砲して距離を取つた楓を狙うが　速い。
流石に神葬具で強化された筋力は伊達じやないようだ。拳を繰り出さないとこらから察するに、神葬具の強化能力は脚回り限定つてとこか。

拳銃の片方を放り捨てるに短機関銃を創り出し、即座に発砲する。

「くッ！？」

弾の射出速度が短機関銃と拳銃の混雜。楓もこれには少し戸惑いそれでも宙へ跳んで回避する。棒高跳びの選手張りに体を反りながら、俺の上空へ。

「はああああああああ！」

気合を込めた滑空蹴りに対してトリガーを弾く。

銃口から発された青い銃弾は真っ直ぐ楓の脚鎧へ向かい、跳ね返される。だが跳ね返した楓の体も体勢を崩して俺への狙いを空振る。正確には、紙一重の空間を楓のライ○ーキックが通り抜けた訳だが。

「な、何よその武器……。神葬具同士でかち合つて打ち負かすわけ

……？」

闘技場の地面を削りながら勢いを殺し、止まつた楓が目を見開く。見方によつては俺の拳銃の威力と楓の脚鎧が相殺し合つたようだ。

か。

首を横に振ると楓の脚鎧を指差して、

「いや。威力はお前の方が高いが、見え易いんだ、お前の場合。どこにどんな技が来るか。どんな体勢で打つて出るか……とかな。顔にも出る。そして、体勢を崩しやすい場所を撃つ。ほら、簡単だ」

言葉は要らないと言つたのよつに突進して来る楓を、銃で牽制しながら、不意に笑いがこみ上げて来た。久し振りだ、ここまで食い下がつてくる奴は。

今まで俺に戦いを挑んできた奴のほとんどは『こいつだからしょうがない』と小言を言つていたが、目の前の金髪は違う。どんなに力量差を見せても噛み付いて来る。まるで家を必死に守りつとする番犬のようだ。

「シッ！」

目にも留まらぬ速さで繰り出された回し蹴りを紙一重で避ける。その動作を待つていたかのように左脚でのサマーソルト。頸に当てて昏倒を狙つているのだらうそれを仰け反つて躲す。かわ前髪が風で持ち上がつた。

反撃を兼ねて無理な体勢からの射撃。威嚇射撃といった方が正しいか。

楓はそれに直ぐ気付いたのか運動のお兄さん真っ青のバク転5連続で難無く安全地帯へ移動する。

「まあ……そこも俺の圈内なんだがな」

拳銃を放り捨てて意識を集中し もう片方の手にも存続の短機関銃と同じ物を呼び出した。短機関銃の一丁。ずつしりとした仰々しい重さがグリップ越しに伝わって来る。

中距離間での一方的射撃というのは嫌いじゃない。勝てば生きれるんだから正義だ。

「さあ、もうと行け。火薬庫は最大出力だ」

出たら田だ。田の前にいる男……神葬具使いであることを疑つてしまつ。

先ず手に持たれた次々に種類の変わる銃。拳銃から短機関銃、アサルトライフルにショットガン。手品師にでもなるつもりかと問いたくなるほど武器を貯蔵している。例えるなら歩く火薬庫。

信じられないことにあれが全部神葬具……愕然としそうになる。神葬具は天人から刷り込みで得られる武器の筈で、西洋の武器にありがちな古めかしい大剣や今あたしが装備している脚鎧なんて物がほとんど。銃器……それだけでも不可思議なのに。

(神葬具を何十と持つてる?いや、そんな雰囲気じゃない。神葬具を出す時の独特的威圧感が全く無いし。だつたら、あれは何?)

またアイツは持っている拳銃を捨てて、新しい銃器を出現させる。一丁の短機関銃を向けて来る敵に八重歯を噛み締めた。

「何よそれ……ッ。弾切れも無いつてこと…?」

不満を漏らしながら走る。止まつていたら蜂の巣確定だ。神葬具はダメージを与えるが、それでも恐怖が迫つて来る。

どんな天人と契約したらあんな神葬具になるのだろう。

現代兵器を真似た神葬具。そんな物が有り得るのか。天人はプライドも高く人間の兵器なんて使う筈ない。今まで見て来た神葬具でも、あの男の物は別格だ。

神葬具の能力を全力で引き絞り、銃弾の雨を駆ける。銃弾が紙一重で移動するのを感じると冷や汗が伝う。

おまけに神葬具が遠慮なしに喰らい続ける体力や精神力。泣き言を言うと限界に近付きつつある。底を尽きた瞬間あの短機関銃があたしの色々な物を奪うんだろう。

「そ、そんなの許せないッ！」

縁で色付いた風を目の前に展開しつつ、バカの一つ覚えのように猛進。

風の守り。あたしの神葬具の特性である風の制御を応用した防御結界。ぶつけ本番で使つるのは不安だったが、どうやら完璧に成功したみたいだ。

風の守りが銃弾を受け流し、銃弾の軌道を変更。

「いっけえええええええッ！」

サマーソルトに展開している風を全て乗せて、”かまいたち”さながらの風の刃を飛ばす。

これなら一矢報いれる筈といつ賭け。迫るかまいたちを目前に、アイツはまたも銃を構えた。短機関銃の小さな銃口がブラックホールの巨大な口に見えて背筋が震える。

銃器の神葬具の意外性に埋もれそうになるが、アイツの状況判断やそれを惑い無く実行する度胸。攻撃を避け、反撃へ移る際の身体

能力。どれを取つてもあたしじゃ到底叶わないことに差を感じた。何よりアイツは本気なんて全然出してはいらないのだろう。

あたしの全力のかまいたちを難無く相殺させた男は、今度こそあたしへ銃口を向ける。

天人の殺人人形に次いで今度は世界最強の神葬具使い。戦つての相手が自信喪失させる相手ばかりだと言つのもむかつぐ。

「むかつぐ……。そうよ、銃が何よ。一昨日はもつとやばい奴と戦つたじやない。斧槍だつたじやない。だつたら……」

世界最強がなんだ。だつたらそいつに少しでも本気を出させてやる。

残された体力を振り絞り風の防御結界を開いて……屈む。脚鎧に手を当てる、

「アテンド
解放！」

脚鎧が吹き飛び、霧散する。後に残っているのは脚に巻き付く黄金の帶。必殺技はド派手とよく言われるが教師陣にも絶賛されるほどの派手さ。あたしの最後の奥の手だ。

風の盾を突き抜けながら、黄金に輝く脚に力を集中させる。

「確かに良い考えだ。意表を突くには打つて付けだらうしな」

アイツも両手の短機関銃を投げ飛ばし、天人と交戦時に見た解放の体勢。

あの白い手が……あの男の神葬具？

解放は神葬具を母体にして瞬間的に能力を爆発させるオーバーヒートのような物で。言つなれば必殺技。悪く言えば今まで使つていた体力、精神力を共に蒸発させる奥の手。

天人との対戦時。最低1対1という決まりは、ほとんどこの解放を使わなければ天人を仕留め切れない神葬具使い達の限界の為。もし天人を2体一気に相手したら解放で力尽きた時にザックリ行かれるだろう。

そうそう連発できる物でもなく、戦いの前に神葬具を1時間以上現界させていたあたしはHPヒットポイントをガリガリ削つて発動しているのに…。目の前の男の神葬具を母体にしない解放。手の淡い白が蹴り出された黄金と衝突する。

(こいつ……ただ解放した手を前に突き出してるだけッ！？)

黄金の帯に包まれた脚。全力全開で繰り出したその蹴りを、男は白い手の光のみで抑えている。

そう、ただ突つ立つて手を前に突き出してるだけ。愕然とした瞬間にあたしの風へ吹き付ける一筋の暴風。蒼い光に包まれた手の平が、拳として握られ 、

「I o l o l a s c i o」

黄金の帯が吹き飛ばされて、その拳があたしの腹部を押すように当たる。

もしあたしの頭の上にHPゲージがあつたら今ので全て吹き飛んでいただろう。何せ 、

「……はあツ！？」

目の前の”それ”をやつた張本人が目を見張る。遠くの灯火に至つては口を半開き。

体に全ての外気が当たり…肌寒い。それ以上に羞恥が増し あたしは真夏と真冬が同時に到来したらこんなんだろうか、と冷静に

考えていた。

「い、いいいい……」

口が回らない。噛み噛みの口から出た言葉は 、

「いやあああああああああああああああッ！――！」悲鳴である。

何故なら……神葬具の攻撃がクリティカルヒットしたあたしの服
は…HPゲージのように全て消し飛んだのだから。

09『V.S神葬具+脚録』（後書き）

はい、全然間が開きませんでしたね。

バトルは執筆がスルスル出来てですね。丸々一本を白V.S楓にさせて頂きました。

バトル大好きです。書くのも読むのも。

次からはコメディー（？）パートになります。

10『温かい家庭、レッチ家の場合』

またか三日連続で叩かれたり殴られたりするとは。そういう訳で俺の横つ面には赤い手の平マーク。一昨日は楓の失禁叩き。昨日は舞佳の王子様ストレーント。今日は真っ裸の引っ叩き。俺の言い分を述べさせてくれ。全部故意じゃない。

「世界は俺に恨みでもあるのか」

「こじで神はと言わるのは当て付けだ。

神だつたら俺達人間を殺したいほど憎んでいるんだから当然だわな。俺に狙いを定めているなら話は別だが。神葬具使い最強なんて言われてるんだし、案外否定出来なそうなのが笑えない。

「世界最強なんだから仕方ない。少なくとも神様は白にハートマークかと」

「遠回しで神様が殺したいランキング上位に入れるのやめてくれないか」「

ナイフとフォークを両手に持つて食卓に着いている我が義母。黒羽は学園の敷地内にある場所に住宅を構えていて……こういう時は普通嫌味なくらい大豪邸だつたりするんだろうけど。

小さいんだよな、この家。2年前に黒羽と2人で都内に住んでいた時はそこまでじゃなかつたんだが。黒羽曰く、俺が外国に行つてしまつた事で無理に都内に住む理由が無くなつたらしい。

前々から学園と都内の住宅を行き来するのは面倒と言つていたし、当然か。

なんだかんだ言つて俺が海外に行くまで、ここに引っ越す予定を伸ばし伸ばししてくれてたんだ。

「 ありがと」

「 ん、なんか言つた?」

呴いた言葉が少し聞こえたのか黒羽が訊いて来たので、

「 なんでもないさ。ほら、飯出来たぞー」

誤魔化しながら作り立てのからあげをテーブルに持つて行く。ご飯と味噌汁、それと鯖の味噌煮込み。サラダも付け合せて置いて置く。夕食は別段がつたりしていないレッヂ家の献立。

「 ……ナイフとフォーク要らない」

最初から何故出していたのか気にはなつてたが、ハンバーグでも作れば良かったのだろうか。

残念そうにしている黒羽に箸を一膳手渡すと俺も席に着く。向かい合わせて黒羽と、まるで合図したかのように「 いただきます」 が揃つた。

からあげを口に入れるとサクッと固めの衣が破れて肉汁が溢れる。うん、良い出来だ。

「 うわあ……美味しくなったね。また腕上げた?」

「 向こうの奴等日本食好きでねえ。暇がありや作つてたから向こうのは得意になつたよ。味噌汁とかも味噌を調整しといた。向こうに行く前と同じ味になつてると思つぜ」

言いながら味噌汁を啜ると、2年前の味とほぼ一緒。誤差が少し白味噌入れ過ぎたかな。

「……じゅ、母さんの手料理とか要らないかな……」

余り表情が変わらない義母なのでわかり難いだろうが、今の雰囲気にしゅんとしているのは落ち込んでいる、または溜め息と等価。からあげを猫舌ではふはふ言いながら食べている黒羽に、

「黒羽のは黒羽の。俺は好きだつたしな、母さんの卵焼き」「そ、そつ……良かつた」

照れながら答えた黒羽の様子に微笑みながら食事を進める。変な感じだな。明星学園の制服に黒ストッキング履いた義母と食卓を囲む男子学園生。背丈とか童顔とか、小学校高学年のような姿をしている黒羽。

不思議などこりもあるし、問い合わせたい箇所もあるが……まあいつかと思わせるその食事風景にまた笑みが漏れる。マザロンとか言われても言ひ返せないな、これじゅ。

「お、美味しいね、白」「そうだな。ほら、米粒ついてるべ」

笑みを作りたかったのだらう。その無理に作った笑顔に笑いながら、頬の横についているお弁当を取つてやると口に含む。米だけは良いのあつたんだよな。黒羽の変な拘り。

その動作を見ていた黒羽の余裕気が、少し赤く染まる。

「……女殺し鈍感男」

ソップを向きながら何かを呑いた黒羽に「どうかしたのか?」と訊くと、

「なんでもない。息子に良い様にされてる義母の図がなんだか納得行かなかつただけ」

言葉だけ聞くと正口すな感じがするな。アメリカの方だと「死んだらテメエの亡骸を抱いてやる！」とか下ネタに大らかだったから。こういう日本の言い回しは好きだ。

「でも本当に美味しくなつた。やっぱりいつぱい作つてると、成長するのかな」

「さあ、どうだらうねえ」

俺が料理を本格的に始めたのは仕事で疲れて帰つて来た黒羽を少しでも楽にする為。だからせめて美味しい物を食わせてやりたい、と励んだ。アメリカに行つてからは、帰つたら驚かせてやろうの一心で調理を怠らなかつた。それを暴露するのはちと恥ずかしいから言えないが。

嬉しそうに「飯をちょこちょこ食べる黒羽を観察しながら、俺も箸を進めた。

「そういや、黒羽。俺を呼んだつてことは、いつか起こつたのか？」

アメリカで暴れ回つてる最中に届いた手紙。それが切つ掛けで俺は日本に戻つて來た。

白=レッヂの強制返還。簡単に言つと、今直ぐ日本に帰つて来いつてことである。我ながら簡単にし過ぎた勘が否めないな。

向こううじや冗談抜きで戦いの毎日だつたし。強制返還の件はアメリカの方も渋々だつた。何せ、アメリカは防衛線を何度も突破され掛けているのだから。

自慢する訳じやないが、神葬具で近代兵器を召還可能なのは俺の

み。高火力な武器は神葬具に少ないし、言つても大剣とか斧類。対物ライフルと比べるまでもない。

黒羽からの手紙でなけりや、軍の仲間もいるし、俺だつて素直に帰らなかつただろう。

「一コース…観てないの？」

「観てない。アメリカ渡つてから一回もテレビを観てないさ。それに、重要なことなら黒羽から話してくれるまで待とうか迷つたけど、随分遅いんでな」

俺の世間疎さに呆れて溜め息を吐く黒羽。仕方ない、アメリカの戦線にテレビなんて出回つてないし。

「沖縄、取られました。これでわかる？」

「沖縄か……でかいな。沖縄にあつた学園と基地は？」

内心動搖しながら黒羽を諭す。確かに沖縄にはアメリカ軍と共にしている学園が建つていた筈。相当軍事力は溜め込んでいるに違いない。下手したら東京首都の神葬具部隊にも引けを取らない実力。しかし、その実力は黒羽の溜め息で搔き消される。

「壊滅。総理が白目向いたわよ」

あー……軍備には自信があるとか公表してたもんな、あの総理。アメリカ軍の力も借りてたし、一部の勢力丸ごと潰れたんだから、大目玉決定。

でも妙だ。ただの中位率いる部隊ならば堅実に対応出来ただろうに。対応が遅れたか。

「白が言いたいこと分かるわよ。わたしだつて沖縄そんなに簡単に

落ちる？って驚いたんだから

「人の心を読むな。じゃあ、何で墮ちたんだよ。沖縄」

そこまで物知らずなのかと落胆しながら茶を啜る黒羽を、ジッと待つ。なんだ、そこまで溜める内容なのか。次回へ続く訳でもあるまい。言つても中位が大群で押し寄せた止まりだ。

「来たのよ。上位が……一人でね」

「もうお嫁に行けない……」

「げ、元気出して楓！ほら、カレーだよ～？カレーだよ～？」

全裸に剥かれて　と言つても白には非はないと思つけど　哀愁漂わせる楓を慰めようと作つて来た得意料理のカレー。少しピリつとした辛めの匂いが食欲を誘う　筈なのだが。

「ふふ、見られた。全部」

こつちが退いてしまうほど落ち込んでいる楓に、僕も成す術がなかつた。

確かに男の人に裸を見られたのはショックだと同感出来るし、励ましたいのだが。

(どう励ましていいのかわからぬいや……)

彫刻の人は裸を何千年も見られるんだからいいじゃない！……殺されそうな気がします。

白は興味無さそうだったし……何度も蹴られた後に窓から放り

出されそうです。

楓は優しいからそんなことしないんだろうけど。でもどうやって励ませば良いのか検討もつかずに結局「カレー美味しいよー……？」に落ち着いてしまう。ポキヤブラーの少ない僕が嫌いです……。どんよりとした重々しい雰囲気をベッドの上で体育座りしながら発する楓に頭を抱える。

とつぐに食堂での夕食は終わっているし、だからこそ自作カレーなのですが、今の楓には何も通用しないのでしょうか。体験してみないとわかんないよね、その辛や。

（戦つて服が吹き飛んで男の人裸を見られる　うわあ、辛い）

想像だけでここまで辛くなれるのだから実体験者は廢人化する程なのだろう。

（で、でも白なら……そこまで嫌じゃない……かも？）

お姫様抱っここの感覚がまだほんのりと残っていて、その感覚を思い出そうとしている自分に少し赤面してしまつ。変だなあと考えながら楓を慰める作業に戻つて　今夜も更けて行く。

10『温かい家庭、レッヂ家の場合』（後書き）

新しく書を直しました
これからじゅうじゅう上げてこきます

11『不自然な楓』

いきなりですが、僕こと野々宮 灯火。今日こそ胃が破裂しそうです。

左側では授業上の空でペン回しをしている明星学園初の男子生徒。転入から2日後でファンクラブ作るうなんて話題が出来るのだから驚き。

確かに優しいし、昨日の戦いを見る限り強いし。カッコいいとは思うけど…それ以上に底知れぬ人。銃器の神葬具を扱つたり、1年トップクラスの楓を圧倒したりと。

そのミステリアス具合も女子の間では評判みたい。率直に言いましょう。今現在、この胃を締め付けるような風景を作り出しているのはこの男子ではない。さて、視点の方向を左側から右側へ。

顔を真っ赤に沸騰させたり、過去の過ちに頭を抱え込んだり、僕の隣の男子に射殺すような視線を向けたりと。まるで悪魔に取り付けられた少女。友人として見たくなかった友達の一面ベスト3に入る。ちなみに1位が寝相。

「灯火！なんでアンタあの男に同席許したのよ！」

鬼気迫る表情を浮かべながら小声で捲くし立てて来た楓に、後退しながら苦笑いを浮かべる。

「えつと…まさか楓と白が知り合いだなんて。出会つてすぐ友達になつたの…？」

「人のおし 恥ずかしい場面を暴露して挙句の果てに全裸にされる男と友達になれるのアンタは？」

服が吹き飛んだのは闘技場のせいで白は知らなかつたと思つんだけど。

説明すると、闘技場は神葬具を半無力化する結界らしき物で覆われている。

半無力化。言葉通りの意味で、神葬具のダメージを完璧に消し去ることなんて出来ないし何かダメージを向かわせる媒体が必要だつた。それが服。

授業や許可を貰つた戦闘訓練では下着が残るよう教師で調節するのだが、

（昨日は楓が許可無しでやつたみたいだしね…）

全面的に非があるのは我が友のような気がした。教師達に見付かつていたら僕も白も含めて教育的指導を受けていただろつ。

実際はテロ並みの暴動を引き起こした生徒達の鎮圧で四苦八苦し

ていたらしい。

校舎内を神葬具の解放で吹き飛ばしたり。全裸の 浜辺に打ち上げられた水死体のような 生徒があちらこちらに倒れていたりと。

この学園の教師になつた人達は後悔の連續だ。定年まで元気に頑張つて欲しい。

「ひじり。授業は真面目に聞くように

2日連続で天人学の授業中に注意を受けるとは思いませんでした。

昼食時、考へが纏まらず、食堂できつねうどんを啜りながら放心

状態。

黒羽が言つてた上位の降臨。一般にはまだ公表されていないみたいだが、沖縄が占領されたことは伝わつてゐるようだ。

上が上位のことを見隠したいのは凄く理解出来る。沖縄が取られただけでも狼狽する事態なのに、上位が現れましたとか暢気に公表すれば、更に混乱は増す。確実に増す。

俺は知識しか無いが、上位 神の側近、10神階という物の総称である。

その名の通り、10位まで選定された天人があり、その力は今のアメリカを1体で壊滅まで陥れられると言われている。ピラミッド順で1位が頂点に君臨しており、尤も神に近しい天使。

10神階になると翼の色が違い、駆逐宣言時の灰色の天使が良い例である。

黒羽は俺に、天人の10神階は生命の樹の守護天使達と酷似していると言つていたが、その言葉通りとすれば灰色の翼の天人は2位。何故駆逐宣言時に自ら地上を滅ぼしに掛からなかつたのが疑問だ。きっと、天人が出現した直後の大パニック状態の人間なら、あの2位だけで皆殺しに出来たに違ひない。

「重大そうな顔してどうしたのよ、**最強**」

「おう金髪。^{バカ}もう許してくれたのは嬉しいが、考え方の最中なんだ。この備え付けの塩で遊んでも良い。ああ、食堂の物だから大量には使うなよ」

「昨日のことも4日前のことも許してないわよ！つというか塩で遊ぶつて何よ！心配して損したわよ！」

一回の台詞で3個も事を済ますなんて凄いな。尊敬するわ。

上の空から戻ると、何時の間にか俺が腰掛けているテーブルの向かい側に、金髪が座つてゐる。顔を真つ赤にして鋭い八重歯をぎら

つかせている姿を見るに、腹が空いているのか。

きつねうどんのメインの油揚げを箸で掴むと、楓の目の前に持つて行く。

「ほらほら～、油揚げだぞ～」

「何の儀式よ！？ サンドウイッチ買って来てるわよバカ！」

俺からのささやかな謝罪だというのに。この金髪は締めてバカと言いやがる。失礼極まりないな。油揚げに失礼だろ、泣いているぞ油揚げが。

行き場を失つた油揚げが箸に摘まれてぶらぶら揺れる様は悲壮感に満ちているな。

「そういうや、灯火はどうしたんだ？」

いつも金髪の傍らで癒し系笑顔を浮かべている灯火が、珍しく同行していない。遂に愛想尽かされたか。灯火は粘つた方だと思う。俺が灯火の立場だつたらストレスで胃が破けかねん。

「職員室に呼ばれてたみたいよ」

灯火ランクの優等生が職員室に呼び出される訳か。確實に、教職員に面倒事押し付けられてるか、授業中の注意の件だろうけども。いや、後者だつたら最優先で目の前の金髪も呼び出されてるか。油揚げを一口で口に入れると、楓が心底嫌そうな顔を浮かべた。軍人流の食べ方の何所がお嫌いか。アメリカの方でも、いつ何時敵が現れるか分からぬから飯をかき込むのは常識だぞ。

「アンタって、食べ方に品が無いわよね……」

「食べ方なんて個人の勝手だ。そんなことに目くじら立てると、

また怒りっぽくなるぜ？」

「誰が怒らせてると思つてんのよーもひ、知らない！」

楓はソッポを向くと、そのままの体勢で包みを破き、サンドウイッチを取り出して口に咥える。今のお前の方がよっぽど品がないと思つぞ俺は。口に出すと怒り狂つから黙つておくが。

考え込んでいた内に冷めて伸び切つたうどんを豪快に啜る。元々女子用メニューで量が少ないから、これくらいの麺が丁度なのだが、汁が全然ないのは考え方だ。素つぶんでもここまで酷くない。

「……なんか、悩んでるの？」

金髪には珍しく、しおらしい態度。

そこまで気に掛かるほど、俺は可笑しかつただろうか。普通通りに振舞つたつもりなんだが。

「別に、そこまで大した事じゃなこせ」

俺の返答に納得していないのか、楓が不満気な目線をぶつけて来る。

会つて4日で相手の全部掌握出来たら人間関係苦労しないわな。ま、そんな相手が勘付く程、深刻気な顔してた俺も俺か。七味を手にとつてうどんにまぶしていると、楓が俺を見続けていることに気付く。

一瞬、七味を物欲しそうに注視してゐるかとも思つたが、どうやら違つみたいた。

「ねえ、アンタ、神葬具について詳しい？」

随分唐突だなと感じながら、俺の中の神葬具の情報を整理する。

アメリカに渡っていたのもそうだが、結構一般人よりも詳しくはなっている筈だ。軍事機密の書類とか余裕で閲覧してたしな。その実、見せなきやストライキするぞつて脅した結果。やはり平和的な交渉には脅しが不可欠だよな。

「そこ等辺の研究員よりは詳しいと思つぜ」

アメリカの資料理解するのには難儀したんだ。このくらい自負しても良いだろ。

黒羽からアメリカの情報を逐一報告してくれとは言っていたが、その為に小難しい英単語をずらすら並べた資料を解読するのは吐き気を催すほど苦痛だつた。もう絶対にしたくない。

「じゃあさ、血縁間での神葬具の受け継ぎつてあるの？」

「親からのプレゼントってことか？前例は無い……つていうか有り得ないだろ。親が刷り込みしたのにその神葬具が子に渡るとか。親の神葬具はどうするよ」

神葬具は、その持ち主の死亡と同時に消失すると結果が出ている。天人との契約は刷り込みを行つた人物だけに有効な物だ。受け継ぐなんて事は存在しない。

「て、天人と刷り込みしないで神葬具が生まれるとか！」

焦った口調になる金髪を、不審に感じながら首を振る。

神葬具とは結局の所、天人から奪つた物。元々人間に宿つていたなんて事は有り得ない。それこそ、天人と人間の間の子供、なんてレベルなら分からぬもないが。そんな事有り得ないし。

「楓、だつて天人と刷り込みしたから神葬具持つてるんだろ？そういう

うこつた。元からの未知の能力なんて人間にはねえよ。全部科学で解説されてんだから

どんな奇跡が起こつても、人が起こせる奇跡は確立で表せる。だが、神が起こす奇跡はどうだ。地上を作つたり、猿に知能を持たせて人類にも出来る。それが、俺達の敵。神からしてみれば、自分で生み出した飼い犬に手を噛まれたって感じか。

サンドウィッチの残りを俺に放り投げて、楓が席を立つ。おい、食べ物を粗末に扱うと食べ物に泣くぞ。

「あたし食欲ないから……あげるわ、それ」

不気味なくらい元気ないな。どうかしたんだろうか。

食堂から去る楓の背を眺めながら、遠慮なく貰つたサンドwichを食す。ツナマヨか、中々良い趣味してるな。今度はたまごを頼むぞ金髪。

1.1 『不自然な楓』（後書き）

次回は少し遅くなるかも知れません
誤字脱字があれば、報告して頂けると助かります

12『舞佳の大剣、付きし双剣』

「あー、やっぱ……でじやびゅ……」

放課後、女子達に追い掛けられるのがトラウマになり掛けている俺は、一目散に教室から離脱。真っ直ぐ寮を目指していると、目的地の通りの木にぶら下がっている女子生徒を発見。

既視感を感じたが、どうやら現実らしい。懲りないのか、こいつ。もしかしたらこいつは囮で、近付いた途端に周囲から女子が一斉に出現したり はないか。

「よつ舞佳。またか」

初対面と同じ格好で吊るし上げられてるスペツツ娘に声を掛けると、「よお……」と手にした大剣を振りながら返事を返して来た。死人の息だが、まだ言葉を發せられる程度には元気があるみたいだ。しかし、どういう原理なんだ、この宙吊りは。

神葬具は契約した時点で持ち主の武器となる つまりは反抗なんてしない筈。重複神葬はこんなところも普通と異なるのか。契約したは良いが、神葬具が主を認め切れてないのか。まるで反抗期だな。

腕組みをして觀察する。背丈に合わない大剣もそうだが、この無理に嵌め込まれた造りの双剣。揃つて1体の天人から刷り込んだにしては不恰好。素人のプラモデル製作員が無理矢理やってみました感が否めない造形。

双子同然に生まれた大剣と双剣ならば造りも一緒だと思つんだが。

「そろそろ降ろしてくれ……マジしぬ」

すまん、持ち主の危機を完璧に忘れてた。

「まだ気持ち悪い……」

あんだけ奇麗な宙吊りを長時間保ち続けてたら、平衡感覚も逝かれるに違いない。

重要書類を忘れたサラリーマンのように顔色を真っ青にした舞佳を隣に、寮への道を進む。これも案内された時と同じだな。

「お前ってマゾなのか？」

「違う……おえ、大声出したら吐き気があ

思ったままの感想を述べると、舞佳が反抗しながら青白い顔をした。

本気で戻しそうなら、そこ等邊にある店に駆け込んでくれ。ここで戻されると俺まで糞みの田で見られる。

「戦つ以外に出すと……神葬具が制御出来ないんだよ……。言つとくけど、趣味じやねえからなッ」

宙吊りが趣味の女子学生って特殊だよな。暴露されたら珍しがる前に引くと思うが。

神葬具が制御不可なんて初耳だ。しかも戦闘時は普通に振り回せて通常時に出すと木にぶら下がることになる。神葬具がイレギュラーカ、はたまたこのカチューシャ口リがダメか。相性の問題でもあるのか。

「認められてないとかか? 神葬具に自我があるなんて初めて聞いた

が

訊くと、舞佳が首を振つて寂しげな表情を浮かべる。

いつも笑顔のこいつを見ていたから、その不意打ちに少しばかり驚いた。

「いや……まあ、持ち主変わつて納得してないんじゃねえかな。小娘が儂を使いこなそう何ぞ一〇〇万年早いわ！」とか言つてたりして

「持ち主が変わる？」

舞佳の発言の気になつた箇所を上げると、言つた本人はしまつたと顔に出して頭を搔いた。失言だつたみたいだな。

「あ～～……しゃあないよな。2回も失敗してるとこ見られてるし……」

言葉の意味を上手く取れないでいると、舞佳が素早く目の前に神葬具を展開し、地面に突き刺す。大振りの神葬具特有の濃い威圧感が肌に突き刺さつた。

手馴れた手付きで舞佳が大剣に触れた瞬間、大剣の軸が一瞬だけぶれる。

「はは、これだけでも一苦労……だよつと！」

ガシャンッ。そんな鈍い金属音が響き、大剣に固定されていた双剣が、放り出されて宙に浮く。鞘代わりになつていていた大剣は、双剣を出したら用済みだと言つかの如く焼き消えた。

「こいつ等は、わたしの弟の形見なんだ。能力で、^{ヒンチャント}合体つてやつを

持つてゐる。他の神葬具に合体出来るつて訳だ

白く、片刃の剣と黒く、両刃の剣。両方とも形は違うが、舞佳が手にした双剣を見ていると確かに似ている気がする。双子剣……なのだろうか。

体力の消耗を気にしたのか、双剣を直ぐに引っ込めた舞佳に、疑問が沸いた。

「ちょっと待て。形見つてことは、弟は死んだ……のか？ だったら何で弟の神葬具がこの世に残つてゐる？」

俺だって間近で目撃した死は多い。神葬具使いの神葬具は、その所有者の死と共に消失するのが基本。受け継げる物でも無ければ、扱い手が存在しなければ現界は不可能。

流石に訊き方が不味かつたかとも考えたが、舞佳は少しばかり辛そうな顔をして、

「わからねえけど、わたしの大剣にくつ付いて、一時的にわたしをマスターにしてんじやないか？」

つてことは舞佳は重複神葬持ちでもなければ普通の神葬具使い……か。

見る限り神葬具の大剣としては並み以上のようなが、それでも下位の物。予想は違つたが、大きな収穫があつたな。まさか他の神葬具に寄生して延命する神葬具があるとは。

「双剣が認めてくれねえから、大剣も空回るのが多くなつてゐるんだけどさ。でも、あいつの置き土産だし……消したいなんて思わない。だから、悩んでるんだけどな」

先程まで双剣を握っていた手を開閉して、思い出に浸るように目を閉じる舞佳。弟のことでも思い出してるんだろうか。俺には家族の記憶も無いし、浸れるような過去もないが。こいつみたく幸せそうな顔が出来るんなら、思い出も良い物なのかもな。

「今日分の仕事が片付いた　つて一息ついた途端にこれって、完全に嫌がらせよね」

事務の仕事とかは他人に任せられても、こういう重要書類を人任せにはさせられない。実際、他人に見られたら不味いことになる書類ばかりである。

脚を組み直して紅茶のティーカップを手に取ると、口元へ傾けた。溶かして置いたイチゴジャムが程よく合い、自分を賞賛する。今日の紅茶は中々だ。白にもご馳走してあげられたら良かつたのに。でもまあ、こんな問題を持ち込んで帰省した息子に、ご馳走する必要はないか。

左手を伸ばし、頭を悩ませる大元の封筒を掘む。小さい体はこれだから不自由だ。

「編入届け…ねえ。男子を無理矢理ねじ込むよりは簡単かも知れな
いけど」

封筒をくるりと裏返すと、開封口に貼られた蟻印。貴族が愛用する赤い封蠅に、刻まれた剣の家紋。

白の時もそうだけど、ここまで胃が痛む出来事が重なると冗談抜きに胃炎が発症しそうだ。職業柄仕方ないで済ませて良いものか。

総理はこの件でアメリカ大統領に激怒されたらしく、泣き付かれわたしも、これはどう処理するのが最善か悩む。きっと目的は義

理の息子。男一人を追う為にここまで仕出かす女ならば、直ぐには帰国しないだろ？

確かに両方から恨まれるのを覚悟しなくてはいけないが、それでも戦力が欲しいのもある。

「板挟みつてホント面倒…」

こんな事言いつつも結果は決まっている訳だが。うん、言い訳つて必要よね。

「総理と白には泣きを見て貰いましょう」

込み上げる笑いを堪えつつ、蝶を剥がして封筒を開封。中から一枚の用紙を取り出し、そこ記入欄に英字で名前を記す。オーダーメイドの万年筆の黒字は、滲む事無く、色濃く刻まれた。
『kureha-reddi』

「これだから飛行機は嫌いなのですわ」

座つたままで長時間と比べたら、2時間耐久走の方が好みに合つ。普段体を動かしている身からすると、拷問のように長い時間だった。スーツケース片手に、空港を見渡すと、日本人の多いことが多いこと。先程まで実感が湧かなかつたが、この光景を目にして自分が日本に渡つたのだと実感する。愛しいあの人から日本の事は教えられたが、やはり体験するのと訊くのでは丸で違う。

『ふああああ……姫しゃま、付いたのでしゅか？』

脳内に響く声と、頭の上でもぞもぞと動くぬいぐるみを彷彿とさせる感触。

「ケルビン、寝過ぎると体に悪いですわよ。それと、貴方はわたくしの使い魔なのですから、何時でも動けるように警戒状態でいて頂かないと困りますわ」

頭の上に乗つかつてころそれに注意すると、

『大丈夫でしゅよ、姫じゅま。やる時はやりましゅ』

緊張感のない欠伸を交えながら、ぽんぽんと頭を叩いて来る使い魔に軽い頭痛を覚えた。甘やかし過ぎたのか。そりや確かに猫可愛がりしておやつとかもあげているけど。

これでも戦闘時には頼りになるのだから、外見では侮れない。

『いじりケルビン。お嬢様を困らせるのは止めるでいぢる』

ステッケースを持つ手とは反対側の腕で抱き抱えられている子犬のシベリアンハスキーもどきが、頭の上のそれに随分と特徴的な説教言葉を吐く。

青い毛の色がトレードマークの、使い魔²。これでも、氷狼^{フローラン}を想像して創り出した。まさかこの子犬が氷狼だとは誰も想像出来まい。毛が特殊な色をしている以外は至つて普通 、

「では有りませんわね……。喋つてますものね」

いつの間にか空港の人々に視線を向けられていて、慌てて移動を開始する。ぬいぐるみと勘違いされる一匹を頭に乗せ、腕に抱えて喋る姿は奇妙だったに違いない。

『お嬢様、失礼とは存じますが、まだ学園からの返事が帰つていな
い今、突然訪問するのは如何な物かと思つでござる』

「五月蠅いですわよダイゴロウ。文句を言つならアメリカを発つ前
になさい」

ダイゴロウと呼ばれた小さい氷狼は、腕の中で『拙者は忠告した
でござるよ……』と小声を漏らしているが、気にしない。

全てはあの方の為。日本の言葉で言つならば例え火の中藻屑の中。
……水だったかしら。

「待つていて下さい、白様！」

12『舞佳の大剣、付きし双剣』（後書き）

少し遅くなりましたね、すみません
今度からちょこちょこ新キャラ出てきます
台詞多くなります。作者大変になります
なんでこんな面倒な設定にしたのか……頑張ります

13『月灯りの中の散歩』【挿し絵】

嫌な予感がする。こう、第六感が囁く様な。

黒羽の部屋から失敬した英國新聞のガーディアンタイムズを広げて、『中国の万里の長城が天人により崩壊』の記事を熟読最中に感じた悪寒。慌てて辺りを見渡すが、それらしい人影は居ない。

月明かりに照らされている寮の1階。何時もは生徒が往々する大広間のロビーだが、夜遅くの静まり返っている空氣と、消灯済みの薄暗さが相まって幻想的な場を醸し出す。

まあ、月明かりを頼りに読む新聞が乙なんだ。

(アメリカにいた時以来だな、この寒気)

こんな悪寒を感じる程の鋭い視線を放てるのは、俺は一人しか知らない。

だが、あいつのいるアメリカは現在、テキサスを筆頭にした重要地域に天人の襲撃を受け続けている。こんな手を取り合わなきやいけない時期にも土地の争いが起こつてたり、国間で神葬具使つての戦争が起こり掛けたりと。

危険が蔓延つてゐるこの時に俺なんかを追つて日本に来たら拍手を送ろう。

ってか中国は前も同じようなこと言つてなかつたか？重要拠点が凍つたとか。確かに中国は神葬具使いの人数が世界2位だつた筈だし、訓練が行き届いてないとしか

「あれ……？白……？」

突然呼び掛けられ、新聞から顔を上げる。

見ると、薄暗い中に、百合の花柄をあしらつたパジャマに身を包

み、パーティーで結んでいた髪を解いた灯火の姿。もう深夜だし、寝る前の格好なのは当然か。

> 28951 — 213 <

「えっと、何してるの?」

お互い様と言いたくなつたが、月明かりに照らされた普段とは違う灯火の姿に若干見惚れて、それを隠すように新聞を掲げて見せた。

「眠れなくてな。新聞読んでたんだ」

これで灯火と俺に面識が無かつたら俺は変質者と勘違いされそうだ。何せ女子寮のロビーで深夜に堂々と新聞広げてるんだから。就寝時間はとうに過ぎてるし。

灯火は突き出された新聞を受け取り、感嘆の声を挙げる。

「英語の新聞……」

俺が英語を読めるのがそんなに意外か。これでも2年留学してたんだぞ畜生。

おつかなびっくりの表情を浮かべる灯火に不満を抱えるが、いつも親切してくれているのと、その可愛いパジャマ姿で許そう。日頃の行いはこういう所で作用するんだな。

「ところで、灯火はどうしたんだ? もう2時だぞ」

これは俺の想像だが、灯火は規則正しく日常生活を送る人柄だろう。こんな真夜中に起きているとは到底思えないのだが。

かく言う俺は夜更かしが基本。新聞とか小説に没頭していると時

間を忘れてしまつんだ。

「由……聞いてくれる?」

深刻気な表情の灯火に頷く。なんだか核爆弾発射して中位の集団がピンピンしていた時の大統領みたいな顔してるな。そこまで気負う内容か。

「楓がベッドから落ちて……僕のベッドを寝たまま蹴つてね。僕も背中から床に落ちたの」

意識しているなら未だしも、無防備で背中に衝撃はきつい。背骨もあるし延髄とかやばい部分てんこもり。寝てる状態でそんな由に逢つたら瞬間起床物だ。

あの金髪、性格と同じで寝相も荒いんだな。灯火に同情の念が浮かばざる終えない。

「お陰で由が覚めちゃつてね。散歩しようかなつて思つてたんだ」「へえ、夜の散歩か。良いな、それ」

眠気が全然湧かない今、夜の散歩にかなりの魅力を感じる。今度俺もやつてみるか。

思考を巡らせていく最中、灯火がいきなり俯いて「……しょに……く?」何かを呟く。上手く聞き取れなかつたので、わんもあふりーす。

再発言を願い出ようとすると、意を決したのか、灯火が俯いていた顔を勢いよく上げる。赤面癖でもあるのか、顔が真っ赤に染め上がり、物凄い緊張感を物語つていた。

「い、一緒に、さんぽ、しませんか……ツ?」

(わあ、わあ……きょ、距離とか遠過ぎてないよね?自然だよね?)

却下されると確信していたのに、まさか承諾して貰えるなんて。男の子が隣を歩いてる。この状況だけで頬が再沸騰するのが分かる。今まで何度もした夜の散歩の時間が、別物の様に長い。でも、嫌な心地じゃない。遅い歩調の僕に、白が揃えてくれる足並みが、恥ずかしいけど、それ以上に嬉しい。今直ぐ頬を隠して身悶えたい衝動に駆られた。

黒い空の下、月を眺めている白を横目で盗み見ると、同じ年齢とは到底考えられないくらい大人びた表情が視界に映る。

(背……大きいなあ。僕も高い方だけど、やっぱり男の子なんだよね)

世界最強の神葬具使い。全然驕らないで、普段は余裕綽々の雰囲気を身に纏っている男の人。かと思ひきや楓と言ひ争つたり先輩を弄くつたりと。

正直、会う前の白を噂だけで判断すると、悪意に満ちた魔人の外見しか候補に上がらなかつたり。

(女の子と一緒にいること、慣れてるのかな。全然、緊張していないみたいだし……)

こちらはと言えば、余裕なんて雑巾絞りしても出ない訳で。楓だったら、喧嘩しながらでも、もう少し明るい雰囲気を作れるんじやないだろうか。

いや、悲観的になるのは良くない。自分から話題を提供する努力

も必要だと、一大決心。白から見えない様に拳を握り締める。

「深呼吸で喉の調子を整えて、声が裏返らないように気を配り、さて話し掛けようとした時に、

「そういう気になつてたんだけど、灯火と楓はどうやって知り合つたんだ？」

「凄い勇気を絞り出したのに一瞬でへし折られると涙が出そうになるね。

きつと白は、僕と楓の性格の違いを考慮した上で言つてるんだろう。今だつたら未だしも、出会つた当初は、僕も楓と友達関係が生まれるなんて想像出来なかつたし。

「え、えつと、楓と知り合つたのは、この学園に入学してからなんだ」

よくよく考えると、まだ楓と知り合つて3ヶ月程度しか経つてないんだよね。寮で同室な事もあつてか、ずっと前から友人だつた気さえしている。

「最初は名前どかも知らなかつたんだけどね。初めてのダンジョン授業で」

楓は初授業にも関わらず神葬具を使いこなしてて、驚かされたのが記憶に新しい。何より、あれだけ目立つ外見。第一印象は強烈だった。

楓と同室に割り当てられた頃、僕はまだ、”あの出来事”から全く立ち直れてなくて。自分で言うのも何だけど随分暗い印象だった

と思う。

ルームメイトだったけど、僕はいつも俯きがちで。楓と顔をまともに合わすことなんてなかつた。

そんな時期と初訓練が重なり、初のダンジョン授業の最中、チムメイト無しの僕は迷宮内部で迷い、困り果てていた。一人で進めるような場所じやないし、何より未だに戦闘への恐怖が拭えない。其処彼処に設置された松明の灯りの中で、最低得点かなと諦め掛けていた時、耳障りの金属音が聞こえた。鳴り続く音を頼りに、迷宮の奥へ恐る恐る進んで行くと、

「つち！解放！」
アテンド

苦戦しながらも、3体の訓練用天人相手に単独で交戦している女子生徒の姿。

所々破け散つた制服に、体の動きと共に縦横無尽に動く長い金髪。脚に装着した西洋鎧の脚鎧。

無謀、勝てる訳ないと普段なら考えてたかも知れないが、その時の僕は1人で奮闘する楓の姿に、希望を抱いていた。あんな風に戦えれば、あんな風に前を向けたら、僕は変われるんだろうか。

剣、槍、盾をそれぞれ装備した天人に勇猛果敢に突っ込む楓を見て、無意識にあれだけ嫌っていた神葬具を呼び出していた。

「結局その戦いが長引いてね。僕と楓は1層止まりだつたけど……それから、ちょこつとずつ楓と話すようになつたんだ」

宙に視線を浮かべながら思い出を語る灯火を見ていると、さつきまでの緊張していた顔とは違い、自然な微笑を浮かべている。

それで凸凹コンビの出来上がりか。割りと意外なのは、楓と灯火

の関係がまだ短期間だつたつて事くらいか。結構早くからの関係だと予想していたが外れた。ボシュート。

「「、「めんね。僕ばかり話してて」

謝つている割りに嬉しそうな顔をしてる灯火は、やはり癒し系だな。幾分上気して赤く染まつた頬が更に高ポイント。
いやしかし、友達の事を話す灯火を見ていると、俺もアメリカの仲間を思い出してしまつた。戦時真っ只中だし、無事だつたら何よりつてどこか。苦手だが近い内に手紙でも出すかな。

袖を捲つて腕時計を確認すると、もう午前3時。話し込んでしまつた分、明日の朝が辛そうだ。

「いや、楽しかつたし良いわ。んじゃ、良い時間だし、そろそろ帰つて」

『警告、警告。学内に出現陣を確認。警告、これは訓練ではない』

13『月灯りの中の散歩』【挿し絵】（後書き）

けつこう遅れてしまい申し訳ないです。

今回甘ったるい感じにしようかなと考え、この有様である。

灯火可愛いよ灯火。お気に入りのキャラナンバー2です。

1位は……まあ、今後文にも現れると思うので、探してもういたら

⋮

14『参戦、蒼の炎』

学園内に突如響き渡る警告音。アメリカの馬鹿でかいサイレン式じゃなくて少し安堵している。向こうのはここまで懇切丁寧な説明なしで、鼓膜破裂の音声が鳴るだけだし。

「白、これって…」

今までの顔が一転して青褪めた表情を浮かべている灯火。もしかしたら、灯火はこれが初の天人との戦闘なのかも知れない。本物、つまり死が混じる戦い。

灯火の言葉に頷くと、どうするか思案を繰り返す。今の警告から察するに、もう学内に出現陣が発生していて、既に天人が現れる可能性も否定出来ない。

しかし、ここに灯火を1人で置いて行く訳にもいかないし。少し身が重くなるが、仕方ないか。

「灯火、付いて来てくれ」

とにかく寮までの道を最短で突つ切ろう。送り届けたら直ぐに前線へ飛び込めば良い。流石に、3年生や教職員はこういう事態にも対応可能だろう。

素早く、AK-47のアサルトライフルを創り出し、灯火を前に先行させる。

「えっと……なんで僕が前なの？」

囮か生贊にされるとでも勘違いしたのか、灯火が不安げな声を出す。確かに説明無しで前に先行させたら勘違いされるわな。

「アメリカでの警護体勢だ。戦闘技術が上の奴の方が、前も後ろも警戒出来る。灯火は前だけ見てくれてりや良い」

言つた通りの陣形で、アメリカでは『pur suit』と正式名称付き。戦闘慣れし、後方の気配を察知可能な上の奴が後衛。下の奴は前だけを気にすれば良いので、戦闘にのみ専念出来るという訳だ。

陣形の説明に納得行つたのか、灯火が「が、頑張るよッ」と言いつつ神葬具を開幕する。

地味に初披露だつたな、灯火の神葬具。こう、初見だから少し心躍る。どんな武器が出て来るか期待してしまつのは男の性だ、許せ。注視されているのが恥ずかしかつたのか、「あ、あんまり見ないで……」と灯火が頬を赤くする。着替えている訳でも無いのに胸元を隠す辺りが、日本の大和撫子情緒溢れる。パジャマ姿でその体勢だと逆に胸が強調されてダメだと思うぞ。

淡い光が灯火の手に絡み付き、それが徐々に輪を描き、鮮明さを強くする。

眩い閃光が晴れた時にはもう、灯火の手に2本の黄金色の円月輪チャクラムが握られていた。2本それぞれに、白と黒のリボンが巻き付けられていて、可愛らしい印象を受ける。うん、灯火に似合つているな。舞佳と同じように大剣とかの重装備だつたらどうじょうかと。

神葬具を手に、先程よりも決意が籠つた顔をする灯火。

これなら前を任せても大丈夫そうか。危険になつたら俺が援護に割り込めば良い。灯火にとつて良い訓練になりそうだ。実地訓練なんてそういう出来る物じやないぜ。

「それじゃ、行くか！前任せたぞ、灯火！」

全力で駆け抜ける進路の先に、風景と不釣り合いな西洋鎧。紅い翼を生やしたそれは、大名列の如く、数十体と群れを成している。狂気の沙汰とはこの事。

突っ込む氣にはなれず、天人の群れの前で脚が竦んでしまう。剣や槍、人の命を奪える武器が、何本も目に映り、トラウマを呼び起こされそうになる。

鎧独特の耳障りな足運びの音が、僕達を前に停止した。

(やつぱり怖い……)

円月輪を握った手が震える。唇を痛いほど噛み締めて、目の前の敵を目視。

実は、これが本物の天人との初戦闘。僕等が入学してから、天人が学内に出現陣を開く事が無かつただけで、学園の門の外ではかなりの数の出現陣が展開されていたのだが。僕等1年生は出番なんてある筈もなく。

こんなに死を間近に感じたのは、あの出来事以来で、頭が真っ白になり掛ける。

「灯火、焦るなよ。大丈夫だ、俺が守つてやる」

頭を撫でられながら、普段よりも低く、鋭い声を発する白。その変化に戸惑つて、視線を横に向けると、僕の頭を撫でつつ微笑む白の姿。

そうだ。怖がる事じゃない。神葬具もある。まだ戦う意思も折れてない。

そして 隣にいる世界最強の神葬具使い。こんな状況でも余裕

を崩さない普段通りの彼を見ていて、勇気が湧いて来た。

「うん……ありがとう。戦つよ、僕も」

離れて行く手に名残惜しさが残るが、これ以上甘える訳にもいかない。円月輪を構えて息を整える。

最前列にいる天人が、翼を羽ばたかせ特攻を開始。それに釣られるかのように雪崩の如く、大量の天人がこちらに向かつて押し寄せた。

「灯火、その輪で敵の注意を逸らせるか?」

頷くよりも行動で示した方が早い。

黒リボンを付けた円月輪を勢いよく投擲し、それは天人の群れの上空擦れ擦れを滑空。天人の群れが意識を円月輪に向けた隙を突いて、銃声が何度も鳴り響く。

精密に作られた訓練用天人も円月輪に反応していた。本物も同様みたいだ。きっと、神葬具の近付き=敵の接近と勘違いしているんだろう。僕の中の推測でだけど

フリスビーのように戻つて来た円月輪を迎える為、手の平を突き出す。

「お帰り」

刃がない握りの部分が手の平に納まる。神葬具が所有者を傷付けない様に配慮している為の動作なのだが、それのお陰で無機物なのに可愛く見えてしまう不思議。

「つち、数が多いな。アンチマテリアル対物ライフルは創るのに時間掛かるし……どうするか」

アサルトライフルで天人を牽制し、粘る白。銃は銃でも、威力が高い銃とかは呼び出すのに時間が掛かる、といつことなのだろうか。今の銃の威力では、確かに決定打に欠ける。

なら、仲間の僕が何とか時間を稼げたら 、

「はああああああああッ！！」

突然天人の群れの後方で、轟音と共に1体の天人が宙を高く舞う。掛け声からも、攻撃の仕方からも、僕の中では1人しか思い当たらない。

「やつたな灯火。前衛が増えたぜ」

派手な戦い方に苦笑いを浮かべる。陽動なら、あそこまで適した奴はそういうない。

どうやら他の生徒も戦闘を開始したようで、其処彼処で爆発や斬撃音が響き始める。夜中の3時と言えど、学園生は皆元気みたいだ。戦っているのはほぼ3年生だろうが。

そう言つてる間に、金髪の少女が持ち前の身軽さで天人の群れから駆け抜けて来る。やっぱりと言うか、想像通りというか、脚鎧の神葬具を装着した楓の姿。

陸上選手張りの綺麗な型で突っ走つて来た楓は、俺達の前で土埃を巻き上げながら急停止。

「レッヂ！灯火を知らない！？ 起きたら隣にいなく つているじゃない……」

後方に天人の群れがいるとは思えない会話だな。あからさまにがつくりした態度をするんじゃない。

所々破けた制服を着込み、欠伸をする金髪。こいつ何時も何所かに傷作ってないか。嫁入り前なんだからそういう事には気を配つた方が良い。

「楓……」

「し、しょうがないでしょ！今3時よ3時！アンタ等も時間を考えて来なさい！」

引き攣った顔の灯火に、焦つて反論する楓。お前も規則正しく生活するタイプなのか。結構意外だ。きっと灯火に矯正させられたに違いない。それと天人に文句を言つても無駄だぜ、きっと。

楓の背後で大剣を振り被つた天人の頭を、アサルトライフルの弾丸で撃ち抜く。

「油断大敵つてな」

「わ、わかってるわよ……ありがと」

金髪が素直に御札を言つなんて明日は雨か。言つたら神葬具で追い回されそうなので発言は控えよう。

そういう舞佳はどこにいるんだろう。こういう戦闘なら喜んで参加してそうな感じだが。また木にでもぶら下がつてたりするか。もう助けないぞ。

「とにかく、こいつ等を倒して先に進むか

丁度睡眠欲が高ぶり始めたので、さっさと終わらせて安眠したい。その為にはこの事態を手早く收拾しなくては。

前衛に俺と楓が張れるから、安心して灯火に後衛を任せられるの

は大きい。後は楓が無茶をしないことを願うばかり。まあ、助けに入れるよう見張るようにはしておこう。

アサルトライフルの銃口を天人の群れに向ける。学園の校舎が見える辺り、少しづつ押されているようだし、本気を出さずには要られないな。

「団体さん、ご案内だ」

「舞佳！そっち行つたよ！」

クラスメイトの忠告に、大剣を難いで返答。背後から盾を構え突進して来た天人を、その武器ごと粉碎する。

体力をガシガシ削つて行く神葬具に躍起になりつつも、天人の死体を積み重ねて行く。

何しろ今回は天人の数が多い。1年生の頃に遭つた学内強襲の約2倍は下らない。元々長期戦は苦手な部類の大剣で、この戦闘はきつい物がある。

闘技場に天人の戦力を追い込めたまでは良かつたが、その後の乱戦は見るに耐えない泥沼戦。

後どれくらい自分が持つのか。目で見えないタイムリミットに怯える。

「中位！中位がいるわ！氣をつけて！」

弓の神葬具を構えた上級生の発言に、前線が混乱を増す。

中位か、不味いな。学年が入り混じっている混戦の中で中位に入されるのは非常事態だ。1年が恐怖で退き始めたら他の学年にも影響し兼ねない。

天人の群れの奥、宙に浮かぶ光を放つ円陣。そこからまたも紅い翼を持つ騎士が出現。

「壊したいのは山々だけど、そこまで行くのも一苦労か……」

授業通りなら、出現陣を最優先で破壊するのだが、相手もそれを簡単には許してくれない。実行する為には先ず、危険な中位の入り混じった天人の防衛線を突破しなくては。

（アテンド解放したいけど……やつたら間違いなく力尽きるし）

こんな時に双剣が言うことを聞いたらと思わずにはいられない。近付いて来た大剣持の天人と鎧迫り合いに持ち込まれ、冷や汗が流れ出す。限界が直ぐそこに迫っている。

押し返そうと力を込めた時、いきなり相手の天人の力押しが停止。驚いて瞳を開くと、目の前の天人は鎧ごと”蒼い炎”に纏わりつかれ燃え盛っていた。

紅い翼が包み込まれるように蒼で染まり、徐々に消失していく。

「下位なんてこんなものですねわね」

大剣で体を支えながら振り返ると、そこには手に炎で形作られたような形状の刀を持ち、瞳と髪から蒼い炎を発している女の姿。その炎は、身近で燃えていても熱くはなく、むしろ凍えるほど冷たい。他の生徒と交戦していた天人の多くが、その少女の方へ視線を向ける。

「まさか来て直ぐに天人と戦うことになるなんて……折角、あわ良くば白様と早く会おうとホテルをキャンセルしてきましたのに」

聞き覚えのある名前が少女の口から飛び出しだが、目の前の異様な光景のせいで頭が働かない。

少女の手に握られた炎の刀が、迫った天人の体を両断。もはや、切れ味なんて次元じゃない。死体が残る筈の天人は、蒼の炎に絡み付かれ、焼失。もしかして、あれも神葬具なんだろうか。

少女が手を宙へ向け高く挙げると、炎が竜巻を引き起こす。その見た目と反して、周囲の気温は南極を思わせる寒さへと変貌。天人を攻撃してるから味方だとは思うんだが、寒さでわたし達を殺す気か。

「結果オーライと取りましょう。白様に見付けて頂けるよう、盛大に暴れますわ」

14 「参戦、蒼の炎」（後書き）

手直し版です。

最後の部分だけ盛大に書き直しました。
でもまだちょっと修正するかも…楽しめていただけたら幸いです。

15『蒼炎の狼と猫と美少女』

俺が両手に構えたSteyr TMPマシンピストルで敵を牽制しつつ、楓が闇討ちを仕掛ける。

徐々に数は減っているが、それでも出現陣を壊さない事には天人の増援を抑えられない。時間を掛けなければ高火力の銃器が出せない点が痛いな。直ぐに創り出せるのは、拳銃に創り慣れた短機関銃程度。対物ライフルなんかの高火力銃器を創ろうとしたら確実に5分は掛かる。

アメリカの戦線だと味方が熟練された神葬具使い達だつたから安心して任せられたが、今はそうも言つてられない。戦闘慣れしていない灯火を守りつつ、無茶な戦い方をする楓の援護を担当。

「はは……銃を創り出せる暇がないな」

マシンピストルなんて脅しも同然。神葬具の銃器とはいえ、そう易々と天人の西洋鎧は打ち破れない。

おまけに中位の天人も混じつてると来た。確実に死人が出るレベルだな、これは。天人との戦争規模の戦いよりは全然マシだが、中位がいるといないとでは差が大きい。

10体の中位を盾にして核一発を防ぎ切れる。これだけ言えば大抵の人間は青褪めるだろ。

鎧の硬さも、武器の威力も、下位とは次元が違う。これの上に上位なんものが存在するんだから呆れ返らざる終えない。

突き出された槍を危なげ無く躱すと、お返しとばかりに純白のオーラを纏った拳を天人の兜へ叩き込む。素手でやつたら確実に拳の骨が全部逝くな。

「これで一体……先は長い」

「白、また新しい天人が出て来てるよー。」

もはや息を吐く暇さえないので。円月輪を投擲しながらの灯火の言葉通りに、数体の天人の新手が出現陣から現れ、真紅の翼を羽ばたかせて優雅に地面へ着地。もう本日何度見たかわからない西洋甲冑へ銃口を合わせる。

「アテンド解放！」

引き金を引こうとした瞬間に、射線上へ自前の長い金髪を靡かせながら楓が登場。危うく誤射する所だった。止める、その突撃的な戦い型。敵と間違えて頭を撃ち抜きかねん。

俺の斜線上に立つ楓の脚に巻き付く黄金の帯。あれって、俺との戦闘時に見せた楓の解放だよな。

まだまだ天人の増援が予想出来るのに、何で解放するんだ、あのバカ。他の奴が釣られて解放し出したらどうしてくれる。

楓は天人の斧の大振りを屈んで避けると、屈伸の要領で相手の体を蹴り上げる。かなりの飛距離が出てた。脚回りの強化具合は賞賛を挙げても良い。突撃癖を直せば及第点。

他の連中も学生としてはしつかり動けてるし、紛れてる中位に遭遇しない限りは大事無い筈。

今度は中位発見作業か。またもや仕事が増えた。

「レッヂ！ あれ中位じゃない！？」

攻撃を受けて吹き飛ばされたのか、地面を削りつつ勢いを殺し、俺の隣へ戻った楓が1体の天人を指し示す。視界に捉えると、大柄の盾を構え、もう一方に鋭い穂先の突撃槍ラングスを装備した天人。どう考えても装備からして普通の天人とは違う。翼も一回り大きく感じる。

意外とあつさり見付かるものだ。アメリカでは乱戦に次ぐ乱戦で、相手の外見なんて注視する暇ないし。攻撃して異様に硬い相手がいたら、そいつが中位という大雑把な決定方法だつた。そりや味方の首が何個も飛ぶわな。中位探知機とかあれば別だが、そんな便利な物があれば困りはしない。

中位は下位を指揮している為か、先程から棒立ち体勢のまま。攻撃されてからでも応戦可能という余裕の表れだろうか。

「楓、あれに近付くなよ！下位を頼む！」

流石に中位に突っ込む気にはなれない様で、楓は素直に頷くと、某特撮ライダー張りの勢いで身近の下位天人に蹴りかかる。猛獸か己は。

マシンピストルを放り投げると、AK-47のアサルトライフルを創造。グリップ越しに確かな重量を感じると、余裕かましている中位へ引き金を 、

『あの天人、旦那しゃまだと直ぐに倒せるレベルでしゅね』

『こらケルビン。旦那様の邪魔は止めるでござる。さあ、旦那様、あの天人めにどうぞ一発』

驚きで思わず両手が緩み、アサルトライフルが手から離れて、地面にぶつかり霧散。ああ、勿体無い。結構精神力使うのに、これ。現実逃避していても仕方がないので、うんざりしつつ懐かしい声を頭に響かせる連中に視線を向ける。

こんな戦場に不釣り合いな2体のミニマム小動物。

先ず餅みたいな体つきの暢気そうな猫、ケルビン。尻尾の先で蒼い炎が小さく灯っていて、これだけでも普通の猫と違うと分かる。次に、理知的な雰囲気の、一見ハスキー犬に見える子狼、ダイゴ口ウ。毛皮が青い部分以外特筆すべき点が無いのが泣ける。名付け

の親の俺が言うのもなんだが、その顔でダイゴロウはなくない？飼い主とお前が気に入ってるならいいんだけども。

「お前等……アメリカにいたんじゃねえの？」

『お嬢様に言つて欲しいでござる。拙者は止めたでござるよ』

止めたつてことはあれか。やつぱりこいつ等の飼い主もここにいるのか。有り得ねえ……来る訳ないつて笑つてたの今日だぞ。絶贊天人からの強襲中で時間経過の感覚が少々狂つてるな。

急いでアサルトライフルを再構成しつつ、スコープを覗き込む。中位を視界に捉えながら、

「とにかく、お前等は後ろに下がつてろ！あの中位をやつてから話聞いてや！」

突然、スコープ越しに中位の天人の体が燃える。ケルビンの尾の先に灯つていてる火、ダイゴロウの毛皮と同色の蒼。それが、天人の翼に燃え移り、余裕の雰囲気を出していた天人がもがき苦しむ。武器を振り乱し、狼狽の中で、徐々に体が焼失していく。

普通の神葬具使いならば、その光景に度肝を抜かれていたのだろうが、俺はアメリカで何度も見た光景。慣れの恐ろしさが身に染みて分かる。

「ケルビン、ダイゴロウ。白様は見付かりまして？」

止めの一撃と言わんばかりの斬撃が中位の背後から見舞われ、天人の体が真つ二つに分断。ぐろい絵面になる筈のそれも、蒼の炎で焼き消えた。

強固な天人の鎧を容易く両断した人物は、仇討ちのように襲い掛かつて来た下位をも、視界に收める事もなく叩き切る。

瞳と髪から噴き出す大量の蒼色の炎。ツーサイドアップで纏められ、楓の金髪よりも大分白み掛かつたそれ……プラチナブロンドと呼ばれる髪も、蒼で大半が染め上がっている。手に持った実体を持たない炎の刀も、威圧感をか持ち出すには十分。あれが中位の天人だと言つたら信じる奴もいるだろう。

『姫しゃま～。こちらでしゅよ～』

出来れば今出せる全速力でこの場から退却したかったが、戦闘中でそれを投げ出す訳にもいかない。諦めて受け入れよう。アイツが日本に、俺を追つて来たという事実を。そして恨もう。深夜にこの事実を有り得ないと笑っていた自分を。

主人を小さい手を振りながら呼ぶケルビン。

それに気付き、こちらに視線を向けた長身の美少女は、冷徹な行いに反して煌びやかな微笑を浮かべる。

「白様……やつとお会い出来ましたわ」

いや、今生の別れからの再会みたいな顔しているが、別れて一週間経つてないからな俺達。

そして感動の再会を演出したいなら片手間で敵を片付けるのを止めろ。ああ、天人なのに、殺すべき相手なのに。あんな殺され方だと同情の念が浮かぶ。

”エリーゼ＝ディ＝アルフォート”。世界神葬具使いランカー2位の美少女。

『絶対零度の蒼炎』という神葬具の扱い手で、神葬具の特徴は名の通り、凍てつく蒼い炎。

イタリア指折りの貴族だつたアルフォート家の令嬢。実家は既に没落しているが、本人は気にしていないし、どちらかと言えば肩書きが失せて清々したと胸張つて主張している辺りは好感が持てる。しかし、完璧な人間なんていない物だ。人間誰しも、どこかに欠陥を抱えている。

身長170はあるであろうモデル体型のエリーゼに呆れながら、

「お前、アメリカどうしたよ…」

新聞読んでもる時も言つてたが、アメリカは他の国からも睨まれていて大変だ。そんな時に世界2位の脅し看板がいなくなつたら痛手じや済まない。既に1位もいなくなつてるけど。だからこそ今のアメリカが2位を手元から離したりするだろうか。

「今まで守つた恩は有給で返して頂きませんと。それに、一番は白様に会えない日々が堪え切れず……まるで放置プレイのようで気持ちいい　えほん」

アメリカにいた頃もそつだが、こいつのストーカー癖とドM癖、段々酷くなつてないか。しかも自覚なしの最悪のパターン。背中合わせで戦つていると悪寒が走る。頼りになるのに頼りたくないってどうなんだ、このジレンマ。

『旦那じゃま、後ろでしゅよ
「何で日本に来た!?』

エリーゼの頭の上に乗つたケルビンの言葉通りに、突つ込んで来た天人に上段蹴りを当て、アサルトライフルで追撃。よろけた敵をエリーゼが紙を切るように捌く。確實に対応の速度は上がつてゐるな。中衛担当の銃器だと頼もしい前衛がいてくれれば心強い。

「白様との再会の為ですわ。それ以外に理由なんてありませんもの」

アメリカはその理由だけで捨てられたか。哀れ過ぎる。まだ神葬具ランカー10位内が残っていることが救いか。

「泊まる所とか」

「クレハという方に全て話は通っていますわ。白様との学園生活が楽しめると思うだけで胸が躍ります…」

義母黒羽よ、俺は一言も聞いてないぞ。せめてこいつが来るなら一言言つてくれ。防衛網引くから。

でもエリーゼが学園に通つても学ぶことなんて無いよな。俺が言うのも何だが、神葬具の基礎を学ぶ所だら、ここには。何度も戦争並みの戦い経験してる奴には没有必要に違いない。

「白様、あの剣は使いませんの?」

俺の銃器一筋の戦闘方針に疑問を持ったのか、エリーゼが敵を切り伏せながら暢気に訊いて来る。

「あー……奥の手なんだ、一応」

俺は天人に銃弾をお見舞いして、少し言葉に詰まった。

出来ればあれは普通の場所で披露したくないんだよな。危機的状況ならまだしも、銃とか使えなくなるし。エリーゼと戦った時は本当にしようがなかつたんだよ。

「ならば、わたくしが白様の剣になりますわ。しっかりと扱ってくれ下さいましね?」

俺の目の前の敵を一刀両断し、蒼い炎が灯つた瞳で上目遣いを適用するエリーゼ。こいつの中身を知らなかつたら少しぐら付いていたかも知れん。だが、俺はこいつの本性のお陰で豪い目に会つて來たのだ。

何事も経験を通過した今なら胸を張つて言える。
全力でお断りします。

15 『蒼炎の狼と猫と美少女』（後書き）

編集するかな…するな、きっと。
楽しんで頂けたら幸いです…ってか新キャラ動かすの難しい…。

16『義母への禁句』【挿し絵】

「1年から5人の死者」

学園長室、私室と化した部屋で無意識に万年筆を強く握り締めた。他にも2年、3年、それに3人以上の死者が発見されている。まだ出現陣完全破壊まで2時間経っていないし、瓦礫に埋もれる者も合わせれば倍に増えると安易に予想出来る。

天人の攻撃で建物、特に寮近辺は手酷くやられて、睡眠時を襲われた生徒も少なくない。

だが、去年に同じ出来事が引き起こった際はこの5倍近い被害が出たのだから、最小限に食い止められたと安堵したくなる。でも死んだ生徒は、どう抗つても帰つて来ない。

「死んだ生徒の大半が孤児……」

親御さんから「人殺し」と言われる回数を少なくしてくれた天人の配慮だろうか。自分で言つておいて真に笑えない。

神葬具使いは『対天人育成用教育学科』に入学を同意した時点で、生死与奪権を国に渡すことになる。学科を卒業するまでは無いが、必修学科を収めた後、国へ配属され任務へ駆り出される。国からの命令は絶対。その代わり、生きている限り人並み以上の生活の保障。刷り込み用の天人の死骸は有り余っているのに、神葬具使いは一向に増えない。国に命を差し出すくらいなら普通に働くという人間が大半を占めているからだ。

現在の神葬具使いの殆どが、天人の襲撃で家庭を壊された人間だと言つても過言ではない。きっと死んだ生徒は、憎悪に突き動かされて不十分の訓練の中、天人に飛び込んで行つたんだろう。

「……………カレン、どうするのが正しかったのかな…」

思わず、記憶の中の親友へ問い合わせてしまった。

過度な訓練では生徒が伸びてしまう。だからと言って2年から本格的に始めますでは遅い。今の事態がそれを物語っている。

天人の出現陣の発生場所に目安はつかない。警戒態勢は何時までも続く物じゃない。平穀が続けばそれだけ警戒心も薄れ、突然舞い込む天人の襲撃に対応が間に合わない。

欠伸を噛み殺しつつポケットから取り出した懐中時計の短針が、既に5時を過ぎている。これは丸々徹夜覚悟で取り掛かる必要がある。

低い身長を強調する様で嫌だから滅多にやらないのだが、今日だけは疲れたので伸びを取り入れる。

「んー、さてと。シャワーでも浴びてから、また作業しー」

休憩へのスイッチ入れ替えを行う言葉が、扉の開く音で遮られる。ここで補足。普通の学生、教師はこの部屋に立ち入りを禁止している。ノック無しなんて問題外。それを遺つて退ける無礼者は1人しか心当たりがない。

とりあえず、その人物が話題を切り出す前に、常套句になりつつある注意を掛ける。

「白、ノックはマナー」

>↓25856—213<

「白様、どこへ行かれますの?」

頭に眠りこけている白餅のよつな猫のケルビンを乗せ、シベリアンハスキーの子犬もどきのダイゴロウを引き連れたエリーゼが、俺の三歩後ろで疑問を口にする。あの後天人を駆逐し続けて出現陣を2個破壊し、まだこの余裕具合。銃器を使つては捨て作り変えてを繰り返していた俺は、直ぐにでもベッドに突つ伏したい気分。

だが、まだ仕事が残つているんだ。ある種、最優先事項かも知れん。その目的の為に疲れた体を引き摺つて学内の階段を登つている訳だが。いつもより長く感じるのは疲労のせいか。

眞面目に返答するのも面倒なんで「着いてくじやわかる」と一言返しておぐ。

「わたくし、白様と一緒に何所にでも床にでも参りますわ」

マジで朝起きたらベッドに潜んでそうで怖いな。軽くホラーを超越して。そんなことされたら本気で自室の窓突き破つて逃げるぞ。そういうのが許されるのは漫画とかの仮想の中だけだ。

『お嬢様、余りそういう事を嫁入り前の淑女が仰るのは如何かと思ひでござり』

「つねにこですわよ、ダイゴロウ」

『しつしつしつしつ……』

ただ注意しようとしただけで跳ね除けられるとは不憫な。階段で泣き崩れているダイゴロウを放置し、そのまま用事の相手がいる校舎の5階へ。

目的の階に来ても廊下の最深部に部屋があるつてどんだけ不便なんだ。1階の玄関正面とかに移動させよつぜ、この部屋。

ノック無しでドアノブを回すと、重々しい扉を開ける。普通ならこんな時間に学園長室なんて開いていないだろうが、今は天人襲撃

から2時間も経っていない。学園長の黒羽だったらこの部屋に缶詰になつてゐる、という予想が大当たり。

事務作業を片付けていて疲れが溜まつていたのか、伸びをしていた黒羽に遭遇。

やつぱり小さいな。我ながら義母とは思えない。アメリカで仲間に写真を見せたら、妹かと質問されて思わず肯定してしまつたほど幼児体系な義母である。

「白、ノックはマナー」

そういうえば日本発つ前から言われてたな、この注意。直す努力をしないと何時か大目玉喰らいそうだ。

「黒羽……お前なんでこいつのこと黙つてた

黒羽の注意を無視してエリーゼを指し示す。

挨拶から始まらない交渉術。アメリカで会得した交渉技術である。拳から始まる英会話なんて物もあるが、女性にはNGだな。主に喧嘩つ早い男への対処用。

「あら、もう蒼炎の転入生と仲良くなるなんて、プレイボーイな息子」

黒タイツに包まれた細く艶かしい脚を組み直して、含み笑いをする黒羽に文句を言つ気が失せる。絶対に俺とエリーゼの関係知つた上での行為だろ、含み笑いも転入工作も。悪魔如きの所業や、この場合天人の如き所業。

振り向くと、ケルビンがずり落ちそつなのを整え、黒羽を訝しげに観るエリーゼ。なんか嫌な予感がする。今直ぐこの部屋から出で行けと警告音が鳴つている。

「白様、このおちびさんは何方ですか？」

明らかに学園長室内の温度が5度は冷めた。無論、クーラーもエリーゼの神葬具も無しで。

エリーゼ、今お前凄く空氣読めてない。（ん？何か不味い事言つたかしら？）みたいな表情してると、凄く空氣読めてない。誰かさんの逆鱗に蹴りかましてる事くらい気付けバカ。一見小学生みたいな外見してるけど、これでも学園長なんだよ。身長も地味に気にしてるんだよ。

「ふ、ふふふ……面白い子ね」

お義母様。その握り締めた自慢の万年筆は何に使用するんだ。慌てて2人の間に割り込むと雰囲気転換。話題を持ち直す。これ以上やらせると学園長室で惨劇が起こりかねん。

「つてかこいつが学園に編入つて本気か？確実にアメリカが文句言うだろ」

今のアメリカは危機的状況だし、蒼炎の使い手のエリーゼはかなりの脅し看板。手放す筈ないだろうし、本人が希望したからと言つて簡単に異国へ渡れない。

しかし黒羽が机のある1枚の書類を掴み、俺の前へ提示。

『エリーゼ＝ディ＝アルフォートの対天人育成用教育学科女子学園、明星学園への編入を許可する』

「痛い染みるうう……ツ！」

舞佳先輩の体中に出来た切り傷や打ち身。校舎内の医務室で、慣れた手付きで処置を施していると、上半身裸でうつ伏せに寝ている先輩が悲鳴とも取れる声を出した。

「だ、大丈夫ですか！？」

当てていた消毒液が染み込んでいるガーゼを離す。

これでも最小限の痛みで傷が残らないよう心掛けているのだが、ここまで傷が多いと流石に根気がいる。これくらいでしか役に立たないから、確かに充実するんだけど。

「大丈夫…痛くない痛くない…」

ベッドにある枕へ顔を埋めながら、痛くないを繰り返す先輩。その眩きは僕への返答というより暗示みたいに聞こえます。

「むしろ手早くやった方が痛みが少なくて良いんじゃない？」

医務室の壁に寄り掛かり、楓が言う。楓の言つことは尤もだけど、丁寧にやらないと切り傷とかは痕が残っちゃうんだよね。先輩の自身の為にも、ここは我慢して頂きたい。女の子が肌に傷を作っちゃいけないし、こういう学園だからこそ、次の戦闘で傷が開きましたじゃ洒落にならない。

ちなみに楓も頬に絆創膏を付けていたり、腕に包帯を巻いていたりと、結構怪我を負っている。

「痕残らないといいんだけど……」

楓が最近、女の子らしく肌を気遣ってくれるようになつて嬉しい。白が来てくれたお陰かな。今まで怪我しても舐めれば治るつて言って聞かなかつたし。楓を眞面目に治療出来たのは、今回が初めてだつた。

最後に舞佳先輩の切り傷へ軟膏を塗り、「ひぐうー？」治療完了。

「あ、ありがとよ灯火……中々に痛かつたぜ」

良薬口に苦しという言葉は身に染みて分かるよね。

僕も楓も、先輩もそうだけど、怪我とは違つて内部にも疲れが及んでいる。神葬具をここまで行使したこと自体、1年生は初めてだ。白のような例外もいるけど、素人が神葬具を扱つた次の日は、漏れなく疲労が押し寄せる。

楓は痩せ我慢をして冷や汗を流しているが、僕はそこまでじやない。きっと、楓のように接近戦の戦い方じやないからだと思うけど。「それにしても、変な奴もいたもんだ。蒼い炎で敵をぼーつて燃やして」

「あー、それあたしも見たわよ。なんかレッヂの近くで凄い火の手上がつてたし。後、めちゃくちゃ寒かつたわ……」

僕は遠目でしか確認出来なかつたけど、舞佳先輩から聞いた話だと、蒼い炎の使い手は現れて出現陣を壊し、直ぐに別の場所に向かつたらしい。それで、次に楓の証言。中位を意図も簡単に燃やした蒼炎。

どう考へても世界最強の白の知り合いだよね。そうとしか考えられないよ……ごめんね、白。

心の中で謝罪していると、午後の授業開始の鐘の音。午前の授業は天人の襲撃で無くなつたけど、午後はちゃんとあるんだよね。その間に寮の修理等を進めるみたいで、破損が酷い部屋の生徒は他の

寮生の部屋へ一時的な移転。対策が早い点がこの学園らしい。

「授業終わったら寮に帰つて直ぐ寝てやる……」

舞佳先輩は、何の宣言かわからない言葉を呴きながら力無く医務室を去つて行く。

「灯火、あたし達も行くわよ。確か5時限目つて数学だつたし」

数学は厳しい教師が担当なので、楓が急ぎ立てる。楓つて確かに数学苦手だったし、授業に遅れると絶対に指されるから回避したいんだろうなあ。

「うん、今行くよ」

何故だか嫌な予感がするんだけど、天人の出現陣は全部破壊された筈だし、気のせいだよね。

16『義母への禁句』【挿し絵】（後書き）

色々な意味で死ぬかと思つほど書いた…

4000字がデフォになるよう頑張つてます…死ぬかもしれん
今回は最初から絵師、あおクマさんの挿絵入りです

エリーゼ…可愛くなつて…嬉しい限り

ケルビンの姿とかハツキリしてない人もいるだろうし、すつぐ

助かつた…

ありがとうございますあおクマさん、これからもよろしくお願ひします

「これ、白には知らせておく。出来れば、神葬具使いとしての考えを聞かせて欲しい」

そう言われ黒羽から渡された一枚の用紙。

対天人育成用教育学科明星学園死亡届。受け取った瞬間に、ああこれかと冷静に感じた俺は、人として何所か麻痺し始めてるんだろう。

用紙の名の通り、国へ提出する学園生の死亡届。アメリカの軍隊で、同じように名前が連なつた紙を何度も拝見していたこともあり、動搖も湧かない。ただ、面識の無い人物の名前が無機質に並んでいる。

全員で20人以上は逝ってるか。無理も無い。夜間に突然の襲撃、しかも中位のおまけつき。死者が出てなかつたら奇跡としか言いようが無い。実際、エリー・ゼがいなかつたら被害は倍増しだつたろうし。

「死亡届ですか？」

隣を並んで歩いていたエリー・ゼが、興味無さ気に言う。

俺もこいつも、人の死を知り過ぎた。普通なら悔やんで復讐なんて物を誓つたりするんだろうが、仲間が目の前で何度も死ぬと、そんな感覚も薄れる。アメリカみたいに高頻度で出現陣が現れる地域なんて特にだ。神葬具使いの死体が山になる勢い。

「ここ」の生徒は警戒心に欠けているようですし、20だったら軽い方ですわね」

「人の命を軽いとか言うな」

ケルビンがいない箇所の頭を軽く小突くと、エリーゼが口を閉じる。流石に言い過ぎだと自覚したんだろう。良い傾向だ。俺と出会った当時のエリーゼは、極道も尻尾巻いて逃げ出すような問題児で、味方まで凍らせかねない性格だったし。これでも随分と丸くなつた。

『ですが、お嬢様の言う事も一理あるでござるよ。陣形も直ぐ作れず、個人個人で戦う生徒が目立つていたござる』

灯火とやつてみせた『pur suit』という陣形。その他にもあるが、天人との戦闘時は通常、陣形を作り堅実に戦うのが基本。味方同士で守り合い、可能な限り陣形を崩さず戦闘を続けるのが最優先なのだが、その基礎を教わってない点からして、こここの生徒は危機感が薄い。

楓を筆頭に、仇を目前にして頭に血が上り突進する奴。きっと死亡届の大半がこの性質だろう。

まだ実習やダンジョン授業を受けていないから学園の訓練方針はわからないが、アメリカとは随分違いを感じる。向こうは血反吐を吐くまでって言葉が適合するからな。他の国に比べて天人の襲撃頻度が低いのも相まって、日本 자체の危機感が引き下がっているんだろう。

死亡届の紙を仕舞い込むと、違和感無く後ろを付いて来ているエリーゼの肩を掴む。

「ああ白様……こんな廊下でなんて」

端整な顔立ちの頬を紅く染めるエリーゼ。それに微笑みで返すと、人差し指で天井を示す。

「お前2年だろ。教室は一個上の階だ」

俺は記憶喪失だから実年齢は不明だが、エリーゼは列記とした1

7歳。舞佳と同じ学年だ。俺自身、こいつよりも年下というのが信じられないが、書類上の事実なんだから仕方ない。これで記憶戻つて20歳辺りだったら真剣に人生を考える所だ。

予想通りに俺の言うことを聞かず、エリーゼは首を横に振る。

「白様、わたくしと白様の絆は一生。故に学年なんて物では引き離せないのですわ」

年齢超えるレベルの絆つて悪魔の楔並みだな。

その絆のお陰で、アメリカの死の防衛線と呼ばれる場所にまでこのつが付いて来た時は本気で頭を抱えたぞ。結局、2人で大暴れして無事に帰還したが、アメリカの重要戦力のエリーゼが戦死とか洒落にならなくて肝を冷やした。傷だけでも大統領から苦情が殺到するレベルだろう。

『お嬢様、白様の仰る通り、ここは引き下がることも大切でござる』
「うるさいですわよ、わんこ」

飼い主に注意しようとした子狼が、犬呼ばわりされて主の腕の中で、『しくしくしく…』静かに涙を流す。涙くなつたと言つより打たれ弱くなつたの方が適切か。頑張れ、ハスキーもどき。

まあ、この2体……蒼い炎が灯つている点から推測可能だとは思うが、ケルビン、ダイゴロウ共にエリー・ゼの神葬具から創り出された生き物で、主の命令には絶対服従。だが正直、両方育て方が極端だ。ケルビンは寝てばかりの舌足らず能天氣。ダイゴロウは主人の間違いにも注意出来る生真面目な侍口調。

こう言つては何だが、普通の従者はいないのか。

従者といえば忠実なゴーレムとかが真っ先に候補に挙がる俺は、そう思う訳だ。

爆睡中のケルビンを落としかけながら、エリーゼは”蒼炎の神葬具”の影響で青く染まった両目で俺を射抜かんばかりに見詰めている。外見にコロツと騙されたら一瞬で人生終了だ。

「何がいけませんの？ わたくし、白様の為なら何でも直しますわ」「強いて言つなら年齢だな、神に言え」

こいつは俺と離れるだけなのに表現が過剰。アメリカにいた頃も結構面倒な性格だったが輪にかけて悪化の一歩を辿っている。何時か他の女子と歩いているだけで包丁持ち出しそうで怖い。いや、こいつの場合神葬具で斬り掛かるか。余計恐ろしい。

「とにかく、お前はさつさと上の階に」「おーい、白あ…」

もう一つその事引っ張つてでも連行の言葉が浮かびかけた時、助け舟の呼び声。上の階から階段で下りて来た舞佳が普段と違い、大分疲れた表情で手を振っている。声にも潤いと張りがない。

きっと戦闘時に神葬具を酷使した反動を受けたんだろう。精神的にも肉体的にも、神葬具を使用した後は急激な疲労が襲う。エリー ゼも俺も慣れた疲れだし、これくらいなら何度も経験済み。舞佳の疲れ具合が酷く懐かしい。

「あら、の方は……大剣の方ですわね」

お前まだ人を神葬具で判断する癖治つてないのな。覚えるのが面倒とか言っていたが、それは人としてどうかと思うぞ。軍に挨拶に訪れた大統領を見て、俺に「あの偉そうな方は誰ですか?」と言つた辺り筋金入りだ。せめて大統領の名前くらい覚える。

『……しくしくしく』ってか、まだ泣いてたのかダイゴロウ。そんな滝級の涙をずっと流してると体中の水分全部飛ぶぞ。そこまで大呼ぱりが嫌なら當時あっちの形態になつてりや良いのに。エリーゼが疲れるからダメなんだっけ。

舞佳は壁伝いにやつとこを近づいて来ると、息を切らせつつ俺達へ視線を向ける。

「白、エリーゼって奴、知らないか……？」

俺の隣にいる目立つ容姿のがそのご本人。しかし、舞佳が何故エリーゼを探しているか疑問。エリーゼが舞佳の神葬具を知っている事からして、面識はあるのだろうか。

「担任の奴がわたしに、そいつの探索を押し付けやがったんだ……」

小さな体躯で木に吊り上げられたりと不便な人生。今度喫茶店とかで飲み物を奢つてやろう、500円まで。

つてかやっぱりエリーゼは2年部の転入生なんだな。凄く安心した。こいつが1年部で、増して同じクラスなんて事になつたら常時楓と争いかねん。同じ金髪同士、仲良くして欲しい。いや、エリーゼの白みがかつた金髪はプラチナブロンドだったか。本人力説していたし。

「教室にも来ねえし、職員室にもいねえし、何所にいやがる　つて、昨日の炎女！？」

やはり面識はあるんだな。お互いに神葬具は記憶に残つてゐるらしい。2人共特徴的な神葬具持ちだから当然といえば当然か。蒼炎と、他人の双剣がくつ付いた大剣なんて全世界探してもこいつ等くらいだ。俺の神葬具も大概ではあるが。

「白の知り合いなのか？」

エリーゼと俺を見比べながらの言葉に、違うと否定しようとするが、直ぐにエリーゼがダイゴロウを抱いている方とは反対の腕を俺の腕へ絡める。こいつ行動まで突発的になりつつあるのか。

「エリーゼ＝ディ＝アルフォート。白様のガールフレンド兼妻候補ですわ」

やつぱりこいつ、すこぶる空氣読めない。敢えて読んでないのか、ワザとやってるなら、その度胸は賞賛に値する。絶対に褒めたくないけどな。自己紹介が事故紹介になってるし。自分の事全く説明出来ないし。

それと気付けエリーゼ。胸張つて得意氣にしているお前を哀れみの目で見ている舞佳の視線に。何言つてんのこいつ視線を。直に受けたら俺でも悩みそうなドン引きを、華麗に流すエリーゼの肝つ玉は直径幾つ何だろうか。

(やつぱり、瘦せ我慢だつたんだね)

授業中、隣の席で机に顔をべつたりくつ付け熟睡している楓。確かに、天人の襲撃の後なのもあって学園全体が意氣消沈の雰囲気。授業所ではない。

僕達が教室に入つて来た時には、泣いている生徒もいた。何でも、部活の先輩が1人亡くなつたみたいだ。僕と楓は友達自体の付き合いが薄いし、まだ学園内での知り合いの死者はない。でも、身近な人物が消える恐怖は、この学園の殆どの生徒が体験済みだと思う。

じゃなければ、危険な戦地へ自分から志願する気持ちは生まれない。

(僕も……あの出来事がなければ、普通に暮らせたのかな)

天人学の教材。その中のページにある天人の弱点や武装、引き起こされた事件の数々。

その事件の項目にある『流れ星孤児院襲撃事件』。これが、この事件が無ければ、僕は普通の一般人として、天人なんて恐怖から目を背けて、日常を送っていた筈だ。

記事にはこう書かれている。

『天人6体が孤児院へ侵攻し、孤児院内の職員、孤児の子供を含む約47人を殺害。四肢が散乱している死体もあり、正確な犠牲者数は無判明。生存者1名。天人が意思を持ったかのような行動で孤児院を襲い、理由は不明。尚、その後の天人6体の姿は見付かっていない』

覚えてる……絶対に忘れない。

腕を切り落とされ、泣き喚きながら死んだ男の子。逃げようとして首を刎ねられた女の子。僕を庇つて刺された先生。その時に浴びた血の生暖かさと、鼻を突く鉄の臭い。紅い翼を生やした天使の、見せしめと言わんばかりの残酷な振る舞い。

鮮明に記憶が蘇り、頭が痛む。吐き気を抑えて、何とか教科書を開じる。

(なんで……僕は生きてたんだろう)

天人が僕に向けて剣を振り下ろすまでの記憶は、過去へ戻ったかのように思い出せる。だけど、肝心のその後が見えない。その状況だけ見れば、子供の僕は剣で斬られて死んでいる筈なのに。

(なんで、僕だけ生き残ったんだろう)

優しかった先生や、仲の良かつた友達。日が経つ毎に徐々に薄れ

ていく彼等の面影。

今の非力な僕を思うと、情けなさと申し訳なさで、また頭が疼いた。

17『彼女宣言＆嫁宣言』（後書き）

改善版です。

いやー……改善しました、結構むづかしくひや頑張りました。
毎回思ひ出しが、文章考えるのって難しいですね。かなり頭を悩ませてくれますが、完成した時の感動が一塩です。

最近灯火メインの話多いなあ……とか思っていたり。

まあ、可愛いからいいじやないですか？ねえ？謎を出したいひとつ
ひともあって、思い切って一話とも灯火メインに
他のヒロイン空氣じやないか、とか言わないで下をこ…

18 パフェスプーンは凶器

神葬具の解放は使用者に膨大な体力、精神力を要求する。その代わり、通常の神葬具とは桁違いの力量を引き出す事が可能。諸刃の剣とは正にこの事。

授業中に教師から呆れられるほど爆睡して、やつと頭が働くようになつた。

元々攻撃力が無いあたしの脚鎧の神葬具は、戦闘時に確実と言つて良い程、解放の使用を迫られる。戦闘＝解放なんて図が出来上がりつたら、流石に身が持たない。

解放した事に加え、近接格闘へ持ち込む運動があるから尚更。疲労除去の為には睡眠と食事が一番効果的なのだが、こんな事を繰り返していたら確実に生活リズムが狂うこと請け合い。

「楓、大丈夫？」

午後のみの授業が無事終了し、軽食を買いに学内食堂へ向かう途中、隣を付き添う友人から心配そうな声を掛けられた。

先程から何度も同じ質問をされていて、どうしたらこの友人は納得するのか、と方法に悩む。灯火は心配性過ぎなのよね。解放して疲れ果てるなんて毎度の事なのに。

「大丈夫よ。ちゃんと授業中に寝れたし、体の調子だつて戻つて來たし」

「その治り始めが一番大事なんだから。あんまり、無茶な運動はダメだよ？それと、寝るなとは言わないからせめて先生に見えないよう隠れて寝てね……？」

教科書で顔を隠そうにも、寝ている間に教科書が倒れて結局丸見

え。だつたら下手に隠すよりも潔く睡眠攝取していた方が先生も諦めがつくんじやなかろうか。

それと、灯火は神葬具使いよりも看護婦とかの介護系の職業が向いてると思ひ。気遣い上手だし、手当てが上手いし。きっと男子とかは、灯火みたいな子が好みって人が多いんだろう。あのバカレッヂも絶対にその部類でしょ。別にアイツの好みなんてどうでも良いんだけど……。

「でも、こんな時間に食べて、タジ飯食べれる？」

確かに灯火の言つ通り、微妙な時間。我慢しようと思えば出来るけど、解放のせいか普段より空腹感が強い。出来れば、小さい物でも口に入れて置きたい気分。じゃないと、正直夜まで持たない。主にあたしの堪忍袋が。

それにしても、灯火もあたし達と一緒に戦っていたのに、こんなにも疲労度に差が出ている。わかつてはいたけど、後衛と前衛でここまで消耗率が違うと、不満を漏らしたくなる。こちらは体を激しく動かす分、体力の減りが著しい。後衛はと言えば、限界まで集中力を引き絞るから精神力を主として使う。結局、どちらも使用者次第つて事か。

「サンドウイッチ摘まむくらいだし、全然平気よ」

「前のダンジョン授業の後はそう言つておにぎり3個食べてたよね……晩御飯半分は残してたし」

「！」今日は平気よ！大丈夫、ちゃんと食べても2切れにしておくからーサンドウイッチはお腹に貯まらないからー！」

おにぎりよりサンドウイッチの方が消化が早い。きっと夕食までには消化が完了している筈。いや、量を考慮したら、いつその事うどん一杯の方が効率良いかも。

食べる物を記憶の中にある学内食堂レパートリーから検索していると、聞き覚えのある声が食堂内から聞こえてきた。何でアイツは授業に出てなかつた癖にあたしの行く先にはいるのか。

「あれ、白かな？」

レッチがいる事に驚いていた灯火を置いて、学内食堂に突き進む。文句を言おうにも、レッチ本人が学内で見付からなかつたし、丁度良い機会。深夜の戦闘の時に突然いなくなつた事に対する文句を、ここで晴らしてやる。

「お前等知り合いだつたのな」

どうやら舞佳の話を聞く限り、エリーゼとは深夜の戦闘中に偶然会つてたみたいだ。

舞佳達が天人の集団を闘技場に誘い込み、苦戦している最中に、中位の天人を蒼炎で跡形もなく焼失させ、放火魔の犯行後のように去つて行つたらしい。

エリーゼの神葬具は印象に残るしな。俺みたいな銃器ならまだしも、普通の神葬具でここまで特徴があるのも珍しい。能力で狼と猫をこしらえたり、刀の形状にして敵に斬り掛かつたり。中位の天人と刷り込みしたからこそその能力。

それと舞佳は、やつぱりこいつの知り合いか、みたいな視線を止めろ。わりと傷付くから。

「白様白様、はい、あ～ん」

お前は空氣を読め。パフェを掬い上げたスプーンをこつちに寄越

すな。

折角授業をサボつてまで学内の食堂で静かに飯を食そとと画策したのに台無し。眠気は抑えられても苛立ちは限界があると知れ。「コーヒーを啜りながらの俺の拒否にむくれながら、頭の上に陣取つているケルビンにパフェを『えるエリーゼ。動物に甘い物はダメだろ常識的に。糖尿病にもなるしつてこいつ等にそんな心配は野暮か。きっと腐った肉とか『えてもピンピンしてる。

『姫しやま、甘いでしゅ~』

「良かつたわねケルビン。……わたくしも白様にして頂けたらどんなに良いか……ぶつぶつ」

『お嬢様ツ。腕をし、絞めるのは苦しいでござる…ッ』

秘儀、聞こえない振り。

夜に集まる食堂より、一回り小さな学食堂は、放課後になつたばかりなこともあって、俺達以外空席のみ。思いの外、ここが小さな造りなのは、弁当を学内に持ち込む生徒が多いせいだらう。朝食、昼食は、夕食時と違い自己出費だし、食堂よりも弁当を持参した方が安値で済む。

国の援助も変だよな。何で学費免除で飯を補助する癖して朝、昼飯は省くのか。

「つてか舞佳、お前ぼろぼろだな。解放したのか?」

腕や脚に包帯を巻いて、頭にも何時ものカチューシャ代わりに包帯を巻き付けている。少しばかり赤く染まった血の痕が痛々しい。神葬具に回復系の能力があれば良いのだが、天人に対抗出来ているだけでも贅沢な物言いか。

俺達と別の場所で戦っていたのもあって、被害の大きさは窺えない。舞佳だけが神葬具の制御を誤つて傷を負ったのかも知れないし。

ただまあ、緊急時に闘技場という囮み込める場所にまで誘い出した作戦は見事。案を閃いたのはこの手の事態に慣れている3年生だろう。突然出現陣が町のど真ん中に出現しても可笑しくないのが現状だしな。臨機応変な態度は必要不可欠。

「いや……してねえけど、双剣の方が言つ事聞かなくてな。振り回されてる時に、ちと攻撃貰つたりした。掠り傷ばつかだから、そんなに痛くねえけど」

本人が言うならこれ以上の追求は止めておこう。舞佳も双剣を使いこなせない事に不安を抱いているようだし、余り深追いすると追い込みに成りかねない。距離感が大切だ。楓とかエリーゼなんかは気にせず土足で押し入るだろうが。

教室に戻るのも面倒になつたようで、舞佳は担任の願いそつちのけで購入したメロンパンを貪つてている。哀れな教師は、生徒の残つてゐる微妙な空気の教室で、舞佳とエリーゼの到着を待つてゐるに違ひない。舞佳の性格知つていて本氣で頼み事をしたなら狂氣の沙汰だな。

未だに不満を呴き続けているエリーゼを無視して「コーヒーを飲み干そうとすると、

「レッヂ、アンタ今までどこ行つてたのよ！」

金髪が文句と共にやつて來た。ああ、更に俺の休息現場が崩壊していく。もう確実に休めない。放課後に突入したんだからこういう可能性も想定出来たのに、何故場所を移さなかつたのか。起こつた物は仕方ないが悔いは残る。

きつと楓が言つた「今まで」というのは戦いの後の消息か。確かにエリーゼの事で手一杯だつたしな。

場に金髪が一人いるという緊急事態。にも関わらず落ち着いてい

られるのはマスクott舞佳と癒し系灯火がいるお陰だ。さつやといの場を捨てて逃げ出したい気分は変化無しだが。

「ちょっと貴女、白様を馴れ馴れしく呼ぶのはお止めなさい」

席から立ち上がり、憤りを隠せない様子の楓と対面するエリーゼ。同じ金髪でも並んでみると全然違うな。楓が正統派の金髪で、エリーゼがプラチナブロンド。ややこしい金髪事情は止めてくれ。混乱する奴が出て来る。主に俺とか。

コーヒーだけに視線を向けていたいが、それだとエリーゼ対楓がら振り返る。

パフェスプーンを細剣^{レイピヤ}のように楓へ向けるエリーゼ。傍田からだと可笑しな金髪達って題名を付けたくなる光景だ。直ぐに寮へ帰りたい。

「何よアンタ、あたしはレッヂに用があるの」「白様を馴れ馴れしく呼ぶ事を止めなさい」と言つたのですわ

ああ〜、徹夜明けの身としては学内食堂に差し込む日差しがきついぜ。現実逃避で乗り切りたい。しかし田の前の金髪2人がそれを許してくれない。

この学園に来てから面倒事としか遭遇してない俺が、平和展開の要求をするのは間違っているだろうか。癒しが欲しい。お色気も可としておこう。

18 パフュームは凶器（後書き）

少し遅れてしまいましたね
少しの間、バトル回はお休みです。
エリーゼが馴染むまで、このままの進行状態でいいかと思います

「あたしはそこの男に用があんの！アンタは引っ込んで！」

「あらあら、怒鳴り散らすしか能が無いお犬さんは怖いですわね。もつと上品に振舞えませんの？」

案の定喧嘩になつた。楓が食つて掛かつて、エリーゼがそれを往なしながらも的確に毒を吐く。最悪のサイクルが完成している。さつさと片方を諫めないと学内食堂が崩壊しそうだ。ここ一帯だけ世纪末の背景になるのも有り得る。

こんな騒がしい状況でも、エリーゼの頭上で幸せそうに寝ているケルビンの肝つ玉はどんな形をしてるんだ。溜め息を吐きつつ、怒り狂う金髪の後ろにいる灯火に視線を向ける。

俺も灯火も、特定の奴の往なし方なら熟知済み。灯火に金髪を任せ、俺はエリーゼを担当。出来れば担当する相手を代えて頂きたいが、金髪でも苦労しそうなので、どっちにしろ同じか。

灯火と目配せで合図を取ると、同時に頷く。向こうも俺の考えを察知してくれたようだ。感が良くて助かる。

「誰が犬ですって！？」

「分からぬ程おバカですね。白様に無礼な振る舞いをする貴女で」

エリーゼが言い終わる前に、エリーゼの背後へ回り込む。モデル顔負けの長身の腰付近へ腕を回すと、抱き締めて楓からエリーゼを遠ざけた。抱き締めたエリーゼの髪や体から香る、上品な薔薇の匂い。本当に、変な事をしなけりや絶世の美女なのに、お粗末。

見ると、灯火は強盗犯を取り押さえるかのように必死で楓の腰に抱きついている。その取り押さえている金髪は猛獸か何かか。

猛獸に振り回されている所を見る限り、灯火は長くは持たないだろ。灯火が押さえ切れなくなる前に応援を要請だ。

「舞佳、楓を押さえてくれ！」
「体が痛くて力が出ない……」

どこぞのアンパンヒーローか己は。そして戦闘の後遺症がそこまで長引くのか。

流石、じゃじゃ馬双剣と大飯喰らい大剣の神葬具使い。他の神葬具とは威力が桁違だが、その燃費の悪さも桁違い。普通に戦闘しただけで楓の解放と同じくらいの体力、精神力を持つて行かれているのだろう。双剣の方が言う事利かないから尚更だ。

テーブルに伏せて生靈を出さんばかりに意氣消沈している舞佳を見限り、それならばとエリーゼの説得に移る。エリーゼを素早く説き伏せて、そこから楓を黙らせればこの場は納められる。

「し、白様からわたくしを抱き締めて下るなんて……ああ、白様の匂いと暖かさ、それと程好い力強さで痛気持ち良くて、わたくし、感激の余り……ふう」

やべえ凄く離れたい。猛烈に腕の中のこいつを放り捨てたい。

『旦那様……心中察するでござる』

何時の間にかエリーゼの腕の中から抜け、俺の脚をぽんぽんと叩くダイゴロウ。

犬にまで同情される俺つて一体。いや、どっちかというと従者に哀れまれてる主人つて一体。主従関係以前の問題だろ。

恍惚とした表情でぐつたりしたエリーゼを椅子に座らせると、灯火の加勢に回る。既に楓、灯火、共に息切れを引き起こしている状

態だが、金髪の猛獸が相手。油断は許されない。

「まあ落ち着け楓。そんなに怒つてると金髪が逆立つぞ」

「誰のせいよ誰の！あの戦いの時も突然いなくなるし、人の裸は見るし、は、恥ずかしいとこも見るし！アンタが来てからのあたしつて損ばかりじやない！」

小便の所は流石に羞恥が勝つか。無理もない、周囲には続々と授業を終えて学内食堂にやつて来た女子生徒達。この好奇の視線視線。女性の野次馬根性は恐ろしいな。

ただ如何せん数が少ない。戦闘が堪えている生徒も大勢いるだろうし、死者も出たんだ。元気が出せるのも目の前の金髪くらいか。その金髪も現在進行形で青白い顔をし出している。

「大体アンタは……うふ」

金髪が現在進行形で黒歴史を増やそうとしている。体調悪いのに騒ぐから大変な物が込み上げて來たようだ。幾ら外見が良くともそれは不味い。

腰に抱き付いていた灯火もその緊急事態に気付いたようで、

「うわッ楓ごめんね！お腹の所押さえてた！平氣！？」

「かなり平氣じゃない……主に、お昼に食べた物が……おえ」

「き、筋肉痛で死線があ……わたしの、匂坂 舞佳の一生はこんなところで終わるのか……！？」

「ああ白様……そんな、今度は前から抱き締めて頂けるなんて……一生付いて行きますう……ふふふ」

阿鼻叫喚。

今日も散々だった。疲れたどころの騒ぎじゃない。戦つて徹夜後にエリー・ゼの騒ぎだから尚一層疲れた。晩飯を食べる気力さえ失われている。

制服の上着をベットへ乱暴に投げ捨てる、ワイシャツを脱ぎながらシャワー室に向かう。トイレと別々で、シャワー室が各部屋に設置されている辺り、流石女子学園と言った所か。バストイレ共同じゃない部分は黒羽の要望だと思う。あいつ、バストイレ共同が死ぬ程嫌いって漏らしてたし。

まあ、女子が入つてるとか気を使わなくていいのは男として気楽で有難いな。

「ああ白様……女性の目の前で躊躇無く肌を晒すなんて、殿様らしくて素敵ですわ……殿方だつたかしら？」

『お嬢様、殿様は昔の大名等に使われた言葉でござるよ。旦那様に使うのなら殿方でござる』

まさか女の方が気を使わないなんて予想外だ。気配も足音も消してまで俺の後を付いて来ていたというのか。

幽霊が怖いと言う人、よく考えてみてくれ。幽霊は姿を見せるだけで実害を及ぼさない。結論、何処かのネジが緩んだ人間の方が怖い。

正直このまま振り返らずにシャワー室に立て籠もりたいが、そうすると背後のお嬢様が部屋の中で何をするか分かつたもんじゃない。パンツの2、3枚余裕で紛失してそうだ。

「どうして来た？」

「白様のおられる所にわたくし在り、ですわ。何せ、将来を契り合つた仲ですもの……誓いの方が良かつたかしら」

何時の間にか永久就職宣言してるぞ、このストーカー娘。ちなみに事実無根だ。

振り向くと、しなを作りつつ恥ずかしげに頬に手を当てるエリーゼ。気付け、そんな動作をする雰囲気じやない事を。今現在、自分が人として道外れた行為をしている事を。

身長の高さとは打つて変わって、女性らしい華奢な肩。眠氣と疲れからの同時攻撃で、ストレスがかさんでいる俺は、彼女を喜ばす事を知りつつも、力を込めてその肩を掴む。

「んうッ！？ ああ白様、そんな、大胆です 」

エリーゼが何かを言い終わる前に、有無を言わさず開きつ放しになっていた扉から外へ追い出す。間髪入れず扉を閉めて、きちんと鍵を掛けると額の汗を拭つた。

一仕事終えた後は清々しい。辛い現実は忘れて早々にシャワー浴びて寝よう。部屋の扉が叩き破られんばかりに激しくノックされているが幻聴だ。俺は何も聞こえない、聞こえません。

部屋の前の表札に書かれた『匂坂 舞佳』の字。そして、その下に追加された『エリーゼ＝ディ＝アルフォート』の名前。つい昨日までの寂しい1人部屋が、予期せぬ相部屋のお陰で2人部屋に。まさか知り合つたばかりの奴とルームメイトになるとは。しかも 、

「白様あ……わたくしの何がいけませんのぉ……」

こいつの神葬具と同じで、絶対零度を体現したような落ち込み具

命。帰つて来たと思いきや、体育座りで部屋の隅に居座るし。息苦しい事この上ない。体育座りの背中から冷気が漂つて来ている気さえする。冷房要らずで節電になるからこのままにして置こうつか。

『お嬢様、氣を落とさず一^ト次はきっと那様も分かつてくれるでござるよ!』

『姫しゃまへ飴を舐めて元氣出すでしゅ~』

頭の中に直接響く声を発しながら主人を慰める犬と猫のペット。白から教えて貰つたのだが、あの2匹共エリーゼの神葬具から創り出された生き物らしい。どつちかと言うと無機物か。ああ見えて呼吸すらしてないのだから驚き。事前情報無しに、2匹のペットが喋り出したのを聞いたら、心臓が口から飛び出していたに違いない。子犬の方は前足で慰める様に主人を優しく叩き、饅頭のような猫は頭に飴玉を乗せて主人に擦り寄つている。凄く不思議な光景の出来上がりだ。写真を撮つて其の筋の番組に送れば話題になる事請け合ひ。

「お、おい、どうしたんだ?」

若干迷いながらも、状況を進展させる為に決意を固めて声を掛ける。何事も始めは気遣いから。

わたしの呼び掛けにびくりとも反応しない背中。会話不成立。夕飯も食つた事だし、面倒事に巻き込まれる前に風呂入つてサッサと寝るか。

「そこの大剣使い、ちょっと話を聞きませんこと?」

遠慮させてくれ、と喉から出かかった声を飲み込む。このまま部屋に放置したら、風呂から帰つて来た時にはもう室内氷河期になつ

てる可能性も捨て切れない。大剣使いと呼ばれて一瞬で勘付いた所も、押し留まつた所も、我ながら賢い判断だと思つ。

それから犬と猫は、話を聞いてあげて下さい、みたいな視線を止めろ。聞くから、そんな目しなくても。

腹を決めろ匂坂 舞佳。大剣の素振り50回に比べれば同室生の奴の話を聞くくらいわけないじゃないか。苦しくても精神的な修行と割り切るんだ。

「あれは、白様と始めて御会いした去年の冬のことですわ」

それからわたしは夜が明けるまでの間、9時間以上の白話を聞かされ続けた。

学んだ事と言えば、人の要望を安請け合いしないって事と、男に心酔するなつて事だ。この同室生の様に病んだりするのは絶対に避けたい。

白の奴に会つたらこの恨みを絶対に晴らしそう。睡眠と、話聞かれ料込みで。

「白様はわたくしの危機に素早く駆け付けてくれて……ふふ、白馬の王子すら震む素敵さですわね……」

まだ続くのか……いい加減にしろ。

19 「金髪」VS「金髪」（後書き）

少し間が開いてしまいましたね。

あべほんぢやんねるは、また挙げられたる時が着たら挙げよつと思ひます。

全キャラ出揃つたらかな……?と作者的に考えています。

20『付き添いだから、デートじゃない！』

「えッ！？ 灯火は行けないの！？」

「う、うん。昨日先生に用事を頼まれちゃって、午後まで行けそうにないんだよ……」

折角の休日。ある種恒例行事になりつつある灯火とのお出掛けが、一瞬で白紙に戻された。

既に制服に着替え終えて、済まなそうにしている灯火の言い分だと、午後過ぎからなら出掛けられる様だが、それではあたしの本願が果たされなくなってしまう。

手に握っている2枚の映画のチケット。今日はこれが目的で外出する予定だったので、灯火が行かなければ1200円分の損失。それ以前に、灯火がいなければ、あたしは都内に出掛ける事も出来ない。

「1人で行く」

「だ、ダメだよ楓！道に迷っちゃうし、また男の人殴っちゃうかも知れないし！」

あたしの言葉を遮る、灯火の失礼な物言い。だが、それが全て本当なのだから言い返せない。

不本意だが、あたし、小波 楓は方向音痴だ。何回も行っている都内の映画館にすら灯火の案内が無ければ辿り着けない。以前、灯火の作ってくれた地図を頼りに単独で赴こうとしたが、何故か裏道まで進んでしまい、如何わしい店の並ぶ界隈に飛び出してしまった。無論、顔を隠しながらの全力逃走である。

次の男の人を殴るという言葉。あたしの髪は、突然変異のか血筋はない金髪で染まっており、見つけて下さいと言わんばかりに

目立つ。軽い男がその目印を頼りに近付いて来て、目に余るしつこさに、こちらは嫌悪感最大出力の蹴りで応戦。危うく警察沙汰になりかけた事もある。

「でもどうしよう。これ午前の部で終わっちゃう」

戦闘で疲れ果てた体を睡眠で癒し、娯楽にいざ行かんと思いつや中止の危機。何より前売り券なのが痛手。予約だつたら電話を入れ取り下げるのだが、もう出費をしてしまっている。出来ればこの券を無駄にしたくない。

その実、前売り券だと300円お得に釣られた結果がこれだったりする。

「だったら、白に頼んでみたらどうかな……？」

何かを思案していた灯火が、とち狂ったのか唐突に口にする。灯火だって、あたしとレッヂの関係を知らない訳じゃない。言われた内容が内容なだけに、意味が分からず呆然としてしまった。宙を漂っていた意識を無理矢理引き戻すと、頭を振りつつ、手のチケットを握り締める。

「レッヂに！？ 無理、絶対無理！あのレッヂよ！？」

「どの白かは知らないけど……楓を一人で行かせるより、僕は白を頼つた方が良いと思うなあ」

この子は言葉の節々に脅迫観念を織り交ぜでもしてるのでどうか。普通に諭されているだけなのに、強制されている気がする。そりや、確かに男が近くにいた方が安全だし、レッヂだつたら道には迷わないだろうけど……なんか複雑。

というより、アイツがこんな頼みに乗つて来るのは到底思えない。

どうせ適当に理由をでっち上げて逃げる筈だ。そうなつたら有無を言わさずに単独で都内に外出しよう。流石にそれなら灯火も引き下がるだろ「う」。

「とにかく、一度白に黙ってみようよ」

「IJの信号を右か。しかし分かり易いな、灯火の地図」

高を括っていたあたしがバカでした。まさかこの男が誘いに乗つて来るなんて、予想外過ぎて涙が出る。

あの後、丁度良く寮のリビングでくつろいでいたレッヂに灯火が声を掛け、要望の内容を説明。どうせ断るに決まつてると、遠くで様子を窺いながら決め付けていたあたしは、灯火が出した大きな丸印の身振りに口を開けて呆然としてしまつた。

（灯火に提案された時は気付かなかつたけど……『デート、よね。これって）

氣付かれない様に隣を盗み見すると、灯火に書いて貰つた地図片手に辺りを見回している、都内の町並みには不釣り合いな黒コートの男。その証拠に、通り過ぎる人々が必ずと言って良い程、振り返る。

きっと、その振り返る要因にはあたしの金髪も含まれてるんだろううけど。

学園内とは違う、大多数の人に行き交う都内の雰囲気。人によりけりだけど、あたしはこの空気はあまり好きじゃない。元々人混みという物が苦手だし、生まれ持つた金色の髪のせいで、変に注目を浴びてしまう。用事が無ければ、赴く事すら考えない。

「ここに辺りみたいだな。もうちょっとだぞ、金髪」「な、何度も来てるからわかつてゐるわよ……されど、金髪って言ひな

普段ならもつと文句を言つてゐるんだろうけど、今日は止めにしておく。映画が楽しみなものもあるけど、実はこの男、ここに辺り着くまでに色々気を使つてくれたのだ。混み合ひの電車内で空間を作ってくれたり、度々休憩を挟もうとしたり。

いつその事、いつも通りに軽口呂く態度でしてくれれば、こんな気持ちにならないのに。変に気を回されたら、意識しちゃうじゃない、ばか。

(こや待てあたし！こいつは、あたしを引ん剥いて、あまつさえ見てはならぬ現場を見た張本人なのよ！これは違うのー・むず痒いこの感じは恥ずかしいんじやなくてッ！そつ、敵対心よ敵対心！)

赤くなっているであろう顔を他人に見られるのが嫌で、俯いて歩いていいると、軽く柔らかい壁にぶつかる。驚きつつ顔を上げると、ぶつかった対象であるつ、立ち止まつた黒コートの後姿。歩みが遅くなり過ぎたのか、何時の間にかレッヂの後ろに回つていた様だ。

「ちょっと、何で立ち止まつてゐるのよ」

女とは全然作りが違う広い背中に向かつて文句を言つと、黒コートが文句に引き寄せられるよつこ、こちらへ振り向く。何だか、鬼気迫つた雰囲気を纏つてゐるよつたな気がするんだけど、氣のせいなんだろ？

「おー金髪。ちょっと今日観る映画のチケットを見せてくれ

「な、何よ、いきなり……。はい、これだけど」

唐突な申し出に戸惑いながら、財布に入れてある前売り券一枚を取り出す。鞄とか面倒な物は持ち歩かない主義なので、財布なんかもポケット行きになるのだ。自分で言つのも何だけど、女としてどうかと思つ。

差し出された券を受け取ると、それを凝視するレッヂ。気になる事でもあつたのか。

「ああ……俺の見間違いじゃなかつたんだな」

頭を抱えかねない表情でそう言つレッヂの背後には、見慣れた目的地の映画館。そこ大きく張り出された、目的の映画の広告には、全身スーツに身を包んだ印象的な人物が、爆発を背景に飛び蹴りの体勢を取つてゐる。

確かにレッヂには観る映画の内容を教えてなかつたつけ。でも、正義の味方は万国共通。しかもレッヂは男なんだから、この映画に心惹かれないと筈が無い。

無意識に感情が高ぶつて来る。ここ最近、災難やら戦闘やらでストレスが蓄積していたし、一気に発散出来るのは良い事だ。先に映画館の入り口へ入つて行くチビッ子達を見て、負けじと後に続く。

「まさか特撮ヒーロー物とはねえ……。悪くとも恋愛物とか考えてた俺の負けか」

「何ぶつぶつ言つてゐるよーほり、わざと行くわよー」

先程とは打つて変わつて、あたしの後で何かを呟いていたレッヂの腕を引っ張る。もう上映まで時間が無いみたいだし、席は指定だけど早めに座つて置きたい。

「引っ張るなって。行くから、自分で行けるから。伸びる、袖が伸びる」

灯火に頼まれ事をされて、映画を観に行きたいなんて言つ物だから、てっきり依頼主と行くのかと思ひきや、

「楓を連れて行つてあげて欲しいの！」

だもんな。友達思いというか、何というか。

まあそれでも金髪のエスコートを引き受けた理由としては、生の映画館という物を見たかったからだ。記憶喪失になる前はどうか知らないが、今の俺が生まれてから、映画館なんて所には一度も行った事がない。本の方が性に合つているし、趣味に合つ映画は大抵テレビで放映されるくらい昔の物。映画館に出向く必要性もなかつた。それに、今の俺が知らない物を見れば、もう5年以上も思い出せない今までいる昔の記憶が蘇るかも知れない、なんて淡い期待も混じつたりする。

（しつこいエリーゼを何とか撤いて、名作の映画でも觀るのかと思つたら特撮つて……）

と思つて上映まで氣を落としていたんだが、観始めたら中々面白いな、これ。

内容としては、悪の秘密結社と戦う改造されたサラリーマン主人公つて感じなのだが、結構奥が深い。敵役も良い味出してるし、食わず嫌いはダメだと実感する。戦いと家庭と仕事で三つ巴になる場面なんて見物だ。楓が熱狂するのも分かるな。

おお、キックか。今の必殺技の蹴りつて、楓が多用する飛び蹴り

に酷似してゐるんだが、まさかこれ観て練習したのか、お隣の金髪。

「ちょ、ちょっと……あんまり寄らないでよ」

「カッフルシートなんかにするからだろ。300円返金に釣られたお前が悪い、諦めろ」

2つの席が連結して、真ん中のサイドバーが取り外されたカッフルシート。普通に座つていると、体が密着して映画どころの騒ぎじゃない。無理に距離を取つている今でも、楓の葡萄っぽい香りが漂つて来る近さ。

受付で応対中に、受付嬢からの「カッフルシートが空いていて、そちらならお二人様で300円引きになりますけど、如何ですか?」の言葉に楓が釣られて、普通の席から2人にしては狭苦しい相席へ。確かに特撮映画を恋人同士で観に来るはないだろうな。他の席も結構透いているし。

そして金髪は文句言つなら300円高くても普通席にすれば良かつたじやないか。抹茶オレの代金の時も思つたが、変に節約家なんだよな、こいつ。

「い、いいい今アンタ、あたしの脚触つたでしょ……！」

細くて綺麗な脚だが、恋人でもない奴にそんな事したら犯罪だろ。誰がするか。

ニーソックスに包まれた脚を俺から離しつつ、警戒状態を保つたまま画面に集中し始める楓。器用だな、お前。だが警戒に視線を割いていると大事な場面を見逃すぞ。

『喰らえ、必殺！ライダー イイイイイイクツ！』

必殺技となると派手だな。怪人が木つ端微塵。しかし館内の子供

達は喜んでいる。隣の金髪も警戒を解いて吊り目の瞳を輝かせている。世も末だ。怪人とはいえ生き物が内部から爆発して喜ぶとは。自分の夢の無さに苦笑していると、ふと小さな光が楓の方向から漏れているのに気付く。

不思議に思い視線を向けると、映画に見入っている楓の露出した両腕に、奇妙な文字が浮かんでいた。何所の国かも検討が付かないほど、歪な複数の文字。それが、鈍く発光している。

「な、なに見てるのよ……」

俺の視線に気付いたのか、楓が胸元を隠しながらこちらを睨んで来る。

着痩せするかどうかはさて置き、灯火より少し小振りだな。
ではなく。

楓に、お前の腕が光っていると伝えようとした時、楓の両腕に浮かんでいた不思議な文字列が、まるで幻の如く焼き消える。光どころか、焼き入れられた烙印のようだった文字までも、跡形も無く綺麗サッパリと。

「ばか、えっち……見られてると、映画に集中出来ないじゃない……」

…

なんか親切で教えてやろうとしたのに更に評価が下がってるんだが。証拠が消えた今となつては弁解しようとしても無駄なので、諦めて放つておこう。映画に集中して、全てを忘れて貰うのが一番都合が良い。

しかし、何だつたんだ、さつきの文字は。気になつて映画の内容が頭に入らないぞ、どうしてくれや。

20『付き添いだから、デートじゃない!』（後書き）

大幅修正入れました……疲れた
けつこう変わっているので、楓の出し方も変わっています。
前より良くなってると思うんですけど…

21『意識なんてしてない……』

「ほら、面白かったでしょ？」

「何でお前が誇るかは分からんが、確かに面白かったな」

正直、楓の両腕が光るのを目撃してからはそつちに意識が持つていかれて、映画処じやなかつた。あの奇妙な文字列が、また現れるんじやないかと見張つていたが、結局最後まで現れずに見張り損。映画の見せ場も見逃すし、疑問は深まるばかり。

カツプルシートのお陰で浮いた金で、パンフレットを購入した楓を引き連れて、納得のいかないまま映画館を後にする。

時間も良い頃合なので、昼食を食べる為に立ち寄った喫茶店。オーブンテラスを案内されたまでは良いが、そこから楓の熱弁が始まつた。人は好きな事を話すとなると饒舌になると語つが、正にこの事。

「朝にやつてるやつだと迫力に欠けるけど、やつぱり映画だと違うわね！」

瞳を輝かせ、特撮を熱く語る金髪。お前が注文したメロンソーダの氷が、コースターの上で大半溶け切つてるんだが、助言するか否か。今の調子だと、楓が語り終えた頃には氷が全て溶けて、飲む気が失せる程薄まっている事は間違いない。

いや、楽しく話している楓を邪魔するのも野暮か。後悔しながら飲んで貰おう。

料理が来るまでの繋ぎで頼んでおいたコーヒーに口を付けると、こちらは冷めつつある。冷めるだけだから、と安心出来ないのがコーヒーって物だ。冷めると大体の安物は不味くなるんだよな。

「灯火も来れたら良かつたのに……」

語り続けていた途中で、楓が言葉を区切り、残念そうに口にする。確かに朝聞いた話だと、灯火は学園で用事があつたんだよな。委員長でもあるまいに、休日までご苦労な事だ。

分からぬ程度に諭して、楓にお土産を持たせるのも良いだろう。もし、あの購入した映画のパンフレットが灯火へのお土産だとするならば、灯火が不憫過ぎる。俺が灯火の立場でパンフレットをお土産に貰つたら、間違いなく枯れるまで涙を流す。

「まあ、帰つたら感想を伝えたら良いさ。それに、また別のも観に来るんだろう？」

「決まつてるじゃない。実は来月に違うやつが上映するのよね。これは宇宙から来た巨人が怪獣相手に戦うやつなんだけど」

俺に楓の事を頼んでいる最中、灯火は行けない事を本当に残念がつっていた。だつたら、少しでも灯火の代わりに、こいつを楽しませてやろう。たまの休日だ。全てを忘れてノンビリ過ごすのも悪くない。

そして金髪、お前あの映画の主人公の蹴りを模倣してたよな。今度は腕から光の光線とか出したりしないか本気で心配だ。両腕から光を発してたお前なら[冗談抜きでやりかねない。

「それでこの5人で協力して相手を ちょっとレッヂ、聞いてるの！？」

何時の間にか話題が特撮戦隊物へ移っている。このまま語り続けさせたら夜まで続きそうだ。

頭を抱えそうになりながら、灯火はいつもこんなのを相手にしてゐるのか、同情の念を覚えた。灯火には胃炎から離れた健やかな老

後を送つて欲しい。

「半分払うって言つたのに……何で払うのよ」

昼食を済ませた後、少しの間化粧室に行ついたら、会計を済ませたレッヂが喫茶店の出口で手を振つていた。割り勘だと決めて、払う金額まで計算しておいたのに。

半分は払うと意固地になりつつ食い付いても、「こいつ時には男に見栄を張らせるもんだ」の一点張り。石で固められたかのような頑固さに、遂には白旗。どうあっても譲る気はないらしい。

でも、やっぱり納得いかない。強引にでもお金を受け取つて貰つて、と考えていた時に、前を先導するレッヂの背中を眺めて、ある出来事が思い起こされる。

(も、ももももしかして、レッヂは……デートつて思つてるの……?)

随分前に、灯火が他の生徒から押し付けられた女性雑誌を、2人で読み耽つた事がある。「デートの事やその時の服装、相手の行動。女子なら絶対に、一度は興味を持つ内容が所狭しと綴られていた。その中に書かれていた一行の文。

男性は異性へのアプローチの際に、奢りを提示する事が多い。女性から見たら何気ない外出でも、男性の方は「デート」と決め付ける場合が多い。

(ち、ちち違うのーあたしは灯火と映画に行くつもりで！でも灯火が行けないから、レッヂに付いて来て貰つて……付き添いなのよ！デートじゃないデートじゃない……ッ)

熱くなり掛けた頬を両手で押さえて、首を何度も横に振る。こうでもしないと、予想外な事態過ぎて、発火しそうな程恥ずかしい。自慢出来る事じゃ無いけど、あたし、小波 楓は生まれてこの方、デートなんて物をした事がない。体を鍛えて、神葬具に慣れる訓練をする毎日。娯楽も殆ど無いに等しい日々で、自分がこんな状況にいる事をさえ信じられない。

さつと今まで普段通りでいられたのは、映画に気が逸れていたのと、異常事態過ぎて事態の重さに気付いてなかつたから。

「ん？ どうかしたか金髪」

「な、なななんでもないない！ 気にしないで先に行つて！」

絶対に赤くなっているだらう顔を見られるのが嫌で、振り返りうとしたレッヂの背中を強く押す。

不自然かどうか関係ない。今こいつに顔を見たら、比喩抜きに逃げ出してしまいそうだ。それこそ、神葬具を装着して周囲の人を薙ぎ倒しながら。

もう映画を観て昼食を終え、帰路に着くだけだが、駅前まで正気を保つてられるかも定かではない。

「見られてると……変になりそつ……」

「楓……楽しんでると良いな」

休日の教室。教師から頼まれた資料を片付けている最中、ふと、送り出した友達の顔が思い浮かんだ。

僕自身、男の人と2人つきりなんて状況は、天人に襲撃される前

の、あの夜が初めてだった。楓の寝相で目が覚めてしまい、深夜に寮のロビーに行くと白がいて。変な勢いで散歩に誘っちゃつて……

今思い出しても自分の大胆さに頬が熱くなるのを感じる。

あんなに短い時間でも、恥ずかしさで胸が苦しくなったのに、今の楓の状況だと尚更だ。

出掛ける時は緊張感なんて微塵も感じさせなかつたけど、楓って妙な所で鈍感だし。

「後々緊張し出すんだよね、楓つて」

やり始めは顧みずに何にでも特攻するが、改めて根本が分かると慌て出す。友人の短所の1つである。

きっと楓は、少し時間が経つた後、初めて自分が男の人とデートをしていると気付くんだろう。映画館だと映画に夢中で、そんな事気にも留めないとと思うけど。1つの事に集中し出した時の楓の集中力は、目を見張る物があるし。

映画を観た後は、真っ直ぐ帰つて来るのかな。楓は、映画の感想を、目を輝かせながら教えてくれるに違いない。

「……なんでだろつ、胸が苦しい……」

楓と白が並んで歩いている場面を思い描いて、不意に心臓の辺りが小さく疼く。

白との散歩を呼び起している時のよくな甘い痛みじゃなくて、胸が締め付けられる感じの、息苦しい窮屈さ。喉が渴いて、手元に置いておいたペットボトルのお茶を手に取る。

応援しなきや、友達が頑張ってるんだから。この胸の苦しさは、作業が長引いているからだ。

お茶を無理に喉へ流し込むと、自分に言い聞かせながらペンを握る。早く終わらせて、楓が帰つて来たら笑顔で出迎えよう。大丈夫、

きっと、楓が帰つてくる頃には笑顔でいられる筈だから。

何故か俯きつつ俺の後ろを歩き続ける楓。

どうせもう駅まで行つて帰るだけだし、隣にいてくれた方が色々と都合が良いんだが。楓と話そうと振り向こうとする、背中を叩いて制止して来る始末。これじゃ灯火への土産の相談すら切り出せない。本気で土産がパンフレットになるぞ。

それでは余りに灯火が哀れなので、怒鳴られる覚悟で振り向くと、肝心の金髪が失踪。

「おい待て、迷子の達人か」

予想以上の失踪具合に、自分でも訳の分からぬ言葉が誕生した。このまま見失つたら洒落にならん、と辺りを見渡すと、道一本隔てた向こう側に、目立つ金髪が揺れていた。人混みに紛れても、バカみたいに自己主張する髪は看板のよう。今回は本気でアイツの金髪に感謝しなくては。

子供でも親から離れる時は一言残すぞ、と呆れると、横断歩道の前で運悪く信号が赤に変わる。立ち往生。

田を凝らして人混みの隙間から楓を見ると、屈んで姿勢を低くした金髪の前に、涙目の幼女の姿。

「そつか、ママとはぐれちゃつたんだ」

普段とは違う、優しい顔を浮かべながら子供の頭を撫でる楓に、怒る氣力が失せてしまう。でも、せめて一言は残して行け。お前もその子と同じ状況になり掛けてるぞ。

信号が青に変わり、迷子と思われる子供をあやす楓に、歩み寄り

ながら遠くから声を掛けようとする。

「おーい、かえ……で」

子供を慰める楓。その後ろの空間が、波打つ水面のよう
に激しく歪む。

目を見開いた。何度も見た光景だ。そう、何度も何度も。あれを
見る度に人が死に、鮮血で場が赤く彩られる。

歪んだ景色を食すかのように取り込み、突如出現する紫に発光す
る文字の陣。楓の後ろだけではなく、其処彼処に、同じ円陣が、目
視できる限りで4つ出現。魔法陣と言っても過言ではない禍々しさ
に、周囲の人々が悲鳴を上げる。そこからはもう、見るに耐えない
大騒ぎだ。

「楓ツー！そこから離れろ！」

予想してなかつた訳じゃない。でもまさか、こんな高頻度で近辺
に出現陣が現れるとは。しかも、狙っていたかのように分断されて
いる最中で。

出現陣から必死で遠ざかるうつと押し寄せる人波を、強引に掻き分けながら楓に向かつて叫ぶ。

しかし、目に映ったのは逃げようとする姿ではなく、呆然と立ち
尽くす楓の姿。何故か共にいた迷子の姿が見当たらぬ。背後の円
陣から現れているのは、楓の背中を狙っているであろう槍の穂先。

「かえでええええええええええツ……！」

2-1『意識なんてしてない……』（後書き）

前投稿した2-1話の改正版です。

変に長かったので取り置いておいたこちらを採用。

エリー・ゼと舞佳が消えたのは残念ですが、また次回にでも出せると
思うので、

その辺は大丈夫かな・・・と。

他にも改変している話があるので、暇があれば読み返して頂けると
幸いです。

22『戦ひ意味、光の剣』【挿し絵】

駅までの帰り道の途中、まだわたしは、レッヂと口を利用しないでいた。

俯き加減で後ろを付いて行っていた時に、それがふと目に留まる。横断歩道を隔てた向かい側の歩道で、身を縮め、顔を両手で覆っている少女。見える限り、少女の周りには、見て見ぬ振りをして横切る通行人のみ。迷子、なのだろうか。

一緒にいたレッヂに一言声を掛け様としたが、どうやら余所見をしている内に逸れてしまつたらしい。薄情な奴とも思つたが、あたしが無言で後ろを歩いていたのもあつて、気付かなかつたに違ない。

気付くと、脚がその女の子の方へ向いていた。信号が青になつたのを見て、時折通行人にぶつかりつつも、女の子へ近寄る。

「どうしたの？」

あたしが屈んで話し掛けると、女の子が俯いていた顔を上げる。やつぱり泣いていたようで、四葉のクローバーの髪飾りが映える、可愛く整つた顔が若干朱色に染まつていた。

財布を収納している方とは反対側のポケットに手を突っ込み、灯火に持たせて貰つた花柄のハンカチを取り出す。灯火が出掛け際にハンカチを手渡してくれなかつたら、何で拭いてあげようか本氣で困つていた所だ。

「人を探してて……どこにも見当たらないの」

涙を頬に伝わせながら、しゃくり上げる少女。

涙が溜まつた目元を優しく拭き取り、女の子に笑みを見せる。こ

うこう時は、子供の心細さを無くす為に、身近で接する人物が笑顔でなくてはいけない。心許せる相手だと分かると、子供も安心出来る。

「そっか、迷子になっちゃったんだ」

「この子が探している人と言つのは、やっぱり両親なんだろうと、自分で結論付ける。

女の子の小さな頭に手を乗せると、緩やかに手を動かす。他人の頭を撫でるなんて何時以来だろう。

迷子の子はくすぐつたそうに田を細めて、少しづつしゃくりを緩めていく。心を許してくれてる証拠だと受け取つて良いだろうか。以前同じ様な状況になつて、灯火がやつっていたのを手本に、見よつ見真似で実行したのだが。

「ね、お姉ちゃんが一緒に探してあげようか?」

逸れたレッヂの事もあるし、合流してから探そとも考えたが、それだと女の子の不安感を更に煽つてしまつ。もしかしたら迷子の母親を捜索中にレッヂと偶然再会出来るかも知れなし、この子と一緒に探し回るのが一番良い行動だと思う。

あたしの提案に、落ち込んでいた女の子が期待を込めた視線を送つて来る。

「いいの……?」

「任せときなさい、絶対に探し出してあげるから!」

我ながら無責任だけど、これくらい大見得切つといった方が、この子も安心出来るだろ?。

さて、何時までも迷子の子じや変だし、自己紹介を兼ねて名前を

訊いておこいつか。そう思い、女の子に問い合わせようとした時、突然周囲の人々がざわめき出す。中には、甲高い悲鳴も混じっていた。事故でも起きたかと思ったが、交通事故にしては騒がしい衝突音等が無い。

「でもね、お姉ちゃん。いいの、もう見付かったから」

あたしの背後を指差して、少女が その年齢の物とは思えない残虐な笑みを浮かべ口にする。その頃には、もう周囲のざわつきは悲鳴や叫び声に変貌を遂げていた。その言葉の波の中で何度も響く、天人という言葉。

意を決して振り向くと、直ぐ傍にある禍々しい気配を発する一人分の文字円。今の地球上に、この存在に対しても怯えを抱かない人間はない。そう称されるのも納得する程の威圧感。それが、徐々に数を増していく。規模にして、学園襲撃時の2倍ほど、だろうか。「結局、”あいつ”は見付からなかつたけど……お姉ちゃんは同じ匂いがする。折角ここまで来たんだから、自分への手土産も一つくらい欲しいし……」

迷子の少女が命懸をするかのように、その華奢な腕を擧げると、現れたばかりの出現陣から続々と赤い翼を持った西洋甲冑が出現。各々に物々しい凶器を携え、一見、誰もが見惚れん美しい姿。今の世界中で、その姿を見て悲鳴を上げない者はいない。

「あんた……誰なの……？」

田の前の出現陣から田が離せず、背後にいる少女へ視線を向けず問う。

田の錯覚なら嬉しいが、この少女が指差した場所に出現陣が現れ

た。そして、声を掛けた当初とは打って変わった、とても外見通りとは思えない言葉遣い。

「『この世界の救世主だよ、人間』^{メシア}」

出現陣から現れた槍の穂先が迫る。その狙いは、確実にあたしに向かつっていた。

神葬具を呼び出そうにも遅い。普通の神葬具使いならば未だしも、あたしの神葬具には詠唱が必要。それに加え、魔法陣から発された狂気に口が震える。とても言葉を紡げる状態じゃない。

咄嗟に動かそうにも脚が言う事を利かず、避ける事が出来ない。

「しり……ッ！」

祈るように口にするのは、灯火や両親でなく、会つては口喧嘩ばかりの男の名。無意識に口から出た男の名は、何故か口になると暖かく、何かが変わるという想いを抱かせてくれた。

「レッヂ！？」

驚きの声を上げる楓を背に庇い、出現陣から突き出された槍を正面から防ぐ。右腕から発せられた光の盾が、悲鳴を上げた。こうしてぶつかると理解出来る、天人の圧倒的な力。こんな貧弱な盾では、受け流す事も叶わない。

即座に光が搔き消えた。それに伴つた爆発と見紛う風圧に堪え切れず、右腕があらぬ方向へ捻じ曲がる。

「 ッ！」

衝撃で体が浮き、後方へ吹き飛ばされる。

背中に衝撃が走り、意識が遠ざかる感覚。微かに聞き取れた音から察するに、何処かの店のガラスを突き破ったのだろう。勢いは消えず、そのまま地面をボロ雑巾かのように転がる。

体のそこ等中の傷から溢れ出た血が、体の転がった痕跡を残していた。

朦朧とする意識の中、自分の状態を確認しようと目を開く。純白の光を纏つた右腕を動かそうとするが、激痛が走るだけで動かす事も敵わない。流石にここまで怪我だと、腕一本で済んだのが奇跡だな。

(指が動く…… 神経は生きてるか)

武器を出す余裕が無く、この力で受け止めるしかなかつたが、骨折程度で済んでる点から考へるに、出現陣から槍を突き出したのは下位の天人。もし中位からの攻撃だったのなら最悪、体丸ごと持つて行かれていた結果も有り得る。

力を振り絞り立ち上がるうとすると、体が堪え切れず嘔吐物が胃から逆流した。我慢せずに吐き出すと、コーヒーと少量の血が混雜している。胃液も混じっていたのか、喉が焼けるように熱い。

「はは……こんなにきついのは久々だ」

ガラス片で裂けたのであるう類の傷。そこから伝う血を舐め取り、コートの袖で口元を拭う。外見だけなら酷い有様だが、中身はそこまで傷付いてない様だ。受身を取つたのが効いたな。

突つ込んだ場所の内部、小奇麗な内装から見るに、レストランか。進入経路は盛大に割れた窓ガラスが物語つている。損壊の請求は国に提出してくれ。

しかし、ここまで酷い有様だと奥の手なんて言つてられないな。正直、右腕が使えない今の状態で、天人相手に銃器で戦うのは厳しい。使えたとしても威力の低い拳銃、短機関銃が精々。それならば尻尾巻いて逃げ出した方が懸命だ。

「あれを、使うしかないか」

使うのは久方振りである。舞佳の双剣のように拗ねてたりしなければ良いが。

痛む体を酷使し、歯を食い縛る。想像するは一本の剣。純白の光で包まれた、守る為の剣。

「来なさい、神葬！ 分け隔てなく包み込む風をここに！」

あたしを庇つて吹き飛ばされたレッヂ。不幸中の幸いが、攻撃を繰り出したのは中位ではなく下位の天人。あの光で防いでいた様だし、中位からの攻撃じゃない分、まだ傷は浅いだろう。

直ぐに駆け付けたいが、それを邪魔する様に動く4体の天人。外見から判断出来る限り、この内2体は中位。軍隊に配属された優秀な神葬具使いでも中位1体と互角に戦うのが精々。それが2体に合わせて下位が2体。

武器を出せたにも関わらず、時間稼ぎすら怪しく、もはや5分持ちずに蒸発させられる状況。

（何なのよー天人って知能が無い筈じゃないの！？）

天人学から学んだ知識では、天人は上官に指示されて動く木偶人形当然の筈。なのに、今は知恵を得たかのように、あたしを取り囲

む4体の天人。

その他にも十数体に及ぶ天人が出現陣から現れ、逃げ惑う人々に猛威を振るつてゐる。今こうして攻めあぐねてる間にも、何人の命が散らされる。

其処彼処が血で染まり、数分前まで賑わっていた都内の町並みが地獄絵図と化していた。

下位が得物で女子供問わず人間を八つ裂きにし、中位が圧倒的な火力で建物を破壊。何人の通行人がその下敷きに。今この瞬間だけで、何十人の命が奪われているのだろうか。

(アテンド解放しても……この状況だと……)

あたしを囲んでいる4体が、様子見をしているのか動かない。こちらから攻めたいが、解放して暴れ回つてゐる最中に力尽きた、なんて目も当たられない。それも、中位が2体いる状況で。解放を行つて戦つたとしても、形振り構わず真正面からぶつかれば、こちらが粉々になる。

囲んでいる全部が全部、前衛型なのも絶望的だ。中位2体に至つては、両方が盾持ち。

「どうすれば……」

躊躇していた最中、遠目で見えた光景。天人が逃げ惑う1人の子供を捕まえ、得物の剣で首を斬り落とした、それを見て自制の緒が外れる。

(構わない。力尽くる……上等。何があつても、こいつ等は、こいつ等だけは許さない。あたしの大切な人達を殺して、また他の命を目の前で奪う……こいつ等だけは……ッ!)

屈んで脚鎧に触れて、迷わず制限を外そうとした時、あたしを囲んでいた1体の下位天人が音を立てて崩れ落ちる。中位の天人だけに注意を払っていたのもあって、その突然の大音に驚き脚鎧から手を離すと、そちらへ視線を移す。

「はは……」うしてお前を守るのは、一度目だな

右腕を力無く垂らし、倒れ込んだ天人を踏み付ける男。着ている黒コートは、下の服も同様に右腕部分が無くなり、他の箇所も酷く裂け千切れている。

額から血を垂れ流しながら動いている姿は、狂氣の沙汰。

そして健在な左手が握っている武器。石で造られたかに見える刀身に、魅せる為に施された装飾。最も目を引くのが、その剣に纏わり付く純白の淡い光。レッヂが解放の時や、素手で敵を攻撃する際に使用していた光が、その武器を包み込んでいる。

レッヂは傷だらけの姿で、得物を構える天人達から守るように、素早くあたしの前へ立つ。

倒れそうで、体の至る所から血を流しながら、それでも頼もしく映る背中は、光の剣のせいだろうか。それとも、あたしの瞳が、レッヂをそう見せてるんだろうか。

> 28589 — 213 <

「守つてやるよ、何度でもな」

22『戦つ意味、光の剣』【挿し絵】（後書き）

最新話の改正版です。

随分修正入れた……え、ちょっとだけだろ?
見て頂いたらわかりますよ、ええ。なんか主人公カツコよくなつて
ますよ、ええ。

23『ただ1人の為に』

「白様が何所にも見当たりませんの……」

『お嬢様、気を落とさず！旦那様は絶対に見付かるでござるよー。』

わたし、匂坂 舞佳は大変後悔している。

学年が2年に上がり、相部屋の生徒が天人の襲撃で命を散らした。1人になつてから相部屋生がいる心地の良さが分かり、転入生が同じ部屋になると聞いた時は少しばかり心が踊つた物だが。その時自分に今の状況を提示してやりたい。

隈が浮かび、半ば強制的に寝床から引き摺り出されたのが昼過ぎ。夜が明けるまで続けられた惚氣話と、休日の氣だるさが相まって、今直ぐに布団へ逆戻りしたい気分。

それに加えて、わたしの前では、自分の神葬具の蒼炎を意識しているのだろう青いドレスを着込んだ女子生徒が、場違いに女子寮を闊歩している。頭には饅頭と見紛う猫を乗せ、腕には毛色が青い犬を抱いて。

「落ち着きなさい、エリーゼ。優雅な白様の事です。もしやカフェで珈琲を嗜まれているなんて事も」

仕舞いには自分に助言をし始める英國のお嬢様。何かを間違つても、こつうは成りたくないな。注目の的になつてゐる事に気付け。周りから同一視されるのを避ける為、悪足掻きの視線逸らし。ダメだ、どんな行為で誤魔化そうとも、このお嬢様に引き連れられてゐる構図は間違いなく同じ人種と勘違いされる。違うぞ、わたしは一般人だ。少しばかり背が小さいだけで只の一般生徒なんだ。

「大剣使い、この学園にカフェは御座います？」

「舞佳つて言つてんだろうが！いい加減名前覚えろよ、白もお前も！何だ、名前呼ばないのが流行つてるのか！？」

「白様以外の方の名前を覚えるのは苦手ですの」

「自信持つて言う事じやねえよ！？」

神葬具使いの強い奴等つて、もしや性格捻じ曲がった奴ばかりなのだろうか。そして、この考えが的中していたら変人が世界を守る要。絶望的過ぎて涙すら出ない。出るとしたら乾き切つた笑いのみ。自分の運命に苦笑しようとした時、寮の出口から、こちらに走り寄つて来る人影。エリーゼはそれに気付かずに、まだ独り言を続けている。こうはなるまい。

「あれは……灯火か」

白経由で知り合つた控えめな後輩。何でだか知らないが、休日に学園服を身に着けている。

正直、灯火のような大人しい子が全速力で疾走するとは思えないんだが。ほら、下着とか少しだけ見えたし。わたしには無い物が豪快に揺れてるし。エリーゼといい、お前といい、わたしに対する当て付けか。

「せん、ぱい……た、助けて下さい！白と、白と楓が……！」

「…………白様がどうかなさいました？」

お前は白の名前に反応して突然雰囲気を引き締めるの止めろ。普通に驚くから。

灯火が息切れと焦りで上手く説明出来ていらない時に、校内に流れる放送の鐘。休日に、しかもこの音色の鐘は、何所かに天人があ出現したつて事に違いない。随分頻度が短いな。学園襲撃から3日経つてないぞ。

『現在、都内の駅最寄で天人の襲撃が起きています。3年部、及び出撃可能な教員は速やかに戦闘地へ急行して下さい』

神葬具を出せたは良いが、結構厄介だな、これは。

背後には、中位天人の相手は到底任せられない金髪を庇い、相手は中位2体と下位1体の天人。

俺は右腕が使い物にならず、それに加えて体中が現在進行形で悲鳴を上げ続けている。本音を漏らすと、友軍到着まで何所かに引き籠つていて程の逆境。痛みで直ぐにでも気が遠退きそうだが、それを上回る激痛がそれを許してくれない。

ここまで追い詰められたのは久々だな。アメリカで大統領が訪れていた基地を背に、最終防衛線引いた時以来かも知れん。今は大統領でも基地でもなく、好き好んで1人の小生意気な女子を守つていいのだから、自分の酔狂さに呆れ果てる。

(まあ、思った通りに何体か釣れてるし……犠牲者は減るか)

紅い翼を持つ西洋鎧達が、獲物の臭いを嗅ぎ付けたように、続々と目標を変更。一般人に向けられていた無数の殺意が、肌に突き刺さる。

視界に映る限り、中位は目の前のを合わせて5体。早急に出現陣を破壊しなければ、数が増える事は火を見るよりも明らか。中位の倍はいるであろう下位も野放しとはいかない。中位の方がビルを倒壊させたりと派手に動くが、殺しを行っている大半は下位。血塗られた武器がそれを証明している。

結論を下すと、求められるのは自衛隊が到着するまでの最低限の防衛。被害を最小限に食い止める事。

「れ、レッヂ！アンタの腕！」

「動けるなら自分の心配しておけ」

俺の腕を破損させた張本人であるう槍持ちの下位が、大振りで難ぎを繰り出す。中位の1体もそれに合わせ、獲物の大斧を片手で軽々と振り抜く。一応とは言え、鎧に包まれた体は女性の体格の天人だが、華奢な体付きから放たれる攻撃は鉄の豪腕に等しい。

連携攻撃、予想の範疇ではあるが、そう易々と受け切れる物ではない。現存する神葬具の中で最強の盾と称される世界3位さえ、中位2体の攻撃を何とか防ぎ切れる程度。

人間を救う武器と呼ばれても、結局は他者から奪った物。況してや、それは元々天上の代物。扱い切れないのも無理は無い。

「レッヂ、避けて！避けなさいよ！あたしなんかを庇うなあ！」

手に握った剣を構えると、背後に庇っている楓が悲鳴にも似た声を上げる。

今から俺が避けた所で、中位と下位の攻撃が、楓と後方の人間に当たってしまう。もし万一、楓が避けられたとしても、中位の攻撃の衝撃波は、ここで防ぎ切らなければならない。

「目を開けてしっかり見てるよ、楓」

石色の刀身に淡い光が絡み付く。剣に施された装飾が、咆哮するかのように鈍く輝く。

確かに俺の神葬具の外見は盾系じゃない。それ専門か、石で造形された色の刀身は、一見心許ない。光で覆われて、やつと一人前の武器つて感じだ。

だが、この剣は俺に光を与えてくれる。世界最強なんて称されて

るのも、大半がこいつの御陰だ。

「これが、世界最強って言われた奴の力だ」

襲い来る攻撃に真正面から剣を振るう。

見せなればいけない。楓に、一般人に。飾りの無い世界最強の力を。天人に対抗する希望を消させない為に。

唖然とした。

逃げて行く大勢の人々と、あたしを庇う為に前に立つたレッヂが、中位と下位の天人の攻撃を一辺に受け止めている。

「う、うそ……」

驚きで腰が抜け掛ける。神葬具の強化が無ければ、完璧に座り込んでいた事だろう。

何所からどう見ても、レッヂの武器は攻撃特化の剣。天人の、それも中位の攻撃なんて普通に考えれば受け切れる訳がない。その上、レッヂは片腕を負傷していて、持っている剣の外見は、どんなに言い繕つても頼りがいのある物とは言えない。

しかし、現実はこうだ。あたしの服を吹き飛ばしたり、天人の鎧を素手で殴つていた際に手を覆つっていた純白の光が、中位と下位の攻撃を塞き止めている。剣の外見と反した力は、まるで岩で出来た要塞を思わせた。

「楓、人を避難させろ！」

呆然としていた時、あたしに活を入れるレッヂの声が響く。

驚きで体を少しばかり竦ませたが、直ぐに踏ん張つて立ち上がり、後方の一般人の群集と、天人の武器を1人で防ぐレッヂに視線が行き来する。まるで、流れ込む大洪水を前に決壊し掛けのダムを思わせる、その姿に迷いが止まらない。

「あ、アンタは……」

「守るつて約束したろ。後ろは考えるな」

「無茶よ！ いっぱいいるじゃない！ その2体だけじゃないのよ！？」

レッヂが防いでるのは何十の内の2体に過ぎない。確かに中位の攻撃も混ざっているが、それを除いても中位は何体いるのか想像が付かない。もし中位が2体一辺に攻撃して来たら、幾ら世界最強って言われてるレッヂだつて、

「アテンド
解放」

あたしの考えを読み取ったように、レッヂの口から放たれる言葉。あたしが使おうとして、彼の横入りで遮られた、それをレッヂが唱える。

天人の暴風を彷彿とさせる攻撃を受け止めている剣の刀身が、突然霧の如く焼き消える。握りと鍔のみを残した剣。諸刃の剣。片腕を力無く垂らし、強大な力に向かつて行くレッヂの姿は、これ以上ない程、その表現が合致した。

起きた事実のみを語ると自害覚悟にも思えるが、次の瞬間、また周囲を畠然とさせる光景。

「I O I O I a s C i O !」

消えた刀身を光が再構成。それを上段から一気に振り下ろし、折角創り上げた光の壁を、創った本人が自ら手に掛けた。それも、中

位や下位の天人を巻き込みつつ。今の攻撃だけでも2体は沈んだに違いない。

壁を構成していた光の粒子が飛び散り、幻想的な空間をか持ち出します。

一見、レッヂは何体もの天人に囲まれて絶望的な状況なのに、それを全く感じさせない。むしろ、取り巻いている天人の方が危険な気さえする。

圧倒的だ。普段の雰囲気からは想像出来ないほどの気迫が、レッヂを覆い尽くしている。

世界最強……実力の次元が違う。あたし達だと中位1体相手にするのが精一杯。なのに、あの男は何十の数の天人に臆する事無く、正面を見据えている。神葬具の力だけじゃない。アイツは、恐怖に真っ向から対抗し続けている。

「絶対に、絶対に戻つて来るから！し、死んだら許さないわよ！」

悔しいけど、今のあたしじゃ手助けにすら成れない。だったら、今あたしに出来る事をする。

唇を噛み締めると、神葬具に力を込めて、全速力で後方へ走り出す。そこには、目の前の出来事に呆然として、バカみたいに突っ立っている一般市民達。焦る気持ちを抑え、大勢の人に向かつて声を上げる。

「今直ぐ遠くに逃げなさい！駅沿いに向かえば軍が来てるから！早く！」

「……行つたか」

既に周りは天人で囲まれ、逃亡は許されない。洒落にならない状況だが、何故か安堵の息が漏れる。渋っていた楓が諦めて戦線離脱してくれた事に、これ程の安心があるとは。何時の間にか、アイツを仲間と認識していたんだろうか。

手にある確かな重みを握り締め、周囲を見渡す。

（敵だらけ……か。まあ、上手くいったといえば、そうに違いないが）

このままの状況じゃ、軽くあの世行き確定だな。軍の到着は当然にしない方がマシだろう。

1人で約20体を相手にしながら、生き残れ、か。随分と無茶を言つてくれる。激痛を忘れ、思わず苦笑が漏れた。直ぐ後に打撲したであろう脇腹の骨が痛む。笑う事も許されないのか。

剣を構える。解放している以上、長引かせたらこちらが不利だ。全力で暴れて、全力で敵に損害を与えてやろう。

取り囲んでいた敵が一斉に獲物を構えて、翼を羽ばたかせる。

「良いぜ、来いよ。全部纏めて相手してや

」

俺の言葉を待たず、突如として数体の天人の体が蒼く炎上。遂に俺も焼きが回ったか。有り得ない幻覚がこうも鮮明に映るとは。よもや走馬灯が見えるとは、記憶喪失でも長生きする物だ。

「白様、わたくしを置いて死地に旅立つなんて、あんまりですわ。行く時は是非わたくしも御連れになつて下さい」

23『ただ1人の為に』（後書き）

遅くなつて申し訳ない！忙しい事が多く、こんな事になつてしましました。

次回はもっと早めに挙げられると思います。

24『蒼炎の援軍』

燃え盛る絶対零度の中から現れる人影。豊満な体の線を強調する蒼炎と同色のライダースーツに、髪や瞳で激しく燃え上がる猛火。その炎の勢いと反対に、彼女の周囲は徐々に凍り付いていく。両手に灯された蒼い炎が揺れ、蛇を思わせる動きで彼女の腕に絡みつく。

「わたくしの愛しの方に手を出すなんて、哀れな天使ですわね」

攻撃目標を俺に絞っていた天人達が、一斉にエリーゼへ向き直る。敵意を感じ取っているのか、本能がそうさせているのか、天人じやない俺には検討も付かないが。

「自身の行いに悔みながら、もがき苦しんで御逝きなさい

アテンド
解放

掲げられた右腕。伝うように蒼炎が登つて行き、右手に到達すると火花が上がる。現れるのは、普段使用している刀の形状ではなく通常の物よりも大分大柄な作りの弓と、左手には指の間に挟んだ3本の矢。そのどちらもが炎で形成されていて、主の手の中で業火を滾らせる。獲物を求めるように揺れる炎の様は、獰猛な狩人その物。

間違えて敵と一緒に町を焼き尽くしてしまいそうだ。見た目だけなら、どちらが悪者か判断付かないな。

「灯火！あんま先に行くなって！」

修羅の如き面持ちで真っ向から大量の天人と睨み合つエリーゼと、

その背後から俺の方へ走つて来る一人組。まさかエリーゼと一緒に応援が駆けつけるとは、嬉しい誤算だ。

武器無しで、こちらに駆け寄つて来る灯火と、その後ろを護衛のよう追う舞佳。

神葬具を出していなければ正しい判断。エリーゼが天人を派手に引き付けている今なら、下手に神葬具を出さないで突つ切つた方が天人に察知され難い。その代わりに、無防備という欠点もあるが。

「ちつ、気付きやがったか！」

群れの中の数体が無防備な舞佳と灯火を視界に捉え、得物を構えるが、その大半がエリーゼの射る炎の矢で接近する事すら叶わない。天人も気を取られていたせいか矢が直撃し、鉄壁と言われる鎧に身を包んだ中位でさえも、躊躇事に専念する始末。

しかし、その中に味方を盾にして2人に向かい滑空する1体の下位天人。

舞佳が焦りつつも神葬具を展開して応戦しようとした時、武器を手に突撃する天人の体が、あらぬ方向へ吹き飛ぶ。衝撃を受けて建物に減り込んでいる状態を見る限り、大砲玉をぶつけた、と言わんばかりの弾かれ方である。

『舞佳殿、大丈夫でござるか』

『この姿になるのも久し振りでしゅね。まだ眠いでしゅけど』

その大砲玉の2匹が舞佳の前へ現れ、普段とは違う姿を見せる。蒼炎を全身に纏う猛々しい狼と、しなやかな小さい体に炎の灯された尻尾を持つ子猫。普段の餅形状の姿からは想像も付かないが、その実、戦闘用に変身したダイゴロウとケルビンである。2匹とも体が神葬具で構成されている生き物だし、概念に囚われてはいけない。

前にエリーゼが言つてた事だが、この2匹の変身は精神力、体力共に莫大に消費するらしい。その上、エリーゼ自身も解放しているのを加えると、普通の神葬具使いの消耗の比では表せない。

だからこそ、緊急時以外は休眠形態な訳だが。この形態の2匹を見るのは、飼い主にアメリカで常時同行されていたと言つても良い俺でさえ久方振りだ。

「白、大丈夫！？」

周りを気にせず大慌てで近寄つて来た灯火。傍目から見たら戦場を水鉄砲片手に闊歩する程危なつかしいな。

無事に灯火が辿り着けたのを見届けて、舞佳が進路を反転。天人の群れに視線を向け、右手を真横に突き出す。何も無い宙を力強く掴む動作をすると、その手に現れる身の丈以上の大剣。遠くまで響く烈震が、呼び出された神葬具の重量を物語ついている。灯火や楓の神葬具を前提に考えると、確実に女子が扱う系統の武器ではないな。

「よし、久し振りに暴れ回るかー！こっちは寝不足で鬱憤溜まってるんだ！」

神葬具を携え、天人の群に特攻する舞佳を見て思うのだが、解放したエリーゼ一人で全部片付けてしまいそうな気もする。天人を蚊トンボと錯覚しそうなくらいに呆氣なく射落としてるし。

『行くぞケルビン！助太刀するでござる！』

『ふあああ……いい加減その熱血性格どうにかした方がいいと思いましゅよ』

飼い主を助けずに舞佳の後を追う凸凹の2匹。

どちらかと言うと無双しているエリーゼよりも、危なつかしい舞

佳を子守してくれていた方がこっちとしても助かるがな。

「まあまあつてとこだな……結構助かつたぜ」

「これ、骨折てる……こっちの傷も酷いよ」

正直死ぬほど痛いが、感覚が麻痺して堪えられている。気を失いたいのに痛みで意識が戻されると、拷問にも似た循環だな。血だけで折れた方の腕を診察していた灯火が、心配げにこちらを覗き込んで来る。

俺は溜め息を吐くと、展開していた剣の神葬具を手の中から消す。舞佳や灯火だけならば、まだ戦闘を続行しなければならないが、エリーゼがいる以上、それも必要ないだろう。腕を骨折して、尚且つ体を負傷している今の状態では、足手纏いになり兼ねない。

「白……ち、ちょっとごめんね」

少しの間迷う様な拳動をしていた灯火が、座り込んでいる俺に謝りながら、いきなり抱き付いて来る。不可抗力で当たる柔らかな感触に理由を考えずに反射で、役得だな、と思ってしまう男の性。

前にも嗅いだ桃に近い優しい香りが、ポニー テールで露わになっている綺麗なうなじから漂う。

「お、おい灯火！お前、血が着くぞ！」

頭や体中の傷から流れた血が、服にも染み付いているというのに、抱き付いたら正に赤インクの版画だ。

「関係ないよ！服なんかより、白の体の方が大事に決まってる……むう、ううッ！……し、白、ちょっと立てる？僕だけだと流石に……」

…

少し体を密着させていただけで、灯火の制服が血色に彩られ掛けている。

なるほど、体に腕を回して力んでいるのは立たせようとした為か。確かに、エリーゼと舞佳が奮闘しているからといって、この場が安全だとは限らない。何時天人に捕捉されるか分からるのは危険だ。休息を取り、痛みが徐々に湧き上がって来た体に鞭打ち、灯火の腰に片腕を回す。

「ひゃん！？ ……ち、違うよ！？ 今のはそのお……お、お尻触られて驚いちゃつただけで、い、嫌つて事じやないからね……？」

頬を紅くした灯火の様子はとても可愛らしい。

背景で小さな戦争が勃発していなければ、事故で触つてしまつた感触と合わせて幸せになれそうだ。

『お嬢様、旦那様は腕の骨一本持つて行かれているでござる』

脳内に伝わる従者からの報告で、更に炎を滾らせる。火の矢は無限に補充され、敵の接近を許さない。

真紅の翼で浮遊する敵を焦点に捉え、引き絞った矢先。手の中のこれが本物の弓矢ならば、わたくしの怒りで燃え尽きている事でしょう。蒼炎で形作られた弓は青々と燃え盛り、矢は仇の対象を求める疼く。

「白様の腕の分……貴方達全て屠つても対価には足りませんわ」

武器を手に突進を仕掛けて来た天人達に対し、一斉に放たれた3

本の矢。敵の数からしてみれば心細い事この上ない。襲い来る天人の内3体を落とせたとしても、残りの者が我先にと押し寄せる。

「仲間がやられた事から、少しは学んだ方が宜しくてよ」

無数の狂気が降り注ぐ中、腕を空高く突き上げて指を鳴らす。高らかに指の音が響いた次の瞬間、天人の群れの前で3本の蒼炎の矢が無数に分裂。散弾の如くばら撒かれた炎は、決して避けられない雨のように天人達へ降り注ぐ。

流石に中位の天人は身を翻して装備中の盾を用い全てを防ぎ切るが、攻撃態勢のままだつた下位達は瞬く間に蒼い火花の餌食となる。強固な鎧と真紅の翼に蒼炎が絡み付き、絵の具のよつに色を侵食していく。

兎に角、白様を無事に安全な場所まで運んで頂かなくては。その為なら、この全ての敵すら退けよう。

「見ていて下さい白様。これが貴方の為に咲かせる、蒼の火花ですわ」

蒼炎が纏わり付いた自慢のプラチナブロンドを掬い、蒼く染まつた視界で撃ち漏らしを見据える。

正直、ダイゴロウとケルビンの2匹を覚醒させて、自分も解放しては、かなりの負担。白様の為ならば四肢を失おうと構わないが、白様が傷付いては意味がない。

(これは、本当に口付けくらい要求しなくては割りに合いませんわ
(ね)

対価の見返りは白様が同意したらが基本ですけど。この戦闘を押し切つたら、或いは白様に許可して頂けるかも知れないですわ。ふ

ふ、戦闘欲も満たせて、正に一石二魚……鳥だつたかしら。

攻撃は最大の防御、よく考えられた言葉だ。同室生の戦い方を見ていて、改めてそう思う。

攻め込まれない程、激しい猛攻を掛ければ相手も退いて行くだろう。防戦一方になるより勢力戦と割り切る方が妥協も憂いもない。2個目の発光する不気味な円陣を叩き割り、出現陣は残り2つ。大剣を一振りする負担から、疲れの息を吐こうとした時、ビルのガラスに映り込む天人の姿。

「あぶなッ！影打ちなんて使うな！」

背後からの斧の振り下ろしを間一髪で躱すと、振り向き際に大剣を大振りで薙ぐ。下位の天人が受け止めた斧ごと吹き飛ぶ。学園を襲撃された時のように数で押されているなら別だが、下位と一対一ならば負ける気がしない。他の天人をエリーゼが引き付けてくれているのもあって、負傷も最小限に留められている。

「でも被害はでかいな……何人死んだよ、これ」

付近にある建物には、亀裂が入っている物もあれば、豆腐のように斜めに斬られた物もある。

倒壊した破片の下敷きになり、ほぼ即死の死体達。腕を切り落とされ、泣き叫びながら死んだ男。形が残らぬほど滅多刺しにされ死んだ赤子の手を握る、首無しの死体。池が生成されそうなくらい、夥^{おびただ}しい量の血。

もう少し早く到着していれば、助かる命もあったのに。

『舞佳殿、それでも助かった命はあるでござるよ。今は、悪の元凶を全て屠るのが先決でござる』

子犬形態時の姿とは別物に変貌したダイゴロウが、わたしの脚を前足で叩く。まさかこの肉球で励ましと激を飛ばしているのだろうか。

『姫しゃまー、戦車がきましたよー。軍の部隊みたいでしゅー』
「まるで亀ですね。役立たずです」と。もつ半分は片付けましたわよ』

細身になったケルビンを頭に乗せたエリーゼが、何時の間にやら隣に来ていた。気配を消すな、口から心臓が飛び出そうにならうり驚いたぞ。

敵の出現陣の大半は壊したし、戦闘は終了間際。
只、軍に呆れながら溜め息を吐いているエリーゼに心から言つた
い事があるんだ。きっとこの状況を見たら軍の奴等も同じ事を言つ
に違ひない。

「お前が強過ぎるんだよ……」

24『蒼炎の援軍』（後書き）

執筆速度田に見えて落ちたなあ……確實に漫る事じゃないですね、これ。

戦闘話の描写がなんとも不器用で、自分でも気をつけているんですが、何度も使つてしまつ言葉が多いです。プロの人って凄いですね、なんであんな文が出来るのか…マジでスペクトっす。

後書きは前作までアホみたいに長いの書いてたんで神葬具では自重している面があります。

嘘です、最新話書き終わつて疲れ果ててているだけです。

最近メールで更新の遅さで心配と応援を頂き、嬉しい半分申し訳なさ半分、……戦闘話はこれで終わりなので、更新速度は上がると思います。

コメティの執筆の速さは伊達じゃない。

というわけで、今日はここまで。次回でお会い出来る事を願っています。

25 『白の花畠、金色の髪の少女』

辺り一面を埋め尽くすほど、乳白色の花弁を持つ花が咲き乱れている。白色の絵の具で塗り潰されたとしか形容出来ない光景に、息を呑む。

宙を舞う花弁が顔の擦れ擦れを通過し、甘い香りが漂う。薄い雲から差し込む日差しも緩やかで、綺麗に咲き誇る花の恵みになつてゐる。不思議とここは、気温に左右されず、一年中同じ光景を保ち続けている様に思えた。

『カレン、どうしてここに来たんだ?』

体の融通が利かない。思考だけが動き、体や視界の動きは支配されている。

俺は、そう、白=レッヂ。カレンなんて名前の奴は知らないし、こんな場所には心当たりも何も無い。口を動かし言葉を発している、この人物は誰なのだろうか。見れば身に着けている服装も、嫌に古臭い印象を受ける。

そして、花の野原に座っている、俺の前に立つ人物。視界が捉えた、その姿に息を呑む。

『また来ちゃいけない、なんて聞いてなかつたけど?』

『前の時も、歓迎はしないがな。大体、どうやって君がここに来れていいるのか不思議だよ』

この体の持ち主がカレンと呼んでいる人物。

茶を主体にした膝まで覆う地味なチュニックに、花畠と同色の綺麗なエプロン。長く、風に揺れる金色の髪。腰に手を当てて、こちらを覗き込む仕草。吊り上がり気味の、強い意志を感じさせる瞳。

エメラルドグリーンの瞳と服装だけを除けば、全てが俺の知っている少女と一致する。

『簡単だけど?』この景色を思い浮かべて、また行きたいなって思つたら』

『普通はそんな事ではここに来れないんだがね』

ここ、と言うのは花畠を指しているのだろうか。大体、景色を思い浮かべると来れる場所つて何なんだ。俺はこんな景色、記憶に全然無いんだが。

カレン、そう呼ばれている少女は微笑みつつ、俺の隣へ腰掛ける。近くで見ると更に似ているな。瓜二つとは正にこの事だ。同じ服装で、アイツと並んだら見分ける自信がない。複製かと言いたくなほり似ている一人は、何か関係があるのか。いや、俺の夢ならば楓が出て來ても不思議じゃないが。

『良いじゃない、…………トと、また会いたかったんだから』

変な夢を見た気がする。

軽い眩暈を覚えながら視界を動かすと、周囲には乳白色に染め上げられていた光景とは一転して、薬臭い無機質な場所。見た感じからして、医療関係の所だろうか。

掛けられている布団を退かしつつ、上半身を起こすと、鈍い頭痛の刺激で最悪の目覚ましの完成。痛みを訴えている体を見ると、包帯で巻き上げられた我が身。巻かれた包帯の所々に赤い染みがあり、このまま棺桶に収納されていても何ら不思議はない。

「あら、起きた?」

上手く状況が把握し切れていない時に、更に厄介な人物の声。

見ると、俺が寝ているベッドの横で座り優雅に小説を読んでいた銀髪の少女が、袴を挟みながら俺に視線を向けている。黒タイツに包まれた脚を組み直す動作で、黒羽だと認識する俺は、息子としてどうなんだろう。

意識が朦朧としている時に義母を見ると小学生にしか見えないな。黒羽自身に言うと地獄を体験する事になるから絶対に口には出さないが。

「黒羽……」こは何所だ？」

「学園の緊急治療室。まさか春に増築して直ぐに使つ生徒が出るとは思わなかつた」

緊急治療室なんて物まであるのか、この学園。お世話になりたくない場所だが、至れり尽くせりだ。

つていうか義母よ、お前が爪楊枝で刺して食している兎型の林檎つて、俺の御見舞いの品ではなかろうか。こいつが自分で果物買つて食べる事なんて滅多にないし。ほら、そんな事言つてると一匹がまた犠牲になる。息子の見舞いの品を無断で食べる母親つて。

「あ、これ? 買つて来たんだけど、白が三日も寝たきりだったから食べといた。果物は足が早い」

その起床した息子の前で食べ続けるか。無駄に腐らせるよりは万倍良いが、正に鬼畜の所業。

「今日は三日か……中々長かつたな」

「あの剣、使つたでしょ? それと解放も。倒れるに決まつて」

黒羽の言葉が正論過ぎて、反論の余地がない。

緊急事態だから仕方なかつた、とは言え、あの剣を出したままの解放は我ながら馬鹿だつたな。もつと冷静な状態であれば、最悪剣を出したとしても解放は行わなかつただろう。もう後の祭りだが。

銃器ではない 光りで覆われた剣

俺の本当の神葬具は、防御特化の剣で、体力と精神力を桁違いに消費する。比喩抜きに舞佳の解放の5倍は消耗しているに違いない。下位と中位の天人の攻撃を一遍に防ぎ切るとは言え、代償が寝たきり。

原理は分からぬが、創造可能な銃器を常時使用しているのは、この為である。

銃器の方が、見返りは少ないが対価も少なくて済む。この場合、俺は体術も織り交ぜて戦闘に挑む事になるが、戦闘中に気を失うよりは遙かに良い。

多分、俺の神葬具はエリーゼと同じ中位との刷り込みで創られた神葬具だ。記憶を失う前に刷り込みを行つていたから確かではないが、下位の神葬具に、ここまで対価を求める物はない。舞佳の大剣も、対価で言つたら相当だとは思うが。

何故か逃げるのを躊躇う楓を見て、咄嗟に解放を唱えたんだよな。我ながら謎だが、あれで戦況が持ち直したのも事実。

万が一あの状況で対物ライフルを創造したとしても、片手ではどうにもならなかつた。片手で射撃可能な銃器の威力なんて高が知れている。拳銃を創造していたと仮定すれば、俺は死んでいるに違いない。

そこでふと、一番被害が甚大な腕の部分を思い出す。あの激痛からして、複雑骨折でも違和感がないが、

「治つてる……？」

あらん方向へ曲っていた腕が、本来の位置を保っている。それ処か、動かす事も可能。

神経が生きている事は確認していたが、骨折していなかつた、は確實にない。記憶に残っている限りでは、あの場で楓を庇い、出現陣から現れた下位の槍の穂先で骨は折れた筈。無論、人間の俺に再生能力なんて物はない。

体中に刻まれた傷跡も、内部的な痛みはあれど、外傷は跡形も無く消失。これが人間の治癒能力由来ならば、自分の事ながら氣味が悪い。

「結構大変だつた。複雑骨折の右腕に、打ち身、擦り傷、切り傷、打撲、おまけに肋骨2本にヒビ。それに加えて三日間眠つたままになるほどの過労。流石に肝を冷やした」

「ぐ、黒羽が手術したのか……？」

その外見で医師免許は取れるのか疑問だ。いや、試験を受けければ医学部通りそうではあるけども。患者との面談では先ず初めに年齢確認から始まるに違いない。

俺の問いに溜め息を吐く黒羽。三角口と常時半瞑の瞳が、呆れていますと顔に表している。

そして、証拠を提示するように挙げられた右手。その手の中指に嵌められた漆黒の指輪。真ん中に、門の形の装飾があり、それは封印されているかのように鎖で雁字搦め。趣味で身に着けていたるから随分と悪趣味。

「もしわたしが手術出来たとして、あんな傷、一、二日で完治する筈ないでしょ。これの力」

説明しようとして忘れていたな。黒羽の神葬具、つまり彼女の手中に嵌められている指輪の事を。

俺の銃器を創り出せる光の剣も、エリーゼの蒼炎もかなり個性的ではあるが、黒羽の神葬具は異端と呼んでも差し支えない物だ。普通ならば戦闘用の代物である神葬具が、全く違う機能を持つしている。

黒羽に聞いた限りだと、先ず初めに想像召喚。自分で想像した物を具現化する能力。これは学園の迷宮探索に使われている、練習用天人を創り出している。他にも様々な事が実行可能らしいが、挙げると切りがない。

次に、治癒。神葬具は元々、所有者の傷や体調の回復を少ししかかり早める機能があるが、それとは全く違う。特筆すべき箇所は他者の傷を治せる点。ここだけで元来の神葬具とは別物と言える。俺以外に使用している所を見た事は無いのだが。

前者、後者を含めて、黒羽の神葬具は一般的に呼ばれる魔法、といふ物が使用可能なのだ。

神葬具って元々は天人の物だし、黒羽の指輪も有り得なくはないとは思うが、魔法を使う天人なんて見た事無いんだよな。もしかして、天人が占領した地域が雪色に染まるのと何か関係があるんだろうか。

「これに興味があるの？」

「いや、その神葬具も謎が多いと思ってな。普通の物とかなり違うだろ」

「アメリカに行く前から知ってるでしょ。ああ、でも回復以外は見せてないか。機会も無かつたし」

指揮系統管理する黒羽が戦闘する機会なんて皆無だろうし、当然か。意気揚々と戦闘に参加する黒羽の姿なんて思い浮かばない。後方で不気味な笑みを浮かべて戦略練つてる方が合っているぞ。本人もそこは自覚しているだろう。

「まあ、息子の体に何も無くて良かつた。わたし、これから仕事があるから、ゆっくり休んでおきなさい」

実の処、天人の事や剣の事について聞きたい事が山程あるんだが、黒羽も忙しそうだし、体が全快してからで良いか。あまり時間を取らすのも悪いし、何より睡眠欲が大群で押し寄せて来ている。もう直ぐ城門が破られてしまいそうだ。

林檎の余りを近くのテーブルへ置き、「お大事に」と残して部屋を後にする黒羽。

「さひつと……寝るかな」

黒羽を見送つて、後は寝るだけ。

体の回復に努めようとした時、部屋の外、廊下で騒がしく走る音が聞こえて来る。これが本当の病院ならば看護婦に叩き出されそうだ。確実に全力疾走だろ。

「白様！ 貴方のエリーゼ、やつと来る事が出来ましたわ！」
「おいエリーゼ！ まだホームルーム終わって無いのに飛び出すな！
わたしが教師に怒られた！」

まだ安静に就寝出来ないのか。しかもこの二人は不味い。まだ楓と灯火ならば救いがあつたのに、エリーゼと舞佳なんて、絶対に眠れないじゃないか。

しかも、まだ俺が目を覚ました事を知らないのに、あのテンション。俺が起きていると知つたら、どんな風になるのやら。いつその事、寝た振りに移行するか。その方が安全な気がする。

25『白の花畠、金色の髪の少女』（後書き）

前の加筆版です。ちと分かり難い箇所があつたので修正。
説明長いなあと思いつつもそこは弄くれないです……申し訳ない
です。

次回はもつと早く投稿できるといなあ、と思つてたり。

26『あたふただらけの深夜看護』

(落ち着くのよ、小波 楓！あたしは見舞いに行くだけ！そう、助けて貰つた御礼も出来てないし！)

三日。あの事件から、レッヂが眠り続けている日数。
毎日、放課後になれば脚を運んでいるのに、病室へ続く渡り廊下で絶対に右往左往する。自分を納得させる為の言い訳探し、なんて思われるだろうけど、あたし自身は必死なのだ。

病室に入つたらレッヂが目を覚ましていて、あの顔で微笑んで来て、なんて事を考えると自分で呆れる程落ち着きが無くなる。あの事件で助けて貰つてから、ずっとこんな調子で落ち着かない。

毎日通っているのが誰かに知られたりしたら恥ずかしい、なんて理由で真夜中に泥棒のように息を潜めているあたしは、我ながら何をしたいんだろう。潜入任務並みに辺りを警戒している自分に虚しさを覚えた。だからと言って真正面から堂々と入室なんて恥ずかしくて出来ないんだけど。

(眠い……なんか廊下で寝れそう)

夜中に病室に忍び込み、寝込んだままのレッヂを介抱して、そのまま病室で寝入つてしまつ。早朝、寝惚けている頭を無理矢理覚醒させて、他の生徒に見付からないように寮へ帰宅、なんて生活が続いたせいか寝不足気味。

そのせいか今日の朝、寮で灯火に起こされた時にシャワー室について伏せて熟睡していた。我ながら殺人事件と勘違いされそうな画よね。

灯火は全然驚いてなつたようだけど、何でだろ。普通は相部屋の生徒がシャワー室で寝てたら驚愕するんじゃなかろうか。もう慣れ

ました、と言わんばかりの顔をしていた気がする。

(でも、なんか寝ちゃうのよね……レッヂの寝顔見てると)

看病初日は張り切つて徹夜付きつ切りまで予定していたが、レッヂの寝顔を眺めていたら唐突に睡魔に襲われた。自分で驚くほど抗えずに寛入り、ふと目が覚めると、病人のレッヂの体を枕に座つたまま熟睡。

病人を枕にしておいて何だけど、椅子で座つて眠ると体の節々が痛む。もういつその事寝袋でも持つていこうか。確か避難時用のが各部屋の洋服箪笥の中に入つていた筈だけど。

(レッヂの隣で眠つてると、安心するのよね……ずっと綺麗な花畠の夢ばっかり見れてるし)

IJの学園に入学して、灯火と相部屋になつてから始めて自覚した事。あたしは、一人で眠るのが怖い。

傍に誰かがいる安心感が無ければ、また悪夢が襲つて来る。忘れもしない両親が殺された日の事や、無力なあたしを責める自分の姿。どちらも、あたしの後悔から生まれた夢。5年以上経つ今でも、悪夢は鮮明に蘇つてしまふ。

でも、灯火の傍だと夢は消え、レッヂの傍だと純白の花が咲き誇る野原の夢を見る。もしかしたら、自分で気付かない部分で、人に甘えたがっているのかも知れない。

「カレンジじゃない。何やつてるの?」

「ひつ！？ ち、違うの！ これは隠れてるとかじゃないし、レッヂの看病に来たとかじゃないのツー！」

こんな時間なら誰もいないだろう、そう高を括つていたせいか驚

きが一割り増し。そして口が滑る。

言つてから気付いたけど、自分で面白してどうする。どんな犯罪者でも警察相手にはもっと粘ると思う。取調べ室に入つて瞬間自供つて何よ。喋りたがりか。

(……って、カレン?)

一瞬人違いかとも思つたが、記憶の中に一人だけ、自分をカレンと呼ぶ少女がいる事を思い出す。何度も楓だと言つてはいるのに、直してくれないのは態となのだろつか。

「もしかして、白のお見舞いに来たの?」

振り返ると、舞佳先輩よりも幾分か身長の低い少女の姿。特注で作ったと思われる小柄の制服を着込み、モミアゲが長い印象的な銀髪。幼い外見ながら見惚れるほどの端整な顔立ち。制服姿でなければ学園に迷い込んだ小学生と勘違ひしそうである。

「黒羽……お願いだから会つ度に背後を取るのはやめて」

「カレンの反応が面白いからよ。間を開けると油断してくれるから、驚いてくれて嬉しいわ」

喋り方や雰囲気から見て取れる外見不相応の立ち振る舞い。同じ女性としては手本にしたいくらいだ。だからと言つて、あたしが実践したら絶対に粗が目立つ。実際、やつてみたら灯火に引かれたしあの時は流石に傷付いた。

口元を隠し小さく笑う黒羽に不満を言おうとするが、先程の失言を蒸し返されでは堪らない。

この少女、黒羽という子は、あたしが灯火と仲良くなる前の、明星学園に入学して間もない頃に出来た友人。苗字も知らなければ、

学年も分からぬ。本当に自分の事を語らない捻くれ者の黒羽だが、それでも時折姿を見せてくれると素直に嬉しい。天人と戦争をしている時代だ。今日明日で、友達の一人が死亡、なんて事があつても不思議じやない。

「でも、黒羽は何でこんな所に？それに、レッヂを知つてゐみたいだけど」

レッヂを白という名前で呼んでいた事。そして滅多に姿を見せない黒羽が、深夜にレッヂの寝てゐる緊急治療室付近で姿を現した。普通に考えれば、レッヂの知人なんだろうか。あの蒼炎使いの例もあるから、無いとは言い切れない。変に人脈広いんだから、あの男。自信を持つて言える事は家族ではないという事。だつて当然ですよ。レッヂは苗字こそ外国の物だけど、名前から外見は東洋人の物。対する黒羽は、背の小ささと綺麗な銀髪が相まって精巧に作られた西洋人形のよう。家系で唯一金髪だつたあたしも人の事は言えないけれど、これで家族ならばどんな家系だ。

「あら、カレンがわたしに質問なんて珍しいわね。白の事が気になる？」

「な、なんでそうなるのよ！ただその……そう！知り合ひみたいな口振りだつたから気になつただけツ！」

「カレンは昔から素直じやないのよね。そこまで全力で否定すると、肯定している様にも見えるわよ」

黒羽とは学園に入つてからの付き合い、つまり出会つてから半年弱しか経過していない。なのに、まるで遠い先祖の代から友達だったような人心掌握され具合。いや、もしかしたら、あたしが分かり易過ぎるのだろうか。断じて認めたくないけど。

「ふふ、カレンを苛めるのは面白いけど、やり過ぎて嫌われるのも怖いから今日はここまでね」

あたしの横を通り抜けて、学園の校舎側へ向かって行く黒羽。何時もの事だが、その自由奔放さに驚いて放心し掛けた。まるでレッヂを思わせる。今思えば、黒羽とレッヂは一つと言わずに、雰囲気なんかも結構似ているんじゃなかろうか。

「つてちよつと黒羽！あ、あたしは、レッヂの為に来たんじゃないんだから！」

「素直になつた方が人間得よ、カレン。先人からの教えと思つて試してみなさい。じゃあ、また会いましょう」

急いで黒羽の勘違いを弁解しようとするが、既に黒羽の姿は見えない。

相も変わらず神出鬼没な友人だ。一度で良いから腰を据えて話したい物である。名前の間違いに、今の誤解や出会う度に脅かす件について煮詰めるくらいにじつくりと。

結局レッヂとの関係もはぐらかされたし、あたしのからかわれ損じやない。なんかレッヂの看病する前に疲れてるんだけど。また病室で寝込みそうな気がする。

『一年学科 白=レッヂ』

病室の前の名簿欄に書かれた名前。病室の扉の前で再度周囲を念入りに警戒し、一息吐く。

先程の黒羽の件もあるから本当に気が抜けない。警戒を解いて油断した途端、あの蒼炎使いが突然出没、なんて事も有り得なくはないのだ。そうなれば黒羽との遭遇以上に面倒事に発展するのは必至。

(正直、これまでの三日間で蒼炎に会わなかつたのが奇跡よね)

蒼炎のレッヂへの執着具合を考えると、あたしみたいな徹夜処か授業無視して丸々一日付き添つているというのも考えられる。むしろ、この三日間で蒼炎と会わなかつた方が不気味。

そう考へると病室前で思案しているよりかは、発見されない内に病室に入つた方が安全かも知れない。

一度深呼吸をして腹を決めると、目の前の扉の取つ手に手を掛け回す。

(もし起きてたら、どうしよ。まともにレッヂの顔を見る自信がないんだけど……って何怖がつてるのよ小波 楓！御礼を言つんでしょ！そ、それと出来たら、最初に会つた時の御礼も素直に言つの！格好良かつたつて……助けて貰つて嬉しかつたつて！)

あたしは出せる今の勇氣を振り絞り、取つ手を掴んでいる手に力を込めて扉を開ける。

暗いままの室内で一番最初に見えたのは、眠つてゐる所ではなく、ベッドに座りつつも上半身を起こしてゐるレッヂの姿。月の光が窓辺から差し込んで、レッヂを照らす。

普通ならばレッヂの目が覚めている事に驚いてゐる処だが、それよりも気になる事がある。

何故か振り返つたレッヂの体は寝巻きに包まれておらず、上半身が剥き出しの状態。タオルで体を拭いてゐる、というのは分かるが、あたしの脳は理解する前に過熱。きっと傍から見たら顔が逆上せ上がつてゐるに違ひない。

「な、なななんなんで裸なのよー？」

「いや、人が体拭いてる時に入つてきたのはそつちだらうが

満月が暗黒の空に映える夜。普段ならば学園の生徒が行き来する道も、不気味なほど静まり返っている。街灯と月光だけが照らしている夜道は、女子一人で歩くには少々心細く感じた。

僕、野々宮 灯火は、薄い寝巻きに上着を羽織つただけの格好で、夜道にゆっくりと歩を進める。

「……そういえば、白とここを通ったつけ

天人の襲撃を受けた日の夜。僕が、初めて誰かを夜の散歩に誘つた日。

恥ずかしくて、でも嬉しかった。普段一人で何気なく歩いている道が、彼が隣にいるだけで違つて見えた。きっと、自分でも制御出来ないくらい舞い上がりつたんだと思う。男の人と一緒に出掛けるなんて、夢にも思わなかつたから。

だからかな、こんなにも寂しいのは。物足りなく感じてしまうのは。白と散歩をした日から、夜の散歩が苦痛に思えてしまう。あの時、勇気を出して白を誘わなかつたら、こんな気持ちにはならなかつたのかな。

(あれ、なんか光ってる?)

目の前の道で薄く発光している小さな物体。見る限り、懐中電灯等の人工的な明るさでは無く、螢の光のような淡く魅せられる様な光。何の光も当たつていらない暗闇で輝いている処を見るに、反射ではないらしい。

まるで蜜に引き寄せられる虫。警戒心を持たず、無用心に近付いて行く。

光を頼りに、茂みの中へ足を踏み入れると、直ぐに目的の物を発見。普段なら絶対にそんな事しないんだろうけど、小さく発光し続ける物に恐れを持たず手を伸ばす。

「これ……カラスの羽根?でも、光ってるし……何より、大きい」

こんな羽根を持つ鳥は、正に人間と同等の大きさなのだろう。冷静になつてみると、驚く程木目細かく綺麗な羽根だ。このまま装飾に使つても問題なく機能するに違いない。

でも、僕はこの羽根に見覚えがある。そう、これの赤黒い物ならば、何度も目視しているのだ。

「天人の……羽根つ?」

26『あたふただらけの深夜看護』（後書き）

加筆版です。伏線が追加されていますね、はい。

この次々回では、新章に突入予定です。では、また次回。

27『アンタの大きな背中』【挿し絵】

「んー、もうちょい強い方が良いな」

「い、いづっこんなに力入れたら、痛く……ない？傷口に染みたり……」

「もう大半は塞がってるから大丈夫だ。そんな事気にしてたら消毒も出来ないぞ金髪」

あたし、小波 楓は男の人の半裸を直視した事がない。ずっと訓練に明け暮れている上に、元々恋愛に興味が無いのも加わって、男の人とまともに会話したのも随分久方振り。本気で記憶を引き出そうとしても、父親とレッヂくらいしか話した記憶が無い。

そんなあたしが、上半身裸の男の背中を濡れタオルで拭いている。正直に言うと、黒羽からの助言と恥ずかしさで頬が沸騰しそうな程熱い。今直ぐタオルを放り投げて、悲鳴上げながら逃げ出したい衝動に何度も駆られてるけど、自分でやると言つてしまつたんだから仕方ないので。

「か、看病しに来たんだから……ま、まま任せなさいよー」

こんな言葉でしか引き受けられない自分が恨めしい。もつと素直に、アンタを心配して毎日病室に通つてたの、と言えたらどんなに良いか。

レッヂの背中に当たた濡れタオルに先程よりも力を込めつつ、慎重に動かす。本人は大丈夫と言つているが、それでも刻み付けられた傷跡は痛々しい。看病中にも少し見えちゃつたんだけど、胸部にも傷があるのよね。

世界一位の神葬具使い。普段の雰囲気で忘れちゃいそうになるけど、レッヂは何度も激戦を潜り抜けて来ている。体中にある傷の量

は、あたしの比では無いだろ？。神葬具を扱う技量も、到底及ばない差がある。あたしや一般人の目の前で、躊躇いもせず下位と中位の攻撃を受け止めて見せた。

「どうしたよ金髪、いきなり黙つて」

だからこそ、危なっかしい。

レッヂの背中にある傷跡の中で、一番真新しい傷。きっとこれは、あたしを庇つた時に出来た物。あたしはまた、誰かに守られて生き長らえている。力を手に入れて、やっと自分一人で生きていけると思ったのに。

「あ、金髪つて……呼ばないで」

「いつが来てから、あたしはずつと弱くなつた。何でも一人で乗り越えられるって、痩せ我慢してた自分が、徐々に裸にされているようだ……怖い。自身で飾り付けた見栄が、崩れ落ちて行く音がするのが怖かつた。

敵を目の前にして、守つてやる、そう言つてくれたアンタに、何もかもを委ねてしまいそう。でも誰かに頼つたら、あたしは絶対に前へ進めなくなってしまう。

突然声色が震え始めたあたしに驚いたのか、振り返ろうとしたレッヂの体に温もりを求めるように抱き付く。一番は、泣いている顔を見られたくないからだけ。

「お、おいつ！？」

「…」

本当は何度もアンタの寝顔を見て泣いた。このまま起きなかつたらどうしよう、あたしがあの時アンタと逸れなければって、何度も

後悔し続けた。それこそ、胸が締め付けられる程に。

その時、やつと解ったんだ。あたしは、弱いんだって。アンタに守つて貰えて、嬉しかったんだって。

レッチの体を抱き締めながら、その広い背中に顔を埋める。こうでもしないと、強くしゃくり上げているのが聞かれてしまいそうだ。

「言えなくて、ずっと引き伸ばしちゃったけど……初めて会った時も……また、助けてくれて」

緊張で喉が喉を鳴らす。あと一言。あと一言を何としても彼に伝えなくてはいけない。

今、鏡で自分の姿を確認したら、恥ずかしさで死ぬんじゃなかろうか。

♪ 3 1 5 2 7 — 2 1 3 ♪

「……………ありがと」

ただ御礼を言つただけなのに、心臓が痛いくらい高鳴つてゐる。レッチに抱き付いているから、というのも勿論あるんだけど。今は緊張等々で頭が上手く回らないけど、後で自分の行いに激しく身悶えそうだ。

とつくて学園全体の消灯時間が過ぎ、月明かりだけが差し込む薬臭い病室。

傍目から見て、上半身裸の男に背中から抱き付いている女子の姿はどう映るのだろう。

「あ、あたし……これから、アンタの事……し、由つて……呼ぶか

う

頼り切るのは許されない。だけど、せめて呼び方だけでも、他人行儀な物から変えたかった。

口から心臓が飛び出さんばかりの勇気を振り絞った言葉に、白が頷く。

背中側だから表情は見えないけど、白はあたしと違つて普段通りに冷静な顔をしているに違いない。証拠と言つては何だが、背中に耳を直に当てる聞こえる心拍数は全く変動無し。

女の子が身近にいるんだから、少しは緊張しなさいよ　と不満を露わにしそうになるが、何とか塞き止める。恥ずかしさよりも怒りが上回つて爆発しそう。

「まあ、俺も名前で呼ばれた方が楽だしな。楓の好きにすれば良いんじやないか？」

「べ、別に言われなくつたって、そつするわよッ」

意識が飛ぶか飛ばないかの狭間くらいまで緊張し切つたのに、全然興味なしと言わんばかりの態度。

流石に我慢の限界で、何時もの声量で怒鳴り散らすと、背中を向けている白が笑い声を上げた。怒鳴られてるのに笑えるなんて、やはり人事か。いつその事噛み付いてやろうつか。

我が物ながら鋭過ぎる八重歯を凶器にしようとした時、白が少しばかり首を傾け、あたしに横顔を見せて微笑む。

「しおらじい時より、そつちの方が似合つてゐるぞ、楓」

またもや憎らじい台詞を吐くのかと思ひきや、優しい声で心臓を抉る強烈な一言。しかも、この男は意識せずに名前まで呼んで来るし、加えて男子の背中に抱き付きながらの状態。普通の状況で名前を呼ばれるのとは訳が違う。

「な、なななな何言つてんのよ、バカ！」

「ちょっと待て。俺の発言の中にバカと呼ばれる要素が一つでもあつたか？」

羞恥心でいっぱいになり、限界を感じて白から体を離そうとした時に、突然病室の扉が開く。

予期せぬ出来事が起こると寿命が縮むつて本当ね、凄い実感した。白に抱き付いている現場を叩撃されるのだから尚更だ。間違いなく十年は軽く縮んだ。

「しり、さま……？」、「これは……どいついう状況ですの？」

『おお旦那様、お嬢様が湯浴みの最中に違う女性と破廉恥三昧とは不届き千万！拙者は奥方は一人に絞るべきだと思つでござる……お、お嬢様、そんなに力まれると苦しいでござる……』

『甲斐性も必要だと思いましゅよ。従者としては、姫しやまを大切にして欲しいでしゅけど』

振り返ると、あたしの金髪よりも大分白み掛かった長髪を持つ女子生徒の姿。全体的に蒼で統一されたゴシック調ドレスを着込み、腕で子犬を抱き、頭に大福猫を乗せている。病室の雰囲気からして、場違い感が否めない。

色白であるう顏色が驚きで青白く染まり、有り得ない物を見たと語っている。

そしてこちらは、有り得ない物を見られたと顔面蒼白。自害に至る過程としては十分過ぎだ。

「やばいな……エリーゼが乱入とか洒落になつてないぞ」

冷静だった白の声も少し焦りが混じった物になりつつある。焦り

とはここまで伝染する物なのか。エリーゼと呼ばれた女子生徒の抱いている子犬は別の意味で危機に瀕しているようだが。

「ふ、ふふふ……わたくし、まだ少しのぼせているみたいですね。頭を冷やして落ち着きましょう、それが良いですわ」

「おいでエリーゼ！お前こんな所で蒼炎使つたら」

白の呼び掛けも虚しく、エリーゼの腕に灯る蒼い炎。不気味に笑う蒼炎使いの周囲の温度が加速度的に低下し出す。一言で表すならば、北極を彷彿とさせる極寒の訪れ。上半身裸でいたりしたら凍死も夢じやない。

「寒ッ！頭だけじゃなくて心臓も冷えるわ！止めろエリーゼ！」

「白様……夢とは覚める物ですわ。きっと目が覚めたら、白様がわたくしを抱き締めてくれている素晴らしい現実が待つていてる筈ですから」

「お前これ、起こす用の寒さじゃなくて心中用の寒さだらうが！それと楓、いい加減離れろ！？」

そしてあたしは、今の状況を叩きされた事が衝撃的過ぎて、白に抱き付いたまま放心。口から生気が離脱していても不思議じゃない脱力具合だ。

「も、もう見られたなら仕方ないわ。アンタと一緒にこのまま……！」

「お前も無理心中希望！？」

因みに、この出来事が発端となり、白は高熱を出して再度病室へ搬送。驚異的な回復力を見せて天人との交戦の怪我は三日で癒えた

ものの、風邪のお陰で入院は一週間に伸びてしまった。逆に四十度近い熱出して四日で治るっていうのも凄いわよね。

それから、あたしとエリーゼが白に病室で謝り倒したのは言つまでもない。

「どうしよう……この羽根」

もう夜も遅い。楓は何時も通り白の病室に通つていて、僕は一人、寮部屋のベッドに寝転がっている。寝巻きを着込んで就寝の準備は万端だというのに、一向に眠気が訪れない。

原因は、どう考えても昨日発見した、未だに淡い光を放ち続ける黒い羽根。

見付けた当初は焦つていたが、今日の学園で上位の天人の噂は一つもなく、自分の杞憂だったのかと結論を出しそうになっている。

「白に相談したいけど、楓と二人っきりにしてあげたいし」

気付くと、また楓を引き合いで出して逃避している自分の姿。黒い羽根を眺めつつ溜め息を漏らす。

僕がもつと遠慮しない性格なら、こうは思わなかつたのかな。躊躇せずに正面切って突き進めるような人間だったら、何か得る物があつたのだろうか。

「ツー？　い、痛いっ……！」

後悔を如実に表すように訪れる頭痛。羽根を発見してから、まともに睡眠時間を取りていられないせいか、こうして鋭い頭痛が頻繁に起ころ。睡眠不足からの頭痛にしては痛みが強過ぎる気もするけど、

それも直ぐに収まってしまう。

実際の時間としては数十秒だろうけど、体感時間だと數十分に感じる。余りの激痛に脂汗が滲んだ。

「はあ、はあ……み、水……」

昨夜の苦い経験を生かして常備していた頭痛薬とコップ一杯の水。震える手で何とかそれ等を掴み、錠剤を口に含むと一気に水で押し流す。即効性ではないので、また再発する可能性も捨て切れない。結局の処、薬も絶対ではないのだから。

「はあ……体が、熱い」

まるで熱湯に全身浸かっているような感覚で眩暈さえも覚える。寝巻きのボタンを何個か外して、整わない息のまま目を瞑つた。どうにかして今夜も乗り切らなければ。昨日もそうだったし、一度眠ってしまえば朝までは大丈夫な筈。

「楓に……心配、掛けられないからね」

27『アンタの大きな背中』【挿し絵】（後書き）

加筆版です。前より良くなつてゐるかなーと血口満足中。
次話は早く挙げられると想います。

「つたぐ。まさか必須課題忘れるなんて思わなかつたぜ」

薄暗い深夜の学園校舎内。その一年の教室で、普段自分が座っている席の引き出しを探る。見回りの職員がいるのも考慮しなければならないので、当然明かりは無し。絶賛手探し中。

匂坂 舞佳、一生の不覚。まさか提出しなければ居残りの課題を、提出日前日になるまで忘れているとは。受け取った直後に引き出しに入れて頭から消失していた。

「ん~と……これが?」

数枚出現した紙を月明かりが照らす窓際まで持つて行き、月の光りを頼りに田端ての物を探す。

「うわ、先月の課題だ。こんな所に入つてたのか」

むしろ熟成されていたと言い回した方が言い訳になるかも知れない。予習を怠つていたせいで、数学の課題に関しては引き千切りたくなる衝動が芽生える。元々苦手科目なのに輪をかけて苦手になっているな。自分で言つのも何だが、進級出来るだらうか。

「由と同級生になつた上に、またバカとか言われる未来……」

無事に進級出来た未来よりも安易に想像可能な点が泣ける。登校拒否に陥るかも知れない。

深い溜め息を吐きつつ、人生に絶望を抱いていた時に、三枚目辺りでやつと田的の物を発見。課題の題名の横に赤字で記されている

日付の締め切りが、どう足搔いても明日だ。

「英文の翻訳……か」

やばい、超捨てたい。英語が大名列の如く、大量に並んでいる図に涙が出そうだ。

明日の三時限目までにこれを全部翻訳とか無理に決まっているだろう。わたしの勉強の出来なさを舐めるなよ。クラスメイトに勉強を教えて貰つたら苦笑された程だぞ。端から端まで満遍無く分からなかつたんだからな。

正直、同室生の外国人に頼めば一発なんだろうけども、エリーゼが教えてくれるとは到底思えないんだよな。明日が白の退院日だというのもあって、滅茶苦茶早く就寝してたし。朝の何時から迎えに行く気だお前は。

「ま、いつか。明日にでも誰かに見せて貰えれば ん？」

必須課題を発掘した事に満足していると、背後から突然腹の虫が鳴ったような音が響く。わたしもよく訓練してて昼食を食べ損ねる事が多いし、自分からしてみれば聞き慣れた音。

だがしかし、思い出して欲しい。

ここは深夜の学園教室。わたしは身軽になる為に単独で潜入中。つまり連れ立つた仲間無し。なのに背後で、わたし以外の腹が鳴る。何だこれ、下手な怪談話よりも万倍怖い。

がぶりつ。

の鈍りを感じながら、やつと全回復。問題の傷は黒羽の神葬具の力のお陰で三日で治り、残りの四日間の風邪は全面的に楓とエリーゼの騒動のせいなのだが。見舞いに毎日訪れてくれたし、元々恨むつもりは更々無いけどな。

それから一日様子見の期間を経て、やつと学園の授業へ復帰。病室の白一色を見慣れたせいで、学園全体が色鮮やかに思える。

今まで何気なく食べていた学食のからあげ定食も、病院食に比べれば万倍良い。学内食堂の騒がしさも後押しして少しばかり感動を覚えた。

「やつぱり病院食つて味氣ないよな。こう、健康してますって感じで」

「お前人の話全然聞いてないだろ！？ この包帯の事、聞いて来たの白からだよな！？」

「白様白様、わたくしの作ったサンドイッチも食べてみませんこと？白様の好きな卵サンドもありますわよ」

「テメエも人の話を聞け！っていうか今気付いたけど相談する相手悉く間違えたよ！」

先日まで病人だった後輩に怒鳴り散らす先輩と熱烈に好意をぶつけて来る先輩とは、これ如何に。

「どうか、エリーゼって俺の一つ上なんだよな。日頃の態度と敬語のお陰で同級生かそれ以下にしか見えない。俺が記憶喪失で実年齢不明というものがあるので、実際の年齢は分からぬ訳だが。

頭に包帯を巻き、手の箸を握り締めて怒り狂う舞佳。普段の力チュー・シャが包帯になつていてる点は、少し新鮮味がある。もつと大人しくしていれば大分絵になつただろうに、残念過ぎる美少女。

「襲われて噛まれたんだったな。犬か何かか」

「知るかよ……でも結構ばつくり行かれたぞ。血は出てないけど」

まだ少々傷口が傷むのか、後頭部辺りを擦り渋い顔をする舞佳。背後から襲われたのは間違いないみたいだが、舞佳曰く、殴られたという訳ではなく絶対に噛み付かれたとの事。

無論、この学園の敷地内に野良の動物は生息していない。飼い主がいる場合も同様。

『はぐはぐ……今日もご飯が美味でござるなー』

『犬と呼ばれるのは嫌なのにドックフードは食べるんでしゅね』

俺の隣に腰掛けているエリーゼの足元で、戯れている一匹の無機物生命体。こいつ等は動物とは違う系統だから無視しよう。事実、息してないからな、一匹とも。食べた物も全てエリーゼの体力や精神力の回復に回されるらしい。味覚があるのかは凄く疑問だ。

「大剣使いは噛んだ犯人を見ていませんの？」

「そんな余裕があつたら捕まえてるだろ。走つて振り解こうとしても全然離れないし、いざ離れたつて思つたら誰もいないし」

舞佳の証言だけを採用すると幽霊の仕業になり兼ねないな。聞いていても意味不明だ。

纏めると、深夜に課題の用紙を取りに校内へ。教室で机を漁り、何とか物を発見。安心して帰ろうとした時に背後から腹の虫が鳴るような音。そして振り返ろうとしたら背面から一噛み。

なんか見事にホラー映画とかで一番最初に死ぬ奴の行動だな。咄嗟にそう思つてしまつた。

「もしかして犬、お前じやないだろ? な……?」

『ま、舞佳殿酷いでござる! 拙者達は夜にはお嬢様と一緒に寝ていたでござるよ! それと拙者は誇り高き狼でござる!』

「ダイゴロウではありませんわね。先ず大剣使いの頭に届きませんし、『ご飯はちゃんと食べさせていますわ。むしろ、そんな意地汚い真似をしたら犬小屋に首輪で繋ぎますから』

『しくしくしく……』

舞佳からは疑われた上に犬呼ばわりされて、主からは犬小屋に住ますぞ宣言。滂沱の涙を流すのも頷ける。床中水浸しになるのは頂けないが。

「何か手がかりは無かつたのか？犯人が落としたような」

神葬具でも大剣使いの舞佳ならば、日頃から体力は有り余つてゐるだろう。だとしたら、振り解こうと激しく動き回つてゐる間に犯人の身に着けていた品が転がつていても不思議じゃない。あわよくば犯人を特定する証拠が上がるかも知れん。

俺の問いに少しばかり唸り、突然思い出したと言わんばかりに鞆を漁り出す舞佳。忙しないな。

「相手が落としたのかどうかは知らないけど、何かの羽根っぽいのが落ちてたんだよ」

鞆に突っ込まれていた舞佳の手が再び現れると、その手に握られている大きな羽根。

漆黒の色といい、一見カラスの物にも見えるが、大きさが目に見えて違う。これ程の大きさの鳥類だと海外に行つてもお目に掛かるかどうか疑問だ。先ず日本には生息していないだろう。

舞佳から羽根を受け取り、様々な角度から観察。羽根を見た瞬間から嫌な予感はしていたが、まさか大当たりだとは。予想が当たつても全く嬉しくないな、これは。

「お前……これが手がかりじゃねえか」

「だつてこれ鳥の羽根だろ。確かにちょっと大きい気がするけど」

人類の敵だし、戦ついたら気付きそうな物だけだな。戦闘中は空中に何枚も舞つてるし。色違いだから気付き難いというものもあるんだろうか。いや、きっと舞佳は天人学という授業の成績も悪いに違いない。でなければ重要な羽根の色の違いには気付く。

「天人の羽根ですわね。それも……色違い」

下位、中位の天人から察せられるように、天人の翼は血色で統一されている。故に俺が今まで見て来た天人の翼は全部が赤色。だがしかし、上位の例外を忘れてはいけない。実際、人間駆逐宣言をした一位の翼は灰色。写真でしか目視してないから本当かどうかは分からぬが、諸説では上位の天人の羽根の色は違うと言われている。

生命の樹の色で考えると、何故五位の色の筈の赤が歩兵に使われているのか疑問に上がるが、こちらは天人の情報なんて一切無いも同然。肝心要の神葬具の事すら全然解明出来ていらないんだから当然だ。

「もしかしたら、上位が学内に侵入してるのが」

それならば黒羽お手製の警報が鳴ると思うんだが、引っ掛けがないとしたら、上位は姿を消す能力でもあるのか。普通に生活していく背中から強襲されたとか洒落にならんぞ。

これが天人の物だと早合点するのもいけないが、このまま放置するのも不味いな。噂として広まる前に、黒羽にでも相談して置いた方が妥当か。

「よし、決めた！」

「食事中に席を立つのは無作法ですよ、大剣使い」

舞佳が何を思つたかいきなり席を立ち、俺の持つていた羽根を指差す。といふかそこまで元気なら包帯要らなくないか。

「仇討ちだ。夜の学校に出て来るなら、一いちから出向いて真っ向から叩き潰せばいい！」

相手が本当に上位天人ならば舞佳の攻撃に怒つて学園全体が叩き潰されそうだ。事を起こしたのが一人なのに集団で巻き込まれる理不尽さ。人、それを巻き添えという。巻き込まれた身としては堪つたもんじやない。

本格的に、この舞佳をどうしようか思考を回転させようとした時

「し、白ーその羽根ビビッしたのー？」

満員の食堂で、こぢらに近付いて来る足音と、俺の名を呼ぶ癒し系な声。残念な子と面倒な子を一手に引き受けっていた身としては、この声が清涼剤にも感じた。性格つて声にも影響を及ぼしたりするのか、新発見。

焦りが混じつた表情を浮かべている灯火。その後を追つて食堂に現れた金髪のクラスメイト。

「あ……うわあ

おい金髪、俺の顔を見てのその反応は何だ。四日前の深夜の自分の行動を思い出しているんだろうか。顔が尋常じやない程赤味を帶びている。あの日以来ずっとこんな態度が続いていて、俺としては

有難い限り。八重歯を見せて怒鳴る姿も良いが、照れて黙ってしまう姿も中々評価高いぞ。

「……………げつ」

「あら、御機嫌よう。今日も犬の様な歯が素敵ですわね」「うつさい！なんでアンタがこんなとこにいるのよ！」

「白様がおられる場所にわたくしありですわ。それ以前に、今はランチの時間ですわよ？食堂にいるのは当たり前。そんなことも分からないんですの？」

「相変わらずむかつくなー！」

そしてエリーゼを見てからの楓の態度の変わりよつ。

病室で看病していた時もそうだが、どうしてそこまでと訊きたくなるくらい不仲だよな、お前等。髪色とか結構似てるのに。いや、似ているからこそ磁石みたいに反発し合つてゐるのか。

楓とエリーゼが学内食堂で交戦しないか危ぶんで余所見をしようと、何時の間にか羽根を握っている方の手を、灯火が凝視している。

「間違いない……」れ、僕が持つてゐる羽根と一緒にだ

28『頭にがぶり』（後書き）

加筆版……今日中に出す事が出来ました…

ふふ、力尽きたぜ…

そしていざ書き直すと1000文字以上書き足している…どういつことだ

結局40000文字オーバーの癖に更新速度は何時もより早いです
一日空いてない更新つて何日振りだ…

今回も楽しめて頂けたなら幸いです

新章だから無意識に入つてたのかな…謎である

満月が映える夜の学校校舎前。

校庭で一度集合と決定したんだが、集まつた人員に胸騒ぎが止まらない。この腹の奥から込み上げる物を、一般的に不安と呼ぶんだろう。とにかく、先ずは言い付け通りに制服を着用して来た全員に行き渡らせた物の確認。

「全員、懐中電灯は持つたか？」

「ふふ、白様の明かりはわたくしに任せて下さい。蒼く照らして見せますわ」

「予備電池を六本持つて来てるぜ。これで幽霊の仕業かどうか分かるな」

「きっと懐中電灯が切れた瞬間にパニックになると思いますよ……？」

俺も懐中電灯の光が消えた途端に舞佳が幽霊の仕業と早合点して予備電池を忘れて走り去るに一票。

そもそもお前の所持してる単二電池は懐中電灯に使えないからな。電池を挿入する部分の大きさから見て、どう足搔いても単一電池。というかお前は肝試しに来た訛じやなくて、噛んだ犯人をあぶり出す為に来たんだろうが。早速目的を見失つてゐぞ、この先輩。先行きが不安過ぎて前が真っ暗だ。

「そういう灯火、楓は？」

普段灯火と一緒にいる楓の姿がないので疑問を抱くと、制服の上に撫子色のセーターを着た灯火が苦笑いを浮かべる。

「もう寝ちゃってたから、起こすのが可哀想で……来たがってたんだけどね」

俺が退院するまでの間、楓はずつと深夜に通つて来ていた。俺の記憶にある限りで、病室であいつが眠るのは絶対に一時過ぎ。寝顔を見られるのが嫌だからと、朝は六時起き。体内時計と体調を一遍に崩しても不思議じやない。

灯火から聞いた話だと、楓は普段0時前には眠つているらしいしかなり無茶をしていたに違ひない。顔色が優れない時もあったから、あつと今は、やつと肩の荷が降りて爆睡中だろ。

「まあ言つても校内巡回だ。無理して参加する必要ないし、寝かせといてやろうぜ」

「うん、白ないうちに言つてくれるつて思つてたよ。ありがと」

入院期間引き延ばされたと言つても、看病して貰つた恩がある。楓には心行くまで熟睡して頂こう。

頬を桜色に染めて微笑む灯火を眺めていると、背後で「こほん」と誰かが咳き込む。振り返ると、少しばかり機嫌が悪化しているエリーゼの姿。口元を隠している所作から見て、彼女が咳き込んだのは間違いない。

「それと白様。言い付け通り、ダイゴロウは部屋に残してきましたけど、意図は何ですか？ わたくし、ダイゴロウに羽根の匂いを辿らせようと思つたのですけど」

「こひで一つ、寮にダイゴロウを残してくれと言つたのは、決して嘘め等ではないと明言しておこう。留守番を任せられた当人は、今頃与えられた犬缶を満足気に食している。

「ダイゴロウには寮の周辺を見張つて欲しかったんだよ。それに、ケルビンだって追跡くらいは出来るだろ?」

『任せてくだしゃい』

本人は至つて真面目に返答しているつもりだろうが、大福餅とか形容出来ない外見と、舌足らずのお陰で逆に不安を煽られた。エリーゼの頭の上で欠伸している点も、緊張感に欠ける。

いやしかし、こいつとダイゴロウには窮地を救われた事実もある。性格さえ考慮しなければ、世界一位の神葬具使いに創造されたという折り紙付き。一旦戦闘形態に突入すれば下位の天人を寄せ付けない実力を所有。この説明だけ聞けば優秀な幻想獣だけで済む。

俺だつて一匹をエリーゼの従者と紹介された時は、何の冗談だと首を傾げた物だ。今では犬の方に名前を与えるまで慣れ親しんでいるけども。

「よし、そんじゃ一人一組クジ引きで」

「おい待て舞佳^{バカ}。お前完全に肝試し気分だな、遊びじゃないんだぞ」

「マカだつて言つてるだろ、バカつて言つなーつていうか頭鷲掴むなー噛まれた場所なんだよ!」

何時作る暇があつたのか、手に四本の紙切れを握り、意氣揚々と肝試しに移行しようとしていた舞佳の小さな頭を鷲掴み。綺麗に額周辺の包帯の巻かれた箇所に触れるが気にしない。自業自得だ、諦めろ。

大体、最初から二人一組にしようとは決めていた。仮に四人で一斉に突入したとしても、制限時間の制約もあり十分に見回れない事は火を見るよりも明らか。ならば人員を二つに別け、隅々まで見渡せるようにした方が好都合。

(ただ、俺の考えてた組み合わせだとエリーゼと舞佳なんだよな)

振り分けを決定した理由としては、相部屋生だから互いに連携取れるだろ？、という安直さ。そして俺自身、灯火といる方が精神衛生上、非常に楽なので。

お化け屋敷に対し、はしゃぐ子供のお守り。もしくは貞操の危機が訪れかねない組み合わせ。俺には生憎と、どちらも選ぶ勇気は持ち合っていない。本音を言わせて貰えれば、本日の予定は打ち切りしたい。

現在進行形で後悔している最中。黒羽の頼みとはい、こんな事を引き受けるんじゃなかつた。

『警報が機能してないとは考え難いけど、この羽根が存在しているのだから見過ごす事は出来ないわね。白、夜の見回りを頼めるから。わたしは学長室に籠つて仕事を片付けてるから、何か起こつたら神葬具を開けて知らせて頂戴。報酬は……そうね、久し振りに膝枕してあげましょうか？』

俗に言つ丸投げ。しかも報酬は義母の膝枕。黒ストッキングに包まれた脚を、軽く叩きながら言つ黒羽に現物支給以上の物を見た。喜んで受け取ると人間として大切な物を失う気がしたので、問答無用で却下である。

結局報酬は要熟考で落ち着いたが、それでも上位天人の件を放置とはいかない。現に頭を丸齧りされた犠牲者がいる訳だしな。本人は健在な上に、元気過ぎて腹が立つ程、活力に富んでいるけども。もう舞佳を餌にして犯人を誘き寄せるか、という案が浮かぶくらい。

「じゃない。班を組み直すから待つて」

「化学実験室は……異常無しみたいだね」

『一斑了解。んじや灯火、次は職員室周りを頼む　つて、おい舞佳。勝手に先に行くんじやない』

月の光が窓辺から差し込んでいて、電気を付けなくとも中々明るい。教室内に、少しづつ空間を開けて連なった横机と廊下側の壁に鎮座した薬品だらけの棚。卓上に置かれたまま放置された試験管やプラス口を棚に戻しつつ、手の平に収まる小型の無線機で白に報告。無線機越しに活動している白と舞佳先輩も巡回は順調そうだ。舞佳先輩の先行し過ぎは気になるけど、白が相方なら問題ないだろう。

「盾剣使い、白様は何と？」

僕の方の相方さんは名前すら呼んでくれないのでですが、どう連携を取れば良いのでしょうか。

頭に熟睡状態の猫を乗せたエリーゼ先輩は、白から無線機を託されなかつた事が不満らしく、常時不機嫌で、その刺々しい雰囲気に僕は胃を痛め続けている。このままでは探索終了の時点で胃炎発症も夢ではない。

元々、全くと言つて良いほど面識が無い上に、白以外の人との会話に興味を示さないエリーゼ先輩。会話が成り立ちません。今話し掛けて来たのも結局は白絡みだし。

「えっと、次は職員室の周りを中心に探索して欲しいそうです」

「職員室……教職員が集まる場ですわね。案内願いますわ、盾剣使
い」

エリーゼ先輩は転校してから口が浅いし、教室の配置を覚えて無くても当然だよね。

この明星学園、寮や校舎、その他の施設を含めれば敷地が村一個

分に匹敵している。地下迷宮の面積がこれに含まれてないのだから更に驚き。敷地内全てを見回るならば、丸一日は掛かる事だろう。

ここまでで分かる通り、校舎も例に漏れず広く建造されている。天人襲撃時には続出する怪我人を搬入する為の医務室から、昼食時に機能する学内食堂も完備。おまけに調理実習室や籬壇式の広い教室。これを校舎が一手に引き受けているのだから、そりや大きくもある。

「そ、そういうえば、どうして僕は盾剣なんですか？」

舞佳先輩の時もそうだけど、エリーゼ先輩は白以外の人を名前で呼ばない。大抵の場合、呼ぶ相手の使用している神葬具の事を指している。舞佳先輩ならば大剣で、楓なら脚鎧とか犬。後者は主に喧嘩最中に嫌味として。

その流儀に習うなら、僕の呼称は円月輪チャクラム使いになるんじゃないかな。

でも、エリーゼ先輩って僕の神葬具を見た事ないよね。駅前の襲撃時も、天人に察知されない様に神葬具は出してなかつたし。自分で言うのも何だけど、そもそも円月輪は全然目立たないからね。楓の脚鎧とか、白の銃器みたいに派手なら別だけど。

「貴女の使ってる神葬具の事、ですわ」「えっと、僕の神葬具は円月輪ですよ?」

自身の武器の形状を伝えると、エリーゼ先輩は普段の余裕のある表情を若干崩す。

「あら……貴女の物を持つ癖と立ち振る舞い、神葬具は盾剣だと思つていましたわ。意外ですね、まさか投擲系だなんて。盾剣でなくとも、絶対に剣は握っているとばかり……」

まさか所々の所作を観察して神葬具を割り当てていたとは。こちらの方が啞然となる。人の無意識の動きを記憶して癖だと見分ける観察眼なんて、努力だけでは手に入らないだろう。

中位の神葬具の負荷に耐え、一体いる使い魔を常時呼び出し続ける精神力も、戦闘時に見せた動きも、比較的安全と言われている日本にいる限り到底手に入らない代物だ。今から僕が訓練して会得しようとしても、それこそ得られる可能性は、砂漠の中で砂金を発見する確立に限り無く近い。

「では改めて、じほんつ。行きますわよ、円月輪使い
『ふあああああ……姫しゃま、朝でしゅかー?』

探索自体は中々締まり切らない班になつちやつたけど、エリーゼ先輩から学べる事が多いし、僕は満足かな。

そして、黒い羽根の持ち主を、早々に見つけなくちゃいけない。天人だから危険、という考え方よりも、この羽根の持ち主に会いたいという願望が勝っている。淡く光る漆黒の羽根を見詰めていると、何故か懐かしい感じがして心が痛む。

(欲を言えば……白と一緒に班だったら嬉しかったかな……なんて)

29『深夜校内探索』（後書き）

間に合わせました加筆版……いやあ、すこかつたつすねえ（文字的な意味で）

辛いが来て、痛いがきて、苦しいがきて、イキました
まあ「冗談はさておき、ちょこちょこ鍵を握るキャラが見え隠れ
書き手も面白いです、書いていて

次回は早めに更新できると良いなあ……いつも言つてゐるな、これ

30『貴方の腕の中の幸せ』

「あー……しんどい」

舞佳。お前だけではなく、この場に揃つてゐる全員が愚痴つてゐると思うぞ。疲労の絶頂だと。

あの初日探索が不発に終わり、三日間連続で深夜に校舎の調査を行つてゐるが、進展無し。

ここ最近寝不足が続き、男の俺ですら食が細くなる疲労感。女性陣の悲惨な様は言つまでもない。舞佳を除き、元々小食な女子達が更に小食化。飢餓と無縁で餓死なんて洒落にならん。せめて御握り一個分は無理でも腹に詰めろ。

「はむ、ん~。やつぱり安売りのパンは良いわね。味じやなくて経済的に。……侘しいけど」

唯一正常稼動しているのが、初日以降から深夜探索に参加していいる楓だという点が驚き。一番先にうつ伏せで倒れてそうな役回りなのに。

あんぱんを右に、パック牛乳を左手に装備して食べ進めている楓の隣で、色白の肌を更に悪化させた灯火が座つてゐる。目尻に小さく隈を浮かせているのが、体調の不良さを覗かせた。薄幸の美少女も、ここまでだと不憫過ぎる。

せめて一日でも休息を取つて貰おうとするが、灯火は頑として首を縦に振らない。

「気にしないで……その、平氣だから……ね？」

男は儘い雰囲気の女性には弱い。きっと万国共通だらう。

しかし、執念にも近い何かを原動力にして働き続ける灯火は痛々しく、今夜が限界であろうと判断出来る。

皆が体調崩しては元も子もないし、区切りとしては丁度良いかも知れないな。今夜不発ならば、一旦探索は諦めよう。もし誰かが引き下がらなければ、その時は強制しても寮に連れ戻す。力技になるが致し方ない。

「そういうエリーゼは何所行つたんだ？」

「なんか、犬ころ連れて羽根の匂いを辿つてるらしいぞ」

道理で騒がしくない訳だ。舞佳の所持していた黒い羽根の匂いをダイゴロウで追跡しているのか。一昨日から昼間に色々な箇所を探つてゐるみたいだが、音沙汰無し。簡単に見付けられたら寝不足になる程苦労していいない。

第一、四日間探して一度も証拠が見付かつていないんだ。手詰まり感が否めん。

もういつその事、カラスの羽根だつたと完結させてやろうか。羽根の大きさ的に、無理があり過ぎるとは思つが。

『次のニュースです。昨日の深夜にロシアの首都、モスクワで出現陣が発生しました。ロシアが首都を襲撃されたのは、これが二度目。厳戒態勢を布いていたロシア軍は、出現した陣の内五つを破壊し、天人の大群を退けましたが、死者は一般市民を含め千人を超えるとされています。尚、ロシア大統領はこの事実を強く受け止め』

学内食堂に何台が配置されている天井設置型の薄型テレビが、不吉な番組を映す。

約一週間前に、学園と近くの都市が襲撃された側としては他人事で済まされないな。都市部の方の犠牲者は数十人に及び、こちらは大手の新聞の表面を飾る大事件扱い。都市自体は順調に修理が進ん

でいるようだが、完全に復興するには何ヶ月要するか見当が付かない。

徐々にだが、確実に世界中の天人の爪痕は増加している。凍つて再起不能な大地は後を絶たない。

(これじゃまるで、一方的なオセロだな)

一度奪われた陣地を取り返す事は出来ず、世界が凍り付いた時、それは人間の完全敗北を意味する。

今の天人側絶対有利な状況から覆す事は可能なのか。思い浮かぶ精一杯の可能性を上げるとすれば、覆せる程の強力な神葬具使い出現。それが無ければ、無力な人間は反撃の手立てなく追い詰められる一方だ。

「ロシア……確かに日本も一昨日襲撃されたわよね」
「九州の鹿児島県辺りだね……もう完璧に取られちゃったみたいだよ」

俺も新聞で読んだ知識のみだが、目撃例では陥落した沖縄の方角から天人が現れたらしい。

証言通り、合計八つの出現陣は竜美大島近辺の海域で発見された。そこまでは順調だったが、軍も海上に浮遊する出現陣に手古摺り、その間に鹿児島の防衛は崩落。昨日まで一寸刻みで白化が進行していたが、灯火の言い方だと、完全に天人に奪われたみたいだな。

「もしかして、沖縄から順々に占領して来たりするのかな……」「流石に神の考える事はわからないしな。わたしが神だったら、きっと天人を首都に落とすと思うけど」

天人が姿を現した当初の頃は、舞佳の言う通りの作戦で人間は全

滅していただれりつ。

だが、今の各国は優秀な神葬具部隊で首都最終防衛線を引いている。中位や下位の大群でも易々と突破は出来ない筈。ただ、上位が出張つて来るといつ最悪の一例を除いては。

放課後の時刻になり、他の探索人員が仮眠の為に寮へ帰る中、俺は予め今日重点的に探索する場所を絞り込む作業を行つていった。負担は少ない方が良いし、皆には言つていながら深夜探索は今日が最終日。出来る限り労力を最小限に抑えつつ、幅広く見回る必要がある。

と言つ訳で最終日の班組み合わせはどうするか、なんて考えていた時に、教室で居残つて頭を悩ませていた俺を呼ぶ声。

「白様！ わたくし、手柄を立てましたわよ！」

『嗅ぎわけたのは主に拙者でござりますが……お、お褒めは無しないでござるな、お嬢様……しくしく』

突然現れて俺の手を握り、散歩途中の犬のように嬉しがるエリー^ゼ。

犯罪擦れ擦れの尾行や失言が無ければ、誰もが羨む絶世の美少女なんだ、こいつ。至高の宝石を金槌で叩き割るくらい勿体無い。口に出したら調子に乗つて褒美を強請るから絶対に言わないけどな。贊美は心の中に留めて置こう。

「羽根の匂いを見付けましたの！ それも、今日の深夜辺りの物ですわ！」

「今日の深夜辺りって言えば……俺達が活動してたな。もしかして校舎外か？」

校内は一覧を作り、毎日隈なく調べ上げている。俺と組んだ以外の班が見逃していなければ、穴は無い筈だ。

そもそも人間を駆逐するのが目的の天人が隠れ回るとは考え難い。もしや監視目的で学園生徒に紛れ込んでいるのでは、なんて線も睨んだが不発。朝っぱらから校舎前で神葬具展開して生徒を見張る簡単な職業は骨が折れたぞ。もう一度とやるか。

「いえ、校内で、しかも御昼にわたくし達がいた食堂ですわ」

昼に俺達が集まつた場所　　といえば教室抜かすと学内食堂くらいか。あそこも見回りの一覧に入れているのだが、少なくとも俺は探索中に訪れた事はない。女子陣の負担を最小限に抑える為、特に数の多い教室を重点的に回つているからな。

学内食堂で隠れる場所といえば、業務用の冷蔵庫、大量に設置されている机の下。それ以外にも多数候補は上がる。見落としがあっても不思議じやないか。

「し、白様、それでその……わたくし、頑張りましたのよ？」

そう言いつつ、上目遣いを送つて来るエリーゼ。地味ながらも本当によく働いてくれている。深夜探索の寝不足も積み重なつていて、ダイゴロウを使用しての匂いの探索。精神的疲労は俺と比べ物にならないだろう。

これだけの働き。普通の女性ならば見返りに何を要求されるか考えるだけでも恐ろしいが、俺の前で目を強く瞑つている彼女は違う。俺としては金品を請求される事と、全く別の方針で恐ろしい。

「…………あー、何がして欲しい？」

「白様、女性に言わせるのは野暮じやありませんこと…………？」

少しばかり疲れが残る顔色で言うエリーゼは、普段とは違うか弱さも覗かせる。祖国では”無き貴族の残した宝石”とも称される完璧な外見。アルフォート家復興目的の婚約話は後を絶たないが、それをかなぐり捨てても俺に付き添おうとするのは何故か。

腰に手を当てて優しい笑みを浮かべる彼女を見ていて、唐突に思い出したのは、エリーゼと出会つて間もない頃に聞いた言葉。

『誰も、わたくしの内面なんて見てくれませんもの』

今では他人とも口数少なく話せるが、あの頃のエリーゼは誰にでも塞ぎ込んでいて、話し掛けても冷やかな待遇の連續。正に蒼炎の神葬具の如く、絶対零度の令嬢。

だが俺に依存している彼女を見ていると、放つて置いた方が良い選択だつたのか、なんて思いもする。俺が死ねば間違いなくエリーゼは後を追うだろうし、厳密に言えば彼女を更生させたのは自由に生きて欲しかつたからだ。偽善と蔑まれても不思議じやないが。

『わたくしは……貴方に抱き締めて頂けるだけで、他は何も要りませんわ』

その過去の言葉通り、何かの見返りに彼女に要求された物とすれば、出会った当初からこれだけ。

ここまで近くす女はそうそういないだろつ。だからこそ、俺なんかには勿体無い。自分勝手でお前を汚した俺に、抱き締める資格なんてないのに。

自分の不甲斐無さに苦笑しつつ腕を広げると、待ち侘びていたようになび込んで来る薔薇の香りの少女。華奢で線の細い体に、服の下から柔らかく自己主張する膨らみは、天国と地獄を同時に味わわせてくれる。

「ああ……幸せ、ですわ」

大袈裟に至福の声を漏らすエリーゼ。クリーム色の髪を撫でると、くすぐつたそうに身を捩る。

俺の肩まで届く長身のエリーゼを抱き留めていると、直に香る髪や体の匂いで酔ってしまいそうだ。

「安い奴だな。金品要求しろ金品。その方が助かるから」

「ふふ、これ以上の価値のある物なんて存在しませんわ……。宝石

だって、くすんで見えますもの」

『親代わりからしてみると……複雑でござるな。お嬢様には、ずっとあの笑顔を浮かべていて欲しいものでござる』

30『貴方の腕の中の幸せ』（後書き）

加筆版です。そこまで変わってない気がするのはきっと氣のせいか
と…。

次回からまた新しい展開になります。
作者自身、書くのが楽しみです。

3-1『知られない止まぬ痛み』

学園が放課後になつた後、直様寮へ帰宅し仮眠を取つたのだが、疲労が一向に治まらない。一週間程前から続いている頭痛も激しさを増している気がする。元々、軽い片頭痛ではあるが、ここまで痛みは始めてだ。

痛む頭を擦りつつ、処方された錠剤を飲み込む。水を飲むのも億劫な今、水無し一錠が有難い。

「……頭痛薬つて、中々効かないんだよね」

担当医からは生まれ持つての片頭痛と診断されているけど、実際は現代医療もお手上げらしい。頭痛の原因が解明出来ず、医院で処方される薬も通常の頭痛薬のみ。完治とは無縁の病に成り果てる。

そんな医師が匙を投げる程の難解な病を、医学知識を少々齧つた学生では分析なんて不可能。精々、戦闘で受けた傷の手当が限界だ。念の為、隣のベッドで熟睡している相部屋生に視線を向ける。もし楓が起きていたら、余計な心配を掛けてしまう。それだけは避けたい。

「痛い……」

視界が歪み、頭痛の鋭さが増す。吐き気を伴わないだけ、まだ救いがあるだろうか。

眠れば楽になる分、睡眠薬に依存したい気持ちもあるけど、飲むと起床時に負担が残る。戦闘になれば、満足に動く事すら適わないだろう。

それと生徒手帳にも記されている事だが、自力で就寝出来る間は

天人の襲撃等も考慮して基本的に睡眠薬は使用厳禁。万が一使用する際は、相部屋生に確認を取り安全を確保する事。

後者の注意書きが無ければ、僕は躊躇わずに薬を服用していたかも知れない。楓の存在が、僕の理性を繋ぎ止めてくれている。

「えへへ……松尾芭蕉……」

相変わらずの寝相で布団を退け、涎を垂らしつつ寝言を呴く楓。入学当初は散々な目に遭つたけど、今では楓の寝相が安息材料になりつつある不思議。市販の香より効果があるかも知れない。現に、楓の可笑しな寝言を聞いているだけで頭痛が徐々に和らいでいる気がする。

「ありがと、楓」

「んふふ…………だあとのばあか」

何時も思つけど、寝言の意味は解析不可能だよね。どんな夢を見ているのか検討も付きません。

『お嬢様、やはり天人の匂いが残つてゐるでござる。かなり最近の物でござるよ』

「ふふ、ビンゴですわね。お手柄ですわよ、ダイゴロウ」

持ち前の嗅覚を遺憾なく発揮し、羽根の匂いを探り続けるダイゴロウ。犬と同じ行為は嫌だと散々吠えていた癖に、主人からの要望だと即座に聞き入れるんだな、この狼。主人に従順なのか、はたまた現金なだけか。

一週間近く継続された校内深夜探索、最終日。

開始当初から集合場所に指定している中庭に一旦集まり、全員の出席を確認。普段ならば班組み決定の為に少々時間を割くのだが、目的地が定まっている今夜は違つ。初の総員連れ立つての探索である。

「でも匂いがあるからって、天人が食堂なんかにいるのか？腹空かないだろ、あいつ等」

学内食堂までの廊下で、舞佳が先導している俺を見つつ疑問を口にする。

天人の詳細な情報は未だに不透明なままだが、神が自ら手掛けた駒に不利な点を作るか否か。上位天人ならば未だしも、完璧に戦闘の駒の下位や中位に食欲を与えた所で損益にしかならない。

少なくとも俺は今までの戦闘中に腹の虫を鳴らした天人は見た事が無いし、人間における三大欲求すらも欠損してゐる可能性が高いだろ。何ら機械と変わりないな。

「他に手掛かりがないからな。当ても無く探し回るよりは良いさ」「確かに隠れる場所は多いわよね、食堂つて。冷蔵庫の中とか子供がかくれんぼの時使いそうじゃない？」

流石に天人でも自ら業務用冷蔵庫に隠れるとは思えないが、早合点してはいけない。万が一相手が黒い翼持ちの上位天人ならば、尚更臨機応変な対応が重要だ。それこそ、食堂の食料食い荒らしてるんじやないか、程度の。本当だとしたら相当意地汚い天人だな。

「流石に食堂の冷蔵庫だと凍死しちゃうと思つけど……？」

「ごもっとも。柔らかく切り返してくれる灯火の暖かさが心地良いな。

まあ業務用冷蔵庫の中で凍死というのも、天人が恒温動物だつたら、が前提の話だが。どうせ気温の変化も関係ないだろうし、北極で鎧解除したとしても、天人ならば平然な顔をしているに違いない。

『ふむ……お嬢様。匂いの強さからして、先程ここを羽根の持ち主が通過した事は間違いないようだ』『ざる。近いで』『ざるよ』

ダイゴロウの言つ通りならば、食堂に今日まで追跡し続けた天人が潜んでいる可能性が高い。

黒い羽根を持つた鳥類の線が消失している今、遭遇するかも知れない天人が中位か上位かが問題だ。心の底から中位の突然変異型を望むが、上位だった場合、敵の戦闘能力は未知数。

選択としては、食堂の外側から襲われる事も考慮して、俺とエリ一ゼで戦力を別けるのが最良策か。

「よし、神葬具出しておくかッ」

「おい待て舞佳。バカ。お前本当に期待裏切らないな。落ち着くという事を知れ」

「バカって言うな！奇襲されたら困るだろうが！」

舞佳の言い分も理解出来なくはない。全員が神葬具を展開していない状態で天人から奇襲を受ければ、例え中位であつても惨事は免れないだろう。全てが未知な上位ならば尚更。

だが忘れないで欲しい。神葬具、大剣の燃費の劣悪さ加減を。洒落抜きに天人探索途中で所有者が力尽きる事も有り得る。楓や灯火のように低燃費なら別として、高燃費な舞佳に神葬具を長時間展開し続けるのは到底不可能。

「お前、奇襲に備えられる程持久力ないだろ？」

「そ、そりや……そうだけどさ」

舞佳が神葬具を呼び出せる時間は持つて二十分程度。ちなみに神葬具使いの平均的な展開持続時間は活動無しで約一時間。これだけでも驚きの燃費の差が窺える。

食堂内に天人が高確率で潜伏しているとして、内部に潜入する班員は常時神葬具を展開するのが前提。ならば持続力があり、天人を発見しても突つ走らない人員が最優先だ。

「楓と舞佳、エリーゼで食堂前に待機してくれ。俺と灯火で先に中を見て来」

「ちょ、ちょっと白！何であたし達は置き去りなのよ！」

「し、白様！？ 何故、わたくしを差し置いて円月輪使いを御選びに！？ それも、こんな野蛮人と一緒に番だなんて！」

「聞き捨てならない！どういう意味よ、メルヘン女！」

危険を最小限に抑える為の最も堅実な案だと思うが、舞佳に次いで、今度は金髪一人に意義を申し立てられた。この学園では理由を話す前に反論するのが流行なのか。まともに作戦会議すら行えないぞ。

まあ正直、班を決定した俺自身も、エリーゼと楓を合わせるのは非常に不味いと思うが、致し方ないのだ。

顔色が悪化しているのを必死で隠そうとしている灯火。万が一、外組が襲われたとして、エリーゼが他人を守ろうとしない以上、唯一の手負いは俺が担当しなければいけない。相手の勢力が判明していない分、灯火一人を守るのが精一杯な訳だが。

「し、白……僕で、良いの？」

鋭い八重歯を見せつつ威嚇する楓と、懇願する捨て猫のような顔のエリーゼに、どう説明するか一考していると、驚愕に満ちた表情

のまま灯火が言う。

灯火も自分の体調の悪さは自覚しているのだろう。だからこそ、同行班に選出されるとは考えてなかつたに違いない。甘いな、俺は日頃癒しを与えてくれる少女の為ならば自分から逆境に向かう性質だ。

「なあに、灯火の一人や二人、守るのなんて楽勝だ。任せな」

「えっと……僕が一人もいたら困るんだけど。で、でも……選んでくれて有難う、白」

病人と同等に青白く染まつた頬へ、少しばかり朱色が染み込む。初々しい大和撫子つて良いな。外国では十分に色香を纏つた年上の女性ばかり見て来たから、逆に灯火のように控えめな性格の子が新鮮だ。是非とも初心で純粋なまま育つて欲しいものである。

「おい白、行くなら早くした方が良いぞ」

確かに目的の食堂扉の前で話し込んでるのも時間の浪費か、と思いまいや苦笑いしつつ舞佳がある方向を指示示す。灯火と俺の視点も釣られて移動。

「あいつ等が気付かない内にな」

「あら、今宵は生意氣な子犬がよく吠えますわね！鞭の躰が必要かしらー？」

「言ひじやない青色一号！普段から氣に入らなかつたけど堪忍袋の緒が切れたわ！天人の前にアンタをぶつ倒す！」

「氣品も優雅さも欠如した言葉使いですわね！神葬具使いとしての力量以前の問題ではなくて！？」

「そつちこそ何世紀前の口調よ！服のセンスと一緒に言語まで世紀

前まで置いてきたつてわけ！？」

お互い様な口論を繰り広げる金髪二人の間に、激しく火花が飛び散っている錯覚が見えた。

喧嘩するなら、せめて校舎を破壊しないよう穩便に済ませてくれ。結局、黒羽から説教を被るのは全部俺なんだから。あの黒羽独特的の責め立てる説教を知らんお前等には分かるまい。

兎に角、二人の論争に巻き込まれる前に目的を果たさなくては。決して飛び火は勘弁、という事ではないぞ。

髪を結んでいる紐をきつく締め直し、気合を入れた灯火と額き合うと、金髪一人の口論を背に食堂の扉を開く。

使用する者がおらず、当然明かり等は灯されていない食堂内。沢山の生徒達が一気に食事へ押し寄せる場だけあって、だだっ広い空間に鎮座した大量の長机。探索の面倒さも然る事ながら、正体不明の敵が潜んでいるとなると、不気味さ加減が軽く五割増。何も見なかつた事にして寮へ直帰したい感情が湧き上がる。

「気を付けろよ、一人とも。何か遭つたら直ぐ乗り込むからな」

「ああ。んじや、しつかり戸締り頼むぞ」

舞佳の言葉へ応答すると、重々しい音を立てつつ食堂の扉が閉じられる。この学園って、西洋風なのか知らんが無駄に扉厚いんだよな。ほぼ毎日開閉する教室も同じだし、勘弁してくれ。何故日常生活で訓練しなければいけない。これも黒羽の策略か。

3-1『知りたがるの止まぬ痛み』（後書き）

やつと完全版……しかし、出てもいないのに章が進み過ぎてこる。いや、こいつの話です。つていつか夏風邪つて長引きましたね……結構辛いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n011s/>

神葬具 † AVENGE WEAPON †

2011年10月9日15時16分発行